# 宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ

## 詳　説　編

1999.3

宮崎県教育委員会

# 序

日頃より文化財の保護、活用に対し深いご理解、ご協力をたまわりまして、厚くお礼申し上げます。

ここに中近世城館跡緊急分布調査の報告書第２集がまとまりました。昨年度刊行いたしました第１集で県内の城館跡の地名表と分布地図を掲載したところですが、本書はそれらについての解説文と縄張り図・略測図を掲載しています。

中世山城は、深い山中にあることが多く、縄張り図の作成には多大な苦労がつきまとうものと推察いたします。ここに掲載されております縄張り図はそういった苦労の結晶であり、地元の研究者、担当者の方々の熱意のたまものと言えましょう。ここで、調査に対しましてご尽力下さった関係者の方々に心より感謝申し上げます。

本書が、中近世城館跡の保護・活用を図るための基礎的資料として、また、学校教育や生涯学習の資料として利用されますことを切に願うものであります。さらに、今回の調査を機会に、中近世城館跡の調査・研究がより一層進展いたしますことを祈念いたします。

平成11年３月

宮崎県教育委員会
教育長　笹　山　竹　義

# 凡　　例

1．本書は宮崎県教育委員会が文化庁国庫補助金を受けて実施した宮崎県中近世城館跡緊急分布調査の報告書第２集である。
2．調査は、平成５年度からの５か年間という当初の予定を１年延長し、平成10年度まで実施した。
3．この報告書第２集には、第１集で挙げた城館跡の解説文と論考を掲載している。
4．本書の編集は、宮崎県教育委員会文化課主査　吉本正典が行った。
5．城館跡に関する基本的な用語は、『日本城郭大系』２（1981　新人物往来社）等に準拠した。
6．第Ⅳ章２の通史的記述に関しては、『宮崎県史』通史編中世（1998　宮崎県）を参考にした。
7．宮崎郡佐土原町は、調査時においては県北地区に含めたが、今回の報告では県央地区の中で扱った。
8．今回の調査で作成した縄張り図は、各市町村が作成した５千分の１、１万分の１地形図や、国土地理院発行の２万５千分の１地形図を拡大したものを基にしている。縮尺は２千分の１および２千５百分の１を基本としたが、統一はしていない。特に方位を示すもの以外は上が磁北となる。
9．第Ⅳ章の各解説文は、調査指導委員会の指導のもと、調査員と事務局職員が執筆した。分担は別表の通りである。なお、用語等の統一をはかるため事務局側で原文に手を加えた箇所がある。従って、記述内容の最終責任は編集者にある。
　記述にあたって参考にした文献類は各項目の文末に掲げた。ただし第１集の地名表の「文献」欄に記載されている頻出文献については原則としてとり挙げていない。
　縄張り図の原図作成者名は下部に明記した。
10．第Ⅴ章は、今回の調査で浮かび上がった問題点を各調査員が掘り下げたものである。各編は独立した論考として取り扱っており、そこでは編集者による用語等の統一は行っていない。
11．本文中においては、基本的に敬称を略している。ここで非礼をお詫びしたい。
12．本調査で収集した基礎資料は、宮崎県教育委員会文化課、および宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。
13．資料の整理に際して、整理作業員の協力を得た。

（別表　解説文執筆者一覧）

| | | |
|---|---|---|
| 甲斐 | 典明 | 延岡市松尾城、西階城、井上城 |
| 九鬼 | 勉 | 日之影町 |
| 福田 | 泰典 | 北郷村、北川町、北浦町、諸塚村 |
| 緒方 | 俊輔 | 高千穂町 |
| 緒方 | 博文 | 日向市庄手城（仮称） |
| 島岡 | 武 | 川南町松山墨 |
| 崎田 | 欣二 | 西都市有峯城 |
| 釜瀬 | 明宏 | 西都市都於郡城 |
| 木村 | 明史 | 佐土原町佐土原城 |
| 市田 | 寛幸 | えびの市 |
| 市田 | 政瑠 | えびの市 |
| 時任 | 直也 | 宮崎市宮崎城 |
| 島田 | 正浩 | 高岡町穆佐城 |
| 大学 | 康宏 | 高原町高原城 |
| 山下 | 博明 | 山之口町 |
| 粂畑 | 光博 | 都城市都之城 |
| 岡本 | 武憲 | 日南市飫肥城 |

上記以外は、調査者の所見や聞き取りを基に、事務局職員が執筆した。

# 目　次


Ⅳ　城館跡評説 …… 1
1．記述・表現について …… 1
2．概　観 …… 3
3．研究小史 …… 6
4．県北地区 …… 8
5．県央地区 …… 97
6．県南地区 …… 154

Ⅴ　特　論
中近世の縣（延岡）の城郭　甲斐　典明 …… 194
県北部山間地の中世城郭について
～塚原城跡（諸塚村）をもとに～　福田　泰典 …… 202
「飫肥城改築願古図」について　岡本　武憲 …… 207
都之城の城域について　桑畑　光博 …… 209
中近世城郭関係史料目録(2)　若山　浩章 …… 217

Ⅵ　おわりに …… 259

索　引 …… 260

# Ⅳ　城館跡詳説

## 1．記述・表現について

この章では、各城館跡について解説を加える。今回の調査で確認した「城館跡」の中には様々な時代、内容、質的レヴェルのものが含まれる。とりわけ、地名や記録・伝承のみ残る場合、地形から可能性は感じ取られるものの確証は得られない場合も目立つため、その根拠を記載するように努めた。なお、第１集で述べたように、「～城」とした城館跡の名称は、ほとんどの場合地元で通称されているもので、「～城と呼ばれている城館跡」あるいは「～城の可能性の高い城館跡」が本来の意味である。

掲載した縄張り図[1)]の中で、過去に刊行物等に発表されたものは、それを再録した。また東郷町山除城については村田修三氏より、高鍋町高鍋城、清武町清武城、三股町梶山城については八巻孝夫氏より原図の提供を受けた。それらについては、スケール等の貼り込みを行った以外、原則として手を加えていない。

今回の調査で新たに作成したもの、及び特別に作成者の許可を得たものについては、事務局側で遺構の表現方法を統一した上で一括製図している（次頁別図参照）。そのため、原図との微妙な違いが生じる可能性が考えられ、最も危惧するところであるが、原図使用に際しての責任は編集者にあること、原図の他所での使用や加筆・修正を規制することは一切ないことをここで明記しておきたい。

なお、縄張りが複雑で、記述が著しく煩雑になる恐れがある場合についてのみ、曲輪に番号（Ⅰ…）を付している。既発表のものは作成者の付した番号を踏襲している。ただしあくまでもそれらは便宜的なものであり、必ずしも歴史的意味を有する訳ではない。また『日向地誌』等に曲輪の呼称が記されている場合や、曲輪名の伝承が残るもの（～城、～丸など）についても、図中に記している。

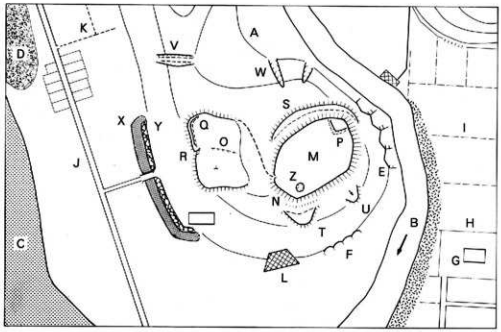
地籍図を基にした図では、畑地はV、山林はΛ、水田は無印で表現している。

註

1）千田嘉博　「中世城館縄張り調査の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』35　1991　国立歴史民俗博物館

千田嘉博　「中近世城館研究の構想」『中世の城と考古学』　1991　新人物往来社

別図




表現方法解説

| | | |
|---|---|---|
| A 等高線（10m毎） | B 河川名（矢印は流れの方向） | C 海（湖沼については網かけはなし） |
| D 岩礁 | E 岩の露頭 | F 斜面の崩落箇所 |
| G 民家 | H 家屋等の境界線 | I 畦畔 |
| J 道路 | K 小径 | L 構築物 |
| M 曲輪 | N 切岸 | O 明瞭でない段落ち |
| P 櫓台 | Q 土塁 | R 虎口 |
| S 帯曲輪（等高線に沿う形状の細長い曲輪を指す） | T 腰曲輪 | U 傾斜の残る腰曲輪 |
| V 堀切 | W 竪堀 | X 水堀 |
| Y 石垣 | Z 陥没箇所 | |

## 2．概　観

### (1)　中世の有力武士団と城館跡

日向（現在の宮崎県域と鹿児島県の一部を含む）では、11世紀中頃より、急速な勢いで広がりを見せた荘園・公領を基盤にして、土持氏、伊東氏、島津氏をはじめとする諸氏が力を振るった。

土持氏は、もとは宇佐八幡宮の神官とされる。国衙系の有力氏族である日下部氏に代わって日向一円に広がったが、最終的には県（のちの延岡）土持氏のみが残った。

伊東氏の祖は源頼朝の家臣の工藤祐経と伝えられ、建久年間には県荘、富田荘、田島荘、諸県荘などの宇佐宮領荘園の地頭職を得、庶家が鎌倉時代中期頃に、遅れて南北朝期には惣領家も日向に下向する。宇佐宮領荘園や日向国衙の実質支配を通じて勢力を伸展させた。

島津氏は、元暦２（1185）年に惟宗忠久が南九州三国に広がる島津荘の惣地頭職及び三国の守護に任ぜられれた。鎌倉時代初期に、いったんは日向・大隅の守護・地頭職を失うが、鎌倉時代後期より薩摩を本拠にして一族が勢力を伸ばしていく。

南北朝期には、土持氏や伊東氏惣領家などは北朝方であったが、南朝方にも肝付氏らがいて根強く、争乱が永く続いた。また将軍家足利氏は、国大将として畠山義顕（直顕）を送り、重視した。この時期、島津貞久が日向の守護に任ぜられているが、日向の「料国化」を目指す足利氏の意向もあってか、間もなく解任されている。島津氏が南九州三国の守護に復するのは応永年間の元久の代以降である。

なお日向においても、南北朝期の築城伝承のある城館跡はかなりの数に上るが、多くは戦国期の改修を受けているようである。

やがて16世紀後半に至り、庶家をおさえた伊東氏と島津氏が勢力を争い、衝突を繰り返すようになる。飫肥や真幸など、県南地区を中心にそうした状況を示す城館跡が数多く分布している。伊東氏は最盛期には日向一円に版図を広げ、俗に伊東氏48塁[1]と称される勢力圏を築き上げたが、元亀３（1572）年の島津氏との木崎原の合戦に敗れ、急速に没落した。

南九州を制圧した島津氏は天正６（1578）年に、南進してきた大友氏を退けた（高城・耳川の合戦）。しかし天正15（1587）年には豊臣氏に降り、それにより豊臣氏の九州支配が確立した。県北から県央地区にかけて、それらの諸戦の際に築かれたと伝えられる陣・砦・塁跡が残る。

慶長４（1599）年から５年にかけて、庄内の乱と呼ばれる島津家内の内乱が都城盆地で勃発しており、当地の城郭の中には、その際の緊張状況を示すかのごとく、土塁や空堀に改修の痕跡が認められるものが存在する。

### (2)　地理的特徴と城館跡

調査に際して県土を県北地区、県央地区、県南地区に３区分したことは、既に第Ⅰ章で述べた通りである。その区分は多分に便宜的なものではあるが、他方、一面では地域ごとの中世城館跡の特徴をあらわしているように見受けられる[2]。

県北地区から県央地区の山間部にかけての地域では、山がちな地勢を反映して、細い尾根筋の上を鎖のように曲輪が展開する、いわゆる中世山城の一類型とすべき形態のものや蛇行する河川に向かって突き出た丘陵の端部に城域を設定するものが多く認められる。一方で、さほど造作を施さない小規模な城郭も目立つ。それら山間部の城郭は、主要ルートを押さえる位置にある場合が多い。

県央地区の宮崎平野外縁部や県南地区では、入戸火砕流堆積物（通称シラス）を基盤とする台地地形（シラス台地）が卓越し、多くの中世城館はその端部に築かれている。シラス台地は上面の起伏こそ少ないが、水の浸食作用に対して弱いという特性から河川、流水の影響を受けやすく、縁辺部は急崖を成す。中世城館はそのような地形を最大限に利用して大きな曲輪や深く幅の広い空堀を配置しており、「南九州型」[3]、「九州館屋敷型」[4]、あるいは「群郭式」[5]と称され、特徴を有する一群と認識されている。典型例として都城市の都之城［39－023］や山之口町山之口城［41－(1)］、串間市櫛間城［36－(4)］、高岡町穆佐城［27－(2)］が挙げられる。伊東氏の本拠である西都市都於郡城［16－019］の近辺は厳密に言えばシラス台地ではないが、類似する台地地形上に立地する。地形と在地武士団の特質とが絡み合って出現したものと表現できよう。

また、県内各地で海岸に築かれた城郭が認められる。延岡市浦尻城［４－(3)］、日向市日知屋城［５－(1)］、宮崎市紫波洲崎城［23－025］、南郷町目井城［38－(2)］などがそれで、浦尻城は水軍城であったとの伝承が残っている。各々の立地する地形によって構造は様々であるが、おそらくは築城者が基盤としたであろう「海洋」に足がかりを得るための（海上権や港湾を掌握するための）城郭であると評価できる。

(3) 方形館跡の検出

低地や低位段丘上に築かれた方形館跡は、日向においては地籍図による調査や発掘調査によって姿をあらわす場合がほとんどである。おおよその時期や構造が明らかになった例として、都城市上大五郎遺跡［39－(5)］や上の園第２遺跡［39－020］が挙げられる。

また県北地区において、「囲（かこい）」という特徴的な地名が散見されるが、これは館や防御的な屋敷地の呼称と考えられる。

(4) 近世の諸藩と城館跡

豊臣秀吉の九州平定後、島津氏は本領安堵となり、日向には県（後の延岡）に高橋元種、財部（後の高鍋）・櫛間に秋月種長、飫肥に伊東祐兵、佐土原には島津家久が配された。徳川幕府成立後もその配置が基礎となり、延岡藩領、高鍋藩領、飫肥藩領、佐土原藩領、鹿児島藩領、都城島津氏領、人吉藩属地（椎葉山と米良山）と天領から構成される、複雑な様相が展開されるに至った。

近世の城郭としては、延岡市の延岡城［４－013］が石垣を多用した典型例と言える。その他の近世藩の城郭である高鍋城［17－(4)］や佐土原城［26－(1)］、飫肥城［35－015］は、一部石垣を用いて近世城郭に仕立てているものの、実態としては中世以来の山城の一部を改修したものである。飫肥城跡が周囲の屋敷地とともに近世城郭のイメージのもと観光地化されたが、実はその周囲に広大な総構の中世城郭跡が広がり、多くは破壊されたことを岡本武憲が指摘している[6]。そのことや、各地に出現した「天守閣」から、県内では希少な存在である近世城郭に対する憧憬にも似た感情が読みとれる。

註

1）いわゆる伊東氏48塁は、『日向記』の「分国中城主揃事」による。『宮崎県史』に一覧表が掲載されている。

北郷泰道　「考古学から見た中世社会」『宮崎県史』通史編中世　1998　宮崎県

2）北郷泰道は、県北部の城館の特徴を「丘陵立地型」、県南部のそれを「台地立地型」と表現している。

北郷泰道　「日向の中世城館跡」『宮崎県地方史研究紀要』20　1991
3）村田修三　「城の分布」『図説　中世城郭事典』3　1987　新人物往来社
4）千田嘉博　「戦国期城郭・城下町の構造と地域性」『ヒストリア』129　1990
5）八巻孝夫　「都之城跡」『都城市文化財調査報告書第45集　都城市の中世城館』　1998　都城市教育委員会
6）岡本武憲　「南日向の中世城郭　－飫肥城を中心として－」『宮崎考古』13　1994　宮崎考古学会

## 3．研究小史

宮崎県内においては、近年まで中近世城館跡に関する研究の熟度は決して高いとは言えなかった。無論、延岡城[1]や都於郡城[2]、飫肥城[3]について触れた概説書類や、石川恒太郎が行った宮崎県内の城館跡の紹介[4]などは、現地調査の手引きとして貴重なものであるが、分析・検討といったところまでは深化することはなかった。また市町村史などで取りあげられている場合でも、ほとんどが通史的記述の中で触れられる程度で、多くの中世城郭はなかば等閑視されている状況であった。

そのような中、北郷泰道による山田城の復元[5]や、発掘調査、測量の所見を取り入れた穂北城の考察[6]、日向の城館跡の概観[7]といった作業は、その後の研究の端緒となり、本事業に結びついていったと評価できよう。

また各種開発事業の進行に伴い城館跡が発掘調査の対象となるケースも増えている。城館跡全体の縄張りを把握した上で調査を実施した例は、宮崎学園都市遺跡群の車坂城［23－㉓］、今江城（仮称）［23－㉒］が最初である。近年では、串間市櫛間城［36－(4)］や都城市都之城［39－㉓］、安永城［39－㊵］など、城域全体、あるいは曲輪全面を対象とする大規模な事例も見られる。詳しくは各項目での説明に譲るとして、ここでは大要を記すことにする。

櫛間城跡の調査では掘立柱建物などの中世の各種遺構に加えて、近世初頭の改修や廃城の痕跡が認められた[8]。

都之城の主郭部では、多数の柱穴の他、道路と石積み列、地鎮・鎮壇遺構等が検出された。桐紋瓦も出土している[9]。

安永城の主要曲輪の一つである金石城跡では、掘立柱建物や道路、鍛冶工房跡などの遺構が確認された[10]。

それらの他、調査規模は大きくないが、各城館跡の細かな構造の把握につながる重要な成果が得られている場合もある。その中には佐土原城など史跡整備に係る調査もあり、「城館史」の解明に考古学的手法が取り入れられるようになったことが、近年の趨勢と言えるであろう。

そういった気運を反映して、1990年には宮崎考古学会による研究会資料集がまとめられた[11]。また1997年には、宮崎県埋蔵文化財センター主催の「日向の城を読む」と題するシンポジウムも開催された[12]。無論、「埋蔵文化財」として扱われる以上、事実の解明と引き替えに、程度の差はあれ「破壊」を受けているという事実は指摘せねばならない。

都城市教育委員会により刊行された『都城市の中世城館』では、市内の城館跡について「構造・規模」と「立地傾向」の両面から類型化を行い、それらの在り方について検討を加えている[13]。地域の城館跡の正確な理解につながる重要な作業であると評価できる。

また都城市では、都之城の総構をめぐる議論も交わされた。重永卓爾[14]、横山哲英[15]、桑畑光博[16]の各氏により、従来の認識よりも格段に広い城域が示されている。

註

1）石川恒太郎　『延岡の二城』　1935　延岡新聞社

2）大町三男　『都於郡懐古』　1978

3）澤　武人　「飫肥と飫肥城」『宮崎県地方史研究紀要』6　1980　宮崎県立図書館
　飯田達夫　『飫肥城と伊東家』Ⅰ～Ⅴ

4）石川恒太郎　「宮崎県」『日本城郭大系』16　1980　新人物往来社
5）北郷泰道　「北郷氏における中世城郭とその社会（その壱）」『宮崎考古』石川恒太郎先生追悼論文集　1992　宮崎考古学会
6）北郷泰道　「穂北城調査をめぐる諸問題について」『穂北城跡』　1992　宮崎県教育委員会
7）北郷泰道　「日向の中世城館跡」『宮崎県地方史研究紀要』20　1991
　同上　「考古学から見た中世社会」『宮崎県史』通史編中世　1998　宮崎県
8）宮田浩二・東　憲章　「宮崎県南部における中世城郭の一例　－串間市櫛間城」『宮崎考古』13　1994　宮崎考古学会
9）桑畑光博　「都之城（主郭部）」『都城市文化財調査報告書第13集　平成元年度遺跡発掘調査報告』　1991　都城市教育委員会
10）横山哲英編　『都城市文化財調査報告書第19集　金石城跡』　1992　都城市教育委員会
11）宮崎考古学会　『平成２年度宮崎考古学会秋季研究会　日向の中世山城の現状と課題』 1990
12）宮崎県埋蔵文化財センター　『日向の城を読む』　1997
13）桑畑光博編　『都城市文化財調査報告書第45集　都城市の中世城館』1998　都城市教育委員会
14）重永卓爾　「小結」『都城市文化財調査報告書第18集　瀬戸ノ上遺跡』1992　都城市教育委員会
15）10）に同じ
16）桑畑光博　「日向国都之城の城域について」『大河』6　1996　大河同人（鹿児島）

## 4．県北地区

### 1　西臼杵郡高千穂町

**(1) 崩野城**

河内と五ケ所の間の崩野峠付近にあったとされるが、詳細は不明。当地域の領主であった三田井氏、およびその家臣の築いた高千穂48塁の一つ。

なお、三田井氏およびその家臣やいわゆる高千穂48塁の位置・名称に関しては、下記文献を参考にした。

文献

1）西川　功　『高千穂太平記』　1987　青潮社

**(2) 五ケ村**

高千穂48塁の一つの「岩戸城」か。五ケ村の集落を見下ろすところに「城山（じょんやま）」という地名が伝わる。単郭のようである。

**(3) 永の内**

当地も「岩戸城」と伝えられる。明瞭な遺構は見られないが、周辺に「布城」「陣」「馬場」「射場のもと」「かこい」などの地名が残る。

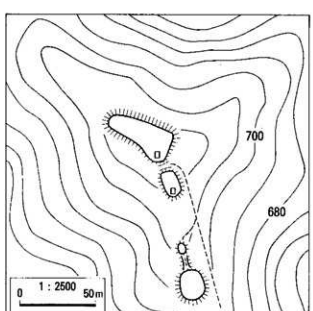
**(4) 岩戸出城**

高千穂48塁の一つである「岩戸出城」に比定されるが、現在までのところ明瞭な遺構は確認されていない。

**(5) 左右殿城**

標高731mの「城山」山頂に主郭と見られる平坦地がある。その南側にも一段低い曲輪があり、その間は空堀状を呈する。その南側尾根上にも曲輪群が展開している。

高千穂48塁の一つとされる。



左右殿城縄張り図（九鬼　勉原図作成）

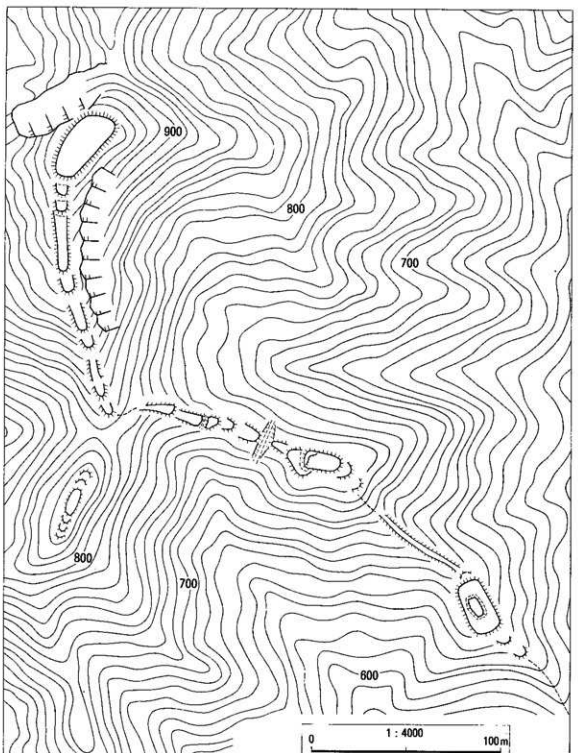
**(6) 詰の尾羽根陣**

天正19（1591）年に高橋元種が、対岸の亀山城を砲撃した際に陣を構えたと伝えられるところ。

**(7) 玄武城**

龍泉寺の集落の北西にある標高970mの険しい山地に築かれており、その頂部付近が主郭と考えられる。頂部より南方向および南東方向に尾根が続いており、多くの小さな曲輪が築かれている。主郭より南方向にのびる曲輪には「城屋敷」の地名が残る。また東南側には「城ン岳」と称される曲輪もあり、そこにはL字形を呈する土塁が築かれている。「城ン岳」の西側には堀切が認められる。城域は南北約800m、東西約500mに及ぶ。

高千穂48塁の一つとされる。城主は三田井氏家臣の吉村氏であった。天正年間に大友氏の攻撃を受けて落城。




玄武城縄張り図（緒方俊輔・北郷泰道原図作成）

(8) 柚木野城

柚木野の集落の西方にある山丘上に立地する。頂部の標高は566mで、最高所にやや広い曲輪があり、その南東側に一段低い帯曲輪状の平坦地が認められる。高千穂48塁の一つ。なお、最高位地点には小祠があり古墳として史跡指定（県指定上野村古墳10号）されている。

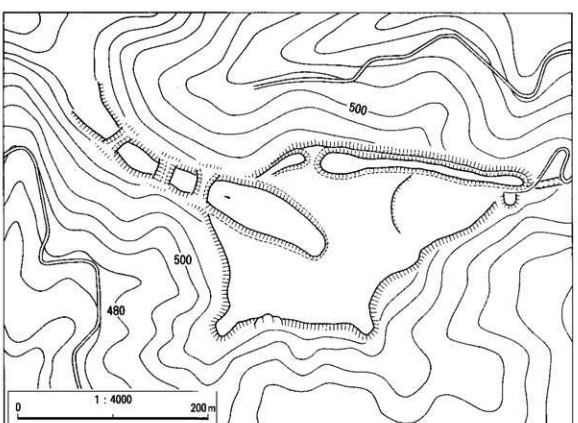
(9) 太鼓台

亀頭山城に関連するする砦の一つと考えられる。

(10) 亀頭山城

奥鶴の集落から南東方向にのびる尾根を、3本の空堀で裁断して城域を設定している。三日月形を呈する主郭部分（標高約560m）とその北東側にある一段低い平坦地が主たる曲輪で、端部には櫓台らしき突出部がある。城域は南北約200m、東西約500mに及ぶ。

高千穂48塁の一つとされ、高橋元種の軍勢の攻撃を受け落城。その時の城主は甲斐将監惟房と伝えられる。




亀頭山城略測図（北郷泰道原図作成）

(11) 古城

高千穂48塁の一つの「古城」か。これも亀頭山城と関連する砦と考えられる。

(12) 下の城

亀頭山城の北側の、やはり南東方向にのびる台地を土塁で防御している。高千穂48塁の一つとされる。

⑬ 馬見原城

現在の田原中学校地にあったと推定されるが、遺構は不明瞭。西集落の西方向の丘陵上に存在した可能性もある。

⑭ 高城

標高617mの山丘上にある。現在頂部に祠があり、その部分が曲輪と見られる。高千穂48墨の一つとされる。山麓には江戸時代に夕塩番所が置かれていた。

⑮ 伊東氏小崎屋敷

天正5（1577）年末から同6年に、伊東氏が豊後に敗走していく際に宿営を張ったとされるところ。

⑯ 花見山淡路城

現在の高千穂高校の裏山付近を中心に直線的に曲輪が展開する。主郭と推定される曲輪の標高は372mで、南西端部には土塁が認められる。さらに、周辺の「城山通り」「城ノ平」などの地名を考慮すると現在の高千穂警察署や武道館付近の高所まで城域が広がっていた可能性もある。

三田井氏の城郭で、高千穂48墨の一つとされる。

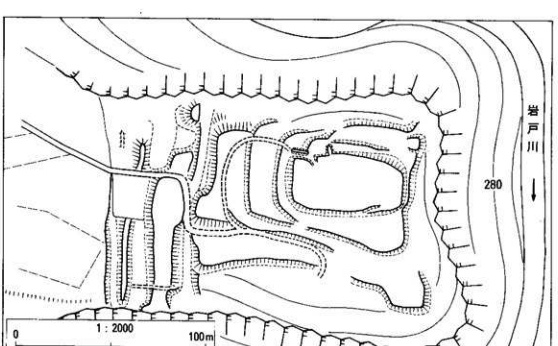
⑰ 古賀城

現在町立病院のある台地付近と考えられる。この付近の字は寺迫となっており、古賀ではないが、戸高又一氏宅の屋号に「神家」や「木家」と書く「こが」が残っている。

高千穂48墨の一つに数えられ、花見山淡路城の出城とされる。

⑱ 亀山城［大野原城］

西方向からのびる台地を3本の土塁と2本の空堀で区切り、端部に城域を設定している。北、東、南の三方向は岩戸川に面した断崖となっている。




亀山城縄張り図（北郷泰道原図作成）

中央に主郭とすべき曲輪があり、その周囲には3段の帯曲輪が取り巻くように設けられている。主郭部分の標高は362m。北東側には櫓台と見られる張り出し部分がある。また主郭の虎口は枡形を呈している。城域は南北約120m、東西約180mを測る。

高千穂48塁の一つとされ、高橋元種の軍勢の攻撃を受け落城。城主は三田井氏家臣の富高弥十郎長義と伝えられる。

**⑲ 車迫陣内**

**⑳ 桑水流陣内**

いずれも「陣内」という地名の由来は定かでない。

**㉑ 押方城**

深い峡谷を刻む五ヶ瀬川右岸の、東方向にのびる台地上（地福寺地蔵堂の辺り）に存在したと推測される。高千穂48塁の一つ。

**㉒ 太鼓原**

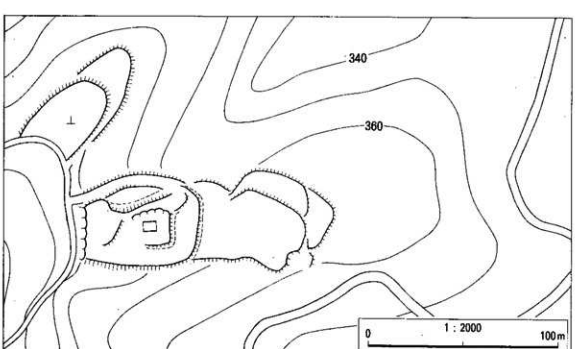
国見ケ丘の南方の山丘上にあたる。方形の曲輪らしき部分があり、「太鼓番の墓」と伝えられる墓石がある。

**㉓ 芝原囲**

現在、県指定史跡「吉野朝勤王家　芝原又三郎の墓」がある。「囲」「垣内」「堂屋敷」等の屋号が残るが、遺構等は不明瞭。

**㉔ 仲山城［三田井氏宅跡］**

五ヶ瀬川右岸の丘陵端部に築かれた三田井氏の本城である。大字三田井方面とは深い峡谷（高千穂峡）によって隔てられ、背後は山地が迫るという、守りに適した立地と言えよう。主郭部分とその東側に数段の削平地が見られる。北および南東側には深い谷が入る。




仲山城縄張り図（甲斐聰大原図作成）

なお、図に示した範囲の東～南側にも段状の平坦地が続くが、棚田の開削による影響もあるようで、判別が困難となっている。

主郭の北西側には「高千穂太郎の墓」が建つ平坦地があり、その部分も城域内と考えられる。また後述する賀志原城や椎屋谷城も一連の城館と見られ、それらを含めて三田井氏の本拠の城館群が構成されていたと推定される。付近には「義雲寺」「宿千軒」「引地」「城やしか」「御内の御所」「親貞やしき」「重武士やしき」「立馬場」「西ノ馬場」などの地名が残る。

現在の西臼杵郡一帯は、中世には高知尾荘に属し、ここを基盤に在地領主の三田井氏が高千穂48墨と称される勢力圏を築いている。当城はその中核的存在で、「中山城」とも書く。天正19（1591）年、県（のちの延岡）に入った高橋元種の侵攻により落城し、それにより三田井氏は滅亡する。

**㉕ 賀志原城**

仲山城の南西方の山地中に小さな平坦地がある。仲山城の詰城か。高千穂48墨の一つとされる。

**㉖ 椎屋谷城**

仲山城の南東の、谷部に面する台地上に存在したという。現在では段差のある畑地は認められるものの、明瞭な遺構を確認することはできない。

**㉗ 黒仁田城**

南～南東方向にのびる丘陵上に立地する。遺構は不明瞭であるが、付近に「御座」「囲」「馬場」「前園」「堂屋敷」などの屋号が残る。

**㉘ 谷城**

「谷城」の字名が残るところである。五ヶ瀬川の支流である秋元川左岸の丘陵端部に立地すると見られるが、開削が進み遺構は明瞭でない。

**㉙ 城ケ崎**

谷川に向かって突き出た丘陵上にあたる。ここにも城館関連の字名が残っているが、遺構は明瞭でない。

**㉚ 上ノ切若狭屋敷**

諸塚山の北麓の「上の切」の集落内にあたる。現況は宅地、畑地。有力者の居館があったと伝えられるところである。

## 2　西臼杵郡日之影町

### (1)　神華城

五ヶ瀬川の支流の日之影川に面する丘陵上に平坦地が見られ、そこは現在墓地となっている。土塁状の施設も認められる。

### (2)　宮水囲城

高千穂48塁の一つと伝えられる。現在は不明瞭となっているが、聞き取り調査によれば、舌状の台地を区切る2本の空堀があったという。

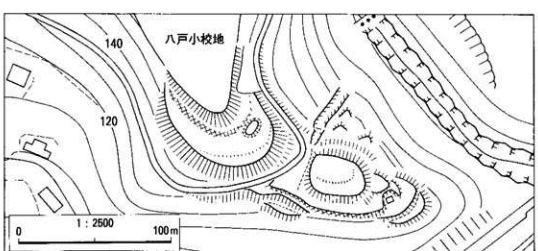
### (3)　宮水代官所

近世延岡藩の代官所跡。方形の区画が残る。天保14（1843）年に後述の舟の尾代官所より当地に移転した。

### (4)　八戸城

高千穂48塁の「八戸城」については、該当する城館跡が特定されていない。『史蹟調査』には、天文19（1550）年、津隈越後守が現在の昌龍寺地内に「築城」したと記されていることから、そこが有力な候補地と言える。一方、分布地図で示した八戸小学校地付近も、地形の状況や曲輪とおぼしき平坦地が存在することなどから城郭跡である可能性が指摘できる。

ここでは八戸小学校地付近の城郭推定地の縄張り図を掲げた。




八戸城推定地縄張り図（甲斐典明原図作成）

### (5)　中村城

高千穂48塁の一つとされるが、現在は水田や畑地となっており、遺構は不明瞭。当町内の城郭跡は概して小規模で、内容の判然としないものが多い。

### (6)　深角松葉城

高千穂48塁の一つで、工藤監物が城主であったと伝えられる。現在は土取りにより消滅している。

### (7)　一の水城

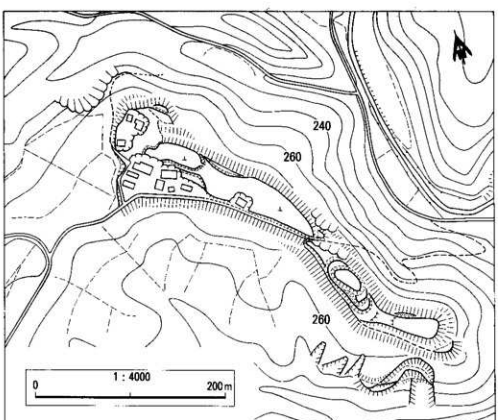
五ヶ瀬川支流の長谷川に向かって突き出た丘陵上にあり、城ケ崎、南斜面には「引地」の地名も残っている。最高所の標高は287m、長谷川との比高差は約80mを測る。

昭和7・8年に耕地整理された台地部の西側は水田となっており、南方向へのびる上野岳の尾根筋に連なり、その北側には一の水神社が鎮座している。北側には深い谷が入っており、急峻な地形となっている。南側はなだらかな斜面が続くが、先端近くでは4本の竪堀と急崖で仕切られている。

城郭は細長い尾根を削平して築かれており、中間を旧高千穂往還が横切る形で通り、東西の2郭に区切られている。旧高千穂往還の関所的な機能を持つ城郭と考えられる。

西郭の一部は畑地、住宅地として利用されており、特に住宅地部分は破壊が著しいが、北半分の杉林は比較的旧状を保っている。その中の最も標高の高いところに城主工藤監物の墓と伝えられている無銘の自然石がある。東郭は残りが良く、旧高千穂往還に面した西側は3段に造られている。

高千穂48墨の一つに数えられる。




一の水城縄張り図（甲斐典明原図作成）

(8) 舟の尾代官所

近世延岡藩の代官所跡。寛政9（1797）年に焼失したと伝えられる（『角川日本地名大辞典』45 角川書店 1986）。

(10) 石山城

高千穂48墨の一つに数えられる。標高900mの高城山の山頂にあったと伝えられるが、判然としない。

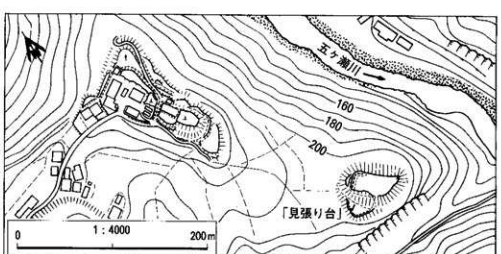
### (11) 下城

五ヶ瀬川右岸に位置する。標高は232m。北西から東側にかけては断崖（五ヶ瀬川水面との比高差約100m）に阻まれた天然の要害である。「見張り台」と呼ばれる南東側250mの曲輪の直下も「城が岳」と呼ばれる比高差約50mの断崖となっており、五ヶ瀬川下流域を眼下に見渡すことができる。

城域は、この「見張り台」部分と主たる曲輪群部分に大きく2分されている。主たる曲輪部分は住宅建設などにより破壊が進んでいるが、「見張り台」部分には腰曲輪、土塁等の施設が残っている。眼下の監視のための曲輪と考えられる。

主郭の中央部には、安政7（1870）年に付近の山本、古城、赤星の3家の祖先が建立した「下城主森何某古城」の石碑が建っている。ただし高千穂48塁関連の城主に森氏は存在せず、検討の余地が残る。隣接する大人（おおひと）地区は、三田井氏の重臣の甲斐宗摂の本拠地であり、その支城の一つであろうか。

なお、「下城」に対する「上城」が存在した可能性が考えられるが、その位置は現在のところ判然としない。



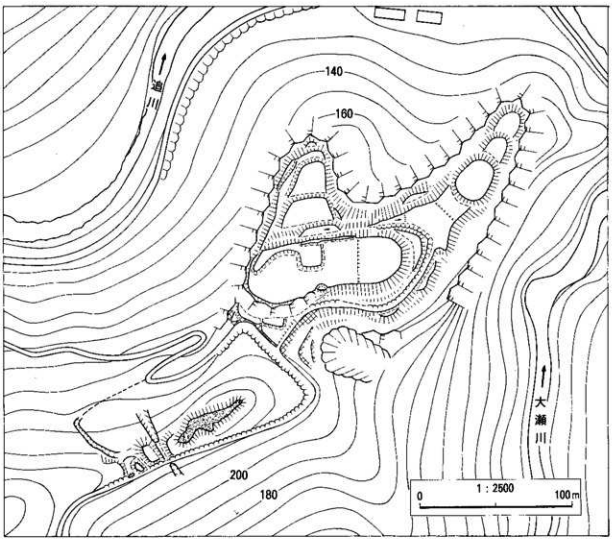

下城縄張り図（九鬼　勉原図作成）

### (12) 中崎城

五ヶ瀬川右岸の、北東方向に突き出た丘陵の端部に立地する。西方の尾根筋以外の三方向は断崖となっている。

城域中央部に主郭と見られる比較的大きな曲輪があり、その北西部分に一段高いところがある（標高222m）。その主郭から北、および北東方向に段状の曲輪群が展開する。南西側の尾根の狭隘部には堀切を設け、あるいは斜面に竪堀を設けて往来を遮断している。南西部の堀切と丘陵先端の間の長さは約350mに及ぶ。ただし南西側の堀切と主郭を中心とする曲輪群の間は、標高こそ最も高いが、岩盤が露出するなど造作の跡は明瞭でない。

高千穂48塁の一つに数えられ、元亀～天正年間に三田井氏の家臣の甲斐宗雪が当城に拠ったと伝えられる。宗雪は、後に寝返って高橋元種に応じ、仲山城の三田井親武を攻めた。




中崎城縄張り図（甲斐典明原図作成）

### ⑬ 小原城

これも高千穂48景の一つと伝えられるが、現在は「五人田」と呼ばれる水田となっており、遺構は不明瞭。

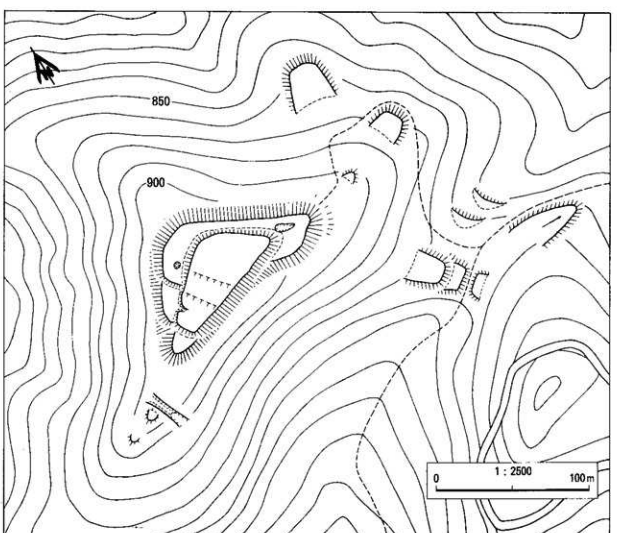
## 3　西臼杵郡五ヶ瀬町

### (1)　樺木岳城

熊本県境に近い九州山地の中の、標高922mの山頂を中心に築かれている。

山頂部に主郭があり、その南側を除く三方向には一段低い腰曲輪が巡っている。主郭の西方には堀切を設け、往来を遮断している。さらに、未調査であるが北方の尾根上にも空堀があると伝えられる。南西側には「城山越」と呼ばれる古道が通っており、そこを監視する目的の曲輪もある。城域は南北約280m、東西300mの範囲におさまると見られるがさらに北西側、南西側に曲輪が続き、大きく城域が広がる可能性もある。東方には「桝形山」と呼ばれる山丘もある。

高千穂48塁の一つとされ、三田井氏の一族で、南北朝期に南朝方に応じた芝原又三郎性虎が築城したと伝えられる。後には、高擶元種家臣の土師甚右衛門が入っている（『五ヶ瀬町史』　1981）。




樺木岳城縄張り図（九鬼　勉原図作成）

(2) 桑野内囲

樽木岳城の北約1㎞の地点に位置する。芝原又三郎性虎の居館と伝えられるところで、現在は宅地や性虎を祀る祠堂がある。

かつては居館の周囲に空堀を巡らし、付近に倉屋敷、陣屋、馬場を設け、三所権現や厚福寺を建立したという。

(3) 川曲城

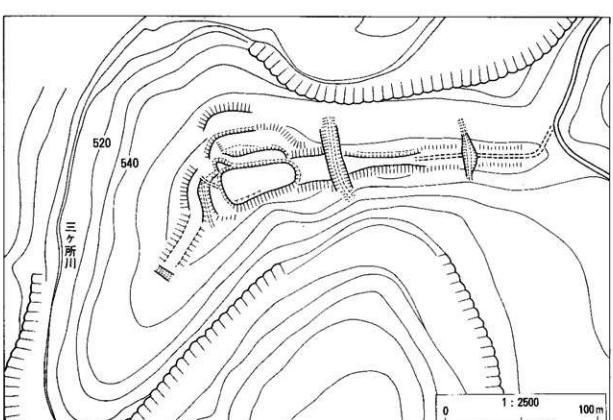
五ヶ瀬川の支流の三ヶ所川に向かって（東方向に）突き出た丘陵上に立地する。北側には名勝「うのこの滝」がある。

丘陵の付け根部の最も狭くなる部分（幅約50m程）に2本の空堀を設け、往来を遮断する。丘陵地上面の標高は約530m。2本の空堀の間は、両側に手が加えられ、土塁状に造成されている。城域は南北約100m、東西約250mを測る。

主郭の南側は峡谷に直に面する。反面、北側はやや緩やかに斜面を構成しており、明確な切岸の状態を観察することは困難であるが、2～3段に造成した跡が認められる。

丘陵先端部は、主郭の西側に空堀が設定されているものの、付け根部のそれとは異なり丘陵を裁断する形ではない。空堀の西側の高まりを土塁状に見立てながら、しかしその先は小さな空堀で分断される。峡谷の方向からの敵はあまり想定する必要がなかったと思われるが、主郭を挟んだ東西方向の防御には工夫が凝らされている。

県北地区の山間部における、丘陵立地型の城郭の典型例の一つとすることができよう。




川曲城縄張り図（北郷泰道原図作成）

(4) 矢ケ瀬城

次項の原城の対岸に位置する。突出した丘陵の端部に立地する城郭で、『五ヶ瀬町史』(1981) によれば3段の削平地や空堀の痕跡が見られるとのことである。ただし分布地図で示した位置には顕在遺構は見られず、兼ケ瀬の集落の北側にある丘陵がそれであった可能性も指摘できる。

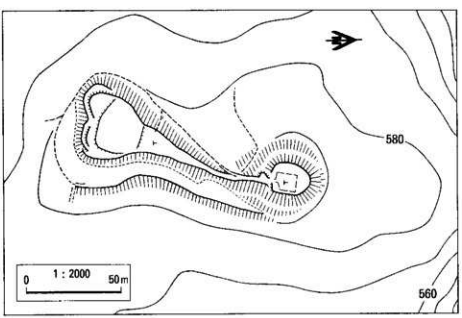
高千穂48墨の一つとされ、城主は兼ケ瀬綾部介惟賢であったと伝えられる。

(5) 原城

三ヶ所川の右岸（東側）の宮の原集落近くの南北に細長くのびる丘陵上に立地する。現在、主郭と見られる曲輪は墓地になっている。城域は南北約70m、東西約140mを測る。

『五ヶ瀬町史』(1981) によれば、付近には「大門口」「町」「火番墨」「宮の馬場」などの城郭関連の地名が残っているという。

高千穂48墨の一つに数えられる。甲斐氏の居城であった。



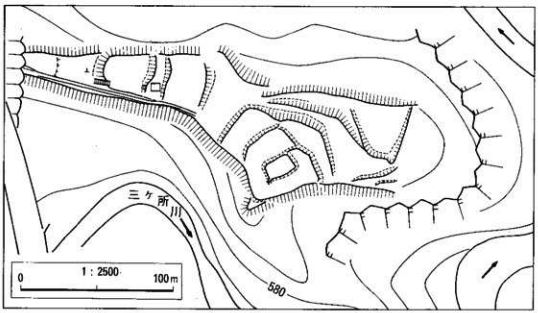

原城縄張り図（九鬼　勉原図作成）

(6) 坂本城

坂本の集落の東方の、三ヶ所川が蛇行する地点に位置する。東方向に突き出た丘陵上に城域を設定している。北側は緩やかな傾斜を示すが、他の三方向は断崖となる。最高所にある主郭と見られる曲輪を中心に、多数の小さな曲輪で構成されている。空堀は認められない。城内の「二の丸」とされる箇所から壺に収められた備蓄銭約4万5千枚が出土したという記録がある（『五ヶ瀬町史』 1981）。

なお、近年中心部分が大きく破壊され、今では略測図に示された旧状は大きな改変を受けている。

高千穂48墨の一つとされる。坂本氏の居城であった。



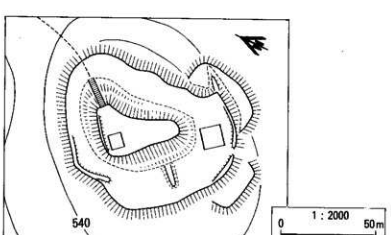

坂本城縄張り図（北郷泰道原図作成）

(7) 揚城

北流する五ヶ瀬川の左岸（西方向）に位置する。独立した小さな丘陵上に城域を設定している。すぐ北側には熊本県蘇陽町馬見原の集落がある。

主郭のまわりに帯曲輪が取り付く比較的単純な構造となっている。曲輪の周囲にはところどころ土塁が残っている。

地名より揚城と通称されているが、高千穂48塁の一つの「鞍岡城」に該当する城郭であったと推定される。




揚城縄張り図（九鬼　勉原図作成）

(8) 鞍岡折立城

五ヶ瀬川左岸（西方）の小丘陵上に立地している。最高所の標高は約650mを測る。

主郭の東～南側に数段の帯曲輪が取り付く形となっている。北～西側は断崖となっており、帯曲輪は集落や交通路を見据えた配置になっていると考えられる。

高千穂48墓の一つで、甲斐氏の居城とされる。

(9) 原目城

五ヶ瀬川が蛇行する地点にあたり、突出する丘陵の端部に立地する城郭と見られる。城郭であったとの伝承は残るものの、遺構は不明瞭。

(10) 荒谷城

五ヶ瀬川上流の右岸（東側）に立地する。荒谷の集落の背後にあたり、最所の主郭を中心として、北東側を中心に曲輪を配する。

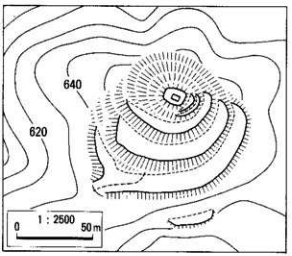
揚城、鞍岡折立城や当城のような小規模城郭は、地域的特徴として捉えられるのかも知れない。

高千穂48墓の一つで、御船氏の居城とされる。

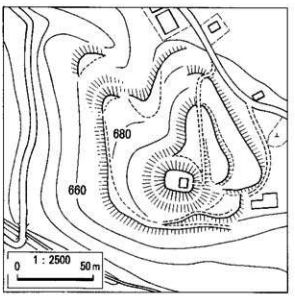
(11) 阿蘇殿屋敷

古賀の集落の北西方向の山地の中腹に、南方向に面する平坦地がある。古賀屋敷とも言う。

甲斐氏の居館と伝えられ、甲斐氏が肥後方面に進出する際に本拠とした重要な位置を占めるところである。




鞍岡折立城縄張り図（九鬼　勉原図作成）




荒谷城縄張り図（九鬼　勉原図作成）

## 4 延岡市

### (1) 島の浦御仮屋

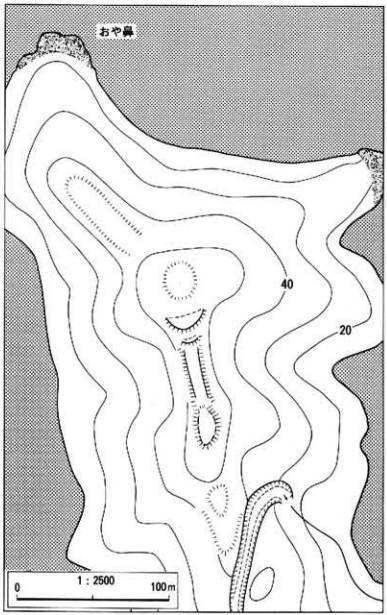
近世延岡藩関連の役所。地元に伝承が残るが、宅地化が進み、遺構は不明瞭。

### (2) 須美江会所

やはり近世延岡藩関連の役所。2段の平坦地があったが、破壊が進行している。

### (3) 浦尻城

延岡市北東部の浦尻湾に向かって突き出た岬状の丘陵上に立地する。最高所の標高は56m。湾口には砂嘴がのびており、外洋からは見渡すことができない。




浦尻城縄張り図（甲斐典明原図作成）

頂部付近と尾根上に平坦地がある。東側には石組みも見られる。また現在は確認することができないが、桟橋の柱穴もあったと言う。全体に藪が深く調査が困難で、総合的な調査の結果次第では、城域が大きく広がる可能性もある。

築城者は不明であるが、近くに天文17年銘の河野越智氏が築いた六地蔵幢があることから、河野越智氏の支城と推定されている（『城郭大系』）。

**(4) 御堂ノ下**

五ヶ瀬川水系の北川左岸（東側）の小丘陵にある。羽柴秀長の陣跡との伝承がある。

**(5) 鹿小路囲**

「囲」地名が残る。

**(6) 稲葉崎外城**

微高地上に立地する。現在養鶏場があり詳細は不明であるが、地籍図を見ると屋敷地の様な一郭が認められる。

**(7) 大友氏社ケ原軍営**

天正６年（1578）に豊後の大友宗麟が、土持氏が守る松尾城を攻める際に軍営を置いたところとされる。ただし社ケ原の地名が残る一帯には明瞭な遺構は見られない。

**(8) 大友氏無鹿軍営**

北川のすぐ南側の河岸にある。天正６年に大友宗麟が島津氏との戦に備えて軍営を置いたとされるところである。「牟志賀」とも書く。小高い丘陵地であるが、宅地化が著しく、遺構は見られない。

大友宗麟は、ここにキリスト教国家を建設する計画を持っていたと伝えられ、「むしか」の地名はラテン語の「音楽」の語に由来するという。

**(9) 行縢要害**

『延陵世鑑』に記述があるが、その地点は特定できない。

**(10) 貝の畑城**

五ヶ瀬川左岸の低い丘陵上にあたる。五輪塔群がある丘陵で、平坦地と地峡部が見られるものの、明瞭な遺構は存在しない。

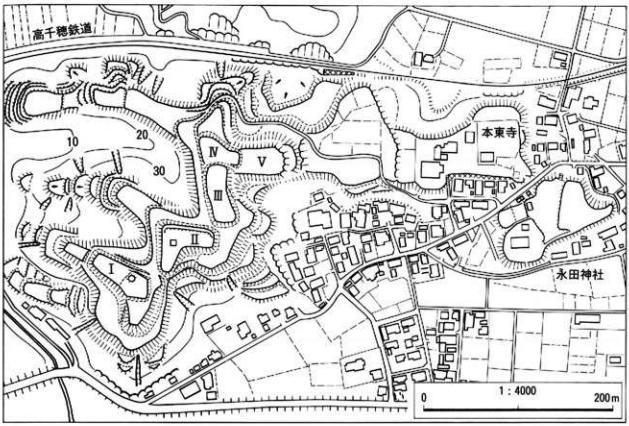
**(11) 松尾城**

五ヶ瀬川が大きく蛇行する地点の北岸に位置する。北方から続く丘陵が河岸に向かってせり出すところに城域を設定している。

現在城域として認識されているのは、大きな堀切状を呈する高千穂鉄道の線路より南側、本東寺の西側一帯で、城域は南北約180m、東西約280mを測る。南側を旧高千穂街道が通っている。

図中Ⅰとした曲輪が標高が最も高く（標高55m）、主郭と見られる。Ⅱの曲輪の北側には土塁が築かれている。斜面にはところどころに竪堀が設定され、防御を固めている。

当城は文安年間に土持宣綱が築いたと言われ、天正６（1578）年に大友宗麟に滅ぼされるまでの６代134年間にわたって縣土持氏の本城であった。その後、高城・耳川の合戦を経て島津氏領となり、天正16（1588）年には、豊臣氏の九州平定により高橋元種が入った。高橋元種は15年間在城したが、慶長８（1603）年には縣（後の延岡）城を築いて移ったため、当城は歴史の舞台から姿を消すことになる。




松尾城縄張り図（甲斐典明原図作成）

松尾城全景

⑿ 城ケ鼻

松尾城の南西0.7kmの丘陵地上に立地する。端部には天福寺や小峰神社があり、その背後に曲輪と見られる平坦地が続いている。一部に土塁も認められる。ただし、付近では西南の役の際に戦闘が行われており、この地はその際に使用された可能性もある。ただし、その場合でも、中世に遡る遺構の存在を完全に否定するものではない。それは対岸にあたる天下城（後出）についても同様である。

⒀ 延岡城［縣城・亀井城］

五ヶ瀬川とその支流の大瀬川にはさまれた中州にある独立小丘陵（「城山」）を中心にに城域を設定している。最高所の標高は54m。「城山」にある本丸、二の丸、三の丸を含む中心部分と、その西側に離れて存在する西の丸（西之曲輪）という二郭および周囲の城下より成る。中心部分の規模は、南北約200m、東西約250m程。『有馬家中延岡城下屋敷付絵図』（寛文・延宝年間頃　明治大学所蔵）や『日向国延岡城下絵図』（延享２年頃茨城県笠間稲荷神社所蔵）などの絵図には、曲輪とともに水堀や城下町の様子が描かれている。

現在も主要な曲輪は比較的良く残っており、本丸北西側の石垣は俗に「千人殺し」と称される見事なものである。絵図に描かれた建造物は残存しないが、天和２（1682）年に焼失した三階櫓や、櫓門などは、概ねその位置や規模を推定することが可能である。

反面、水堀は埋没しており、城下にも住宅が建て込んでくるなど、特に周辺部分の改変は著しい。

このように、当城は宮崎県内随一の近世城郭として重要で、保存・整備を視野に入れた発掘調査も実施されている。このうち二の丸登城口の北大手門の調査では、門の位置が確認された。

延岡城の創建については不明な点が多いが、発掘調査の結果によれば15世紀代の遺構が検出されており、中世（伝承では古代末）に遡るようである。

現在残る城郭の本格的な築城は、豊臣氏の九州平定後に当地に入った高橋元種による。慶長６（1601）年に着工し、同８年に完成している。関ヶ原の合戦に参戦し、近世城郭の必要性を痛感したことが築城の契機となったようである。

以降、延岡藩主は有馬氏（３代）、三浦氏（１代）、牧野氏（２代）を経て、譜代の内藤政樹が整城の平より入り、以降内藤氏が累代の城主となり、幕末を迎えた。

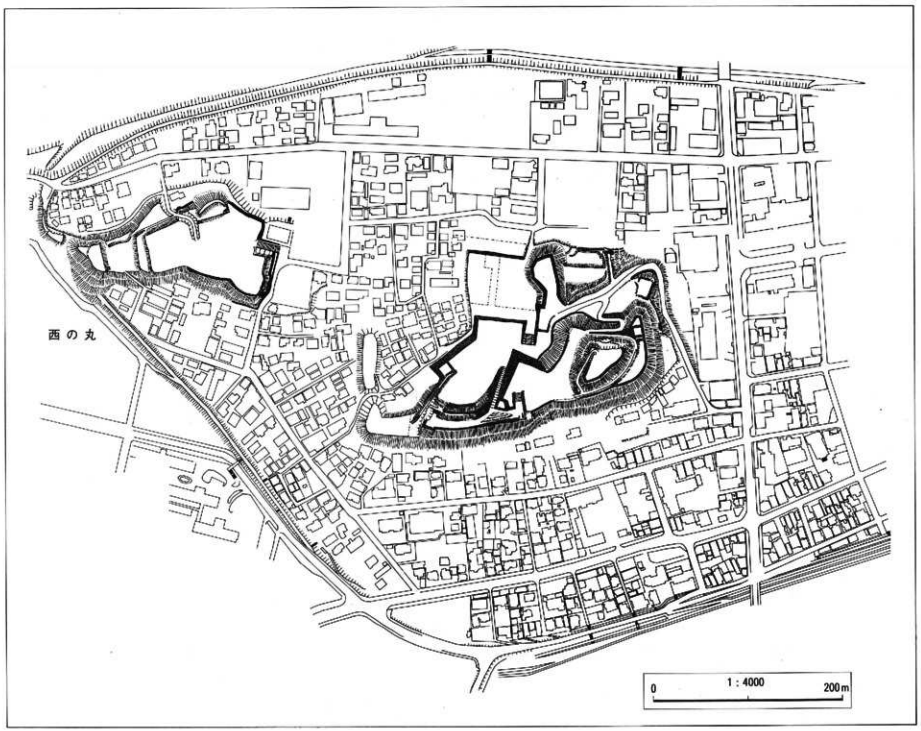
なお、城郭としての延岡城が最も整備され、城下町が完成したのは有馬氏の代（慶長18年～元禄５（1692）年）頃と言われる。

文献

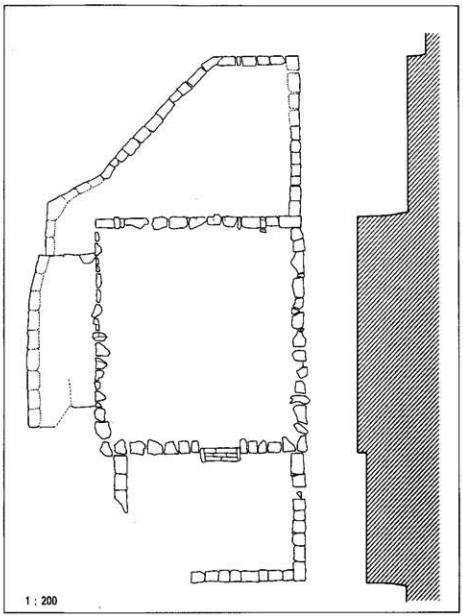
1）石川恒太郎　『延岡の二城』　1935　延岡新聞社

2）尾方　農一　『延岡市文化財調査報告書第12集　西階城周辺遺跡（第１次）・延岡城内遺跡E地点』　1994　延岡市教育委員会

3）延 岡 市　『延岡城跡保存整備基本計画』　1997




延岡城縄張り図（千田嘉博原図作成　文献３所収）




延岡城東三階櫓台略測図（九鬼　勉原図作成）

延岡城全景（延岡市教育委員会提供）

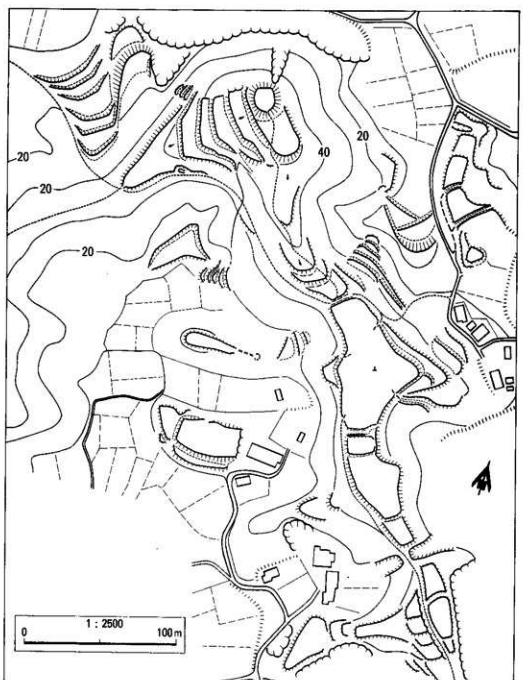
延岡城本丸石壘（「千人殺し」）

⑭ 北の城

現在は団地造成により旧状は失われているが、竜仙寺に伝わる伝承では、この地は「北の城」であったという。

⑮ 天下城

五ヶ瀬川左岸の丘陵上に立地する。図示した城域の南端部近くに堀切を設け、そこより北側に曲輪が連続させるが、墓地・畑地形成の影響もあり様相は必ずしも明瞭ではない。




天下城縄張り図（九鬼　勉原図作成）

北端部近くにある最高所（標高54m）の曲輪と、墓地のある比較的広い曲輪（標高36m）が中心的機能を有する曲輪と考えられる。

ここは文献には一切あらわれない。地元に「城山（じょんやま）」という名称が伝わるのみである。

### ⑯ 西階城［宝坂城］

五ヶ瀬川と支流の大瀬川が分流する地点の近くに位置する。金堂ケ池を臨む丘陵上に城域を設定している。最高所の標高は62mである。

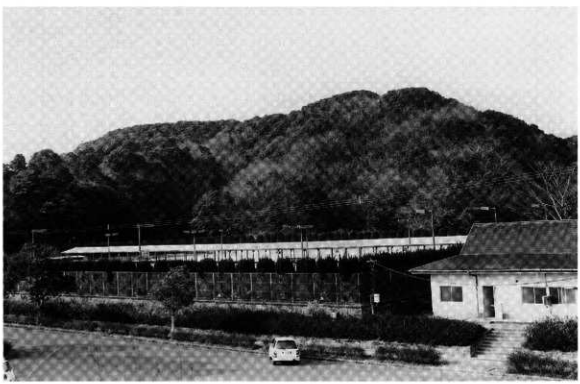
空堀、竪堀、土塁、堀切、櫓台、犬走り、土橋など、中世山城の構成要素が良く残る。

西階城縄張り図（甲斐典明原図作成）

図に示した曲輪Ⅰ（主郭と推定される）～Ⅴが中心と目される曲輪群で、その南側の小曲輪群は、見張り台的な機能を有するものか。Ⅳの曲輪とその東側の腰曲輪とは、比高差12mに達する。

また、竜仙寺のある北東側の丘陵にも城郭構造が見られる。竜仙寺に伝わる伝承によれば、その部分は「東の城」と呼ばれていたとのことである。なお、図の範囲の北側（給水塔の北側）にも、土橋状に尾根が連続しており、さらに城域は拡大するようである。

当地は、古道（川辺街道）沿いの要地で、『延陵世鑑』によれば、正長２（1429）年に土持全宣が築城した。縣土持氏の本城としての期間は16年間にとどまるが、城郭自体はその前後にわたって機能していた可能性が大きい。



西階城全景

**⑰　中の城**

「中城」の字名が残るが、現在工場の敷地となっており、遺構は認められない。

**⑱　中野城**

当地にも城館関連の字名が残るが、宅地化が進み、地表に痕跡は残らない。

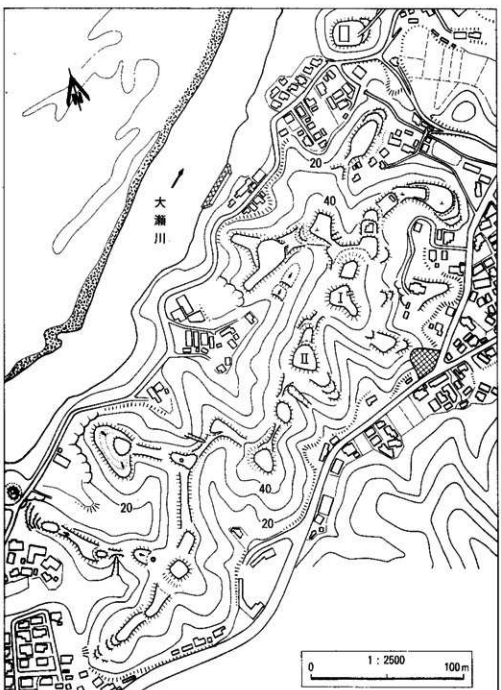
**⑲　古城**

井上城の北東に隣接する小丘陵にあたる。宅地化が進み、旧状が判別しがたくなっているが、位置的に見て井上城に関連する城館跡の可能性が考えられる。

**⑳　井上城**

大瀬川右岸の「天守山」と通称される丘陵上に築かれている。北東－南西の長軸方向に曲輪が展開する。その長さは約600mに及ぶ。最高所の曲輪（図中Ⅰ）の標高は69m、低地との比高差は約60mを測る。

当城は、土持氏の初期の本城とされ、築城者は土持栄綱あるいは土持国綱と伝えられるが、疑問が残る。確実には、南北朝期に土持栄宣が縣荘の半分職を獲得して以降と考えられる。




井上城縄張り図（九鬼　勉原図作成）

(21) 砦形

五ヶ瀬川水系の大瀬川と沖田川にはさまれた愛宕山を頂とする山地の西端部にあたり、比較的平坦な畑地となっている。「砦形」の地名から関連遺構の存在が予想されるが、現状では特に認められない。また地籍調査においても確認することはできなかった。

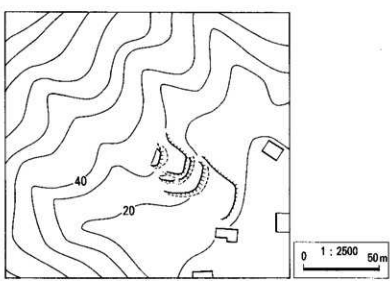
(22) 鬼ケ城

前項で触れた愛宕山の山地の東端部に「鬼ケ城」の字名が残る。付近には「構口（かまいぐち）」の字名もある。

城郭構造はさほど明瞭ではないが、おそらく施設建設により破壊された箇所に中心があったものと推定される。

(23) 上伊形城

谷底の低地に面する山裾に立地する。数段の削平地が認められ、付近には石塔の残欠も見られる。




上伊形城縄張り図（九鬼　勉原図作成）

(24) 土々呂松尾城

延岡市街地南部の、南方向に面した丘陵上にある。東西の2区に分かれていたという。現在は宅地となり、破壊が進んでいる。前記の松尾城の支城と考えられる。

(25) 青谷城

延岡市南西部の山中に青谷城（「あおやぎ」）という字がある。深い谷底に神社跡があり、その背後に比較的なだらかな尾根があるが、城館跡の存在の確証は得られていない。

## 5　日向市

### (1)　日知屋城

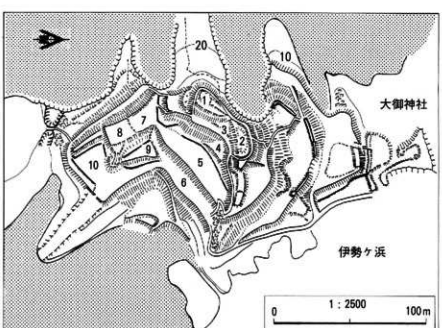
名勝「伊勢が浜」の南側に位置する岬に築かれた城郭である。

「コ」字形を呈する尾根の東西に８箇所の曲輪があり、尾根に守られた懐部分が主郭にあたると考えられる。また先端部と付け根部に空堀を設け、往来を遮断している。城域は南北約250m、東西約120mを測る。

当地は宇佐宮領荘園の富田荘に含まれていた。長禄元（1457）年の小浪川の戦以降は伊東氏の勢力圏内となった。伊東氏48城の一つで塩見城、門川城とともに「三城」と称され重要視された。『日向記』によれば伊東祐邑が城主であったという。伊東氏没落後は大友氏と島津氏の勢力圏の境界となり、大友義統は海賊衆である薬師寺兵庫守を日知屋に在陣させた（『宮崎県の地名』　1997　平凡社）。天正６（1578）年には島津氏の勢力下となった。豊臣氏の九州平定後は「三城」は延岡藩領となった。

文献

1）緒方博文編　『日知屋城跡－範囲確認調査報告書－』　1991　日向市教育委員会




日知屋城縄張り図（千田嘉博原図作成　文献１所収）

### (2)　竹ノ上城（仮称）

櫛ノ山の北東にのびる段丘上にある。曲輪１面と腰曲輪が認められる。空堀とされるものは疑問が残る。

南北朝期に定善寺を開山したと伝えられる日叡上人の兄、甲斐上総守が築いた「日知屋之城」に比定される（『定善寺文書』）。隣接する定善寺の直末寺、本善寺も城域内であった可能性がある。

### (3) 庄手城（仮称）

低地に張り出した丘陵上（最高所の標高37m）にある。主郭と見られる曲輪は、城域の中央やや北東寄りにあり、虎口も確認できる。西側の曲輪は高さはあるが、削平が不十分である。城域の西端には現在市道が通っている切り通しがあり、地元の人の話しでは道路工事の際に拡幅したもので、以前は荷馬車がようやく通れるほどの狭い道であったという。これが尾根と城域を区切る堀切であったと判断される。ただしそうであったとしても、全体の防御性は特に高いとは言えない。

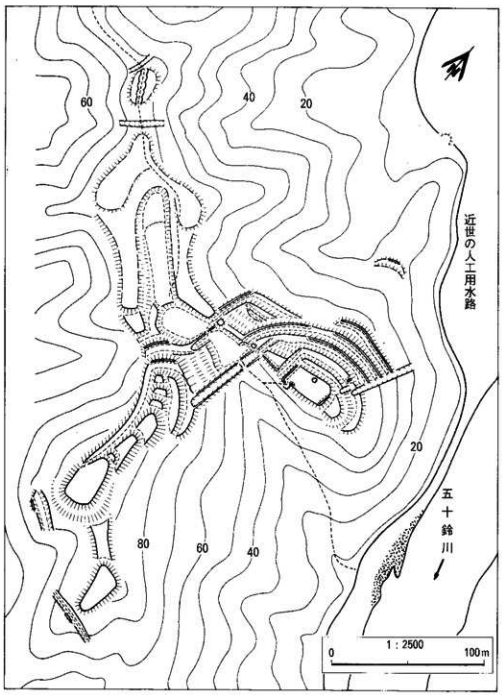
当地は宇佐宮領荘園富田荘に属していた。付近には「的場」「髪屋敷」「上屋敷」「城屋敷」「揚ノ丸」などの地名が残る。

庄手城（仮称）縄張り図（緒方博文原図作成）

### (5) 新城

日向市と門川町の市町境に位置する。五十鈴川の右岸の山地（最高所100m）にあり、城域内には古道が南北に通っていた。東西方向から迫る谷をはさんで南北に頂部があり、交通路を監視する関所的な機能を持った城郭と考えられる。北西－南西の長軸方向の長さは約380mに及ぶ。

北側の斜面には頂部から数段にわたって土塁・帯曲輪が巡っており、北東斜面には竪堀も見られる。南側にも小さな曲輪が数段続き、南端には空堀・土塁を築いて往来を遮断している。




新城縄張り図（千田嘉博原図作成 門川町教育委員会提供）

(6) 草場

市街地西部のなだらかな丘陵上にある。その丘陵の先端部には「古城ケ鼻」の地名が残る。公園化により主たる曲輪は消滅しており、西側の腰曲輪のみ良好に残る。

(7) 権現城

富高川右岸の山丘頂部に削平地が見られる。現在鉄塔が建っている。

(8) 富高陣

近世の天領の陣跡。現在の市役所南側の幸福神社付近にあったと推定される。

(9) 垣添

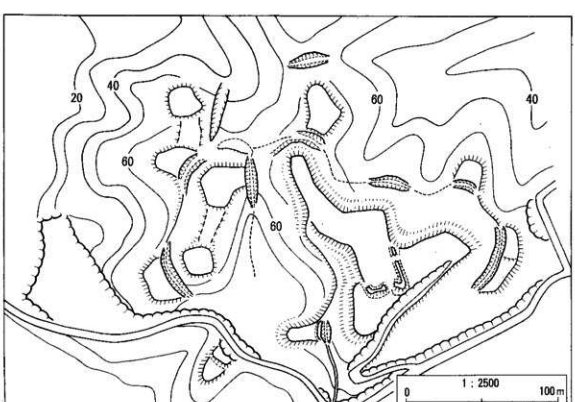
小河川の合流点近くの水田の中に、一段高い段差が認められる。単郭の居館と考えられる。付近には「的場」の地名も残る。

(10) 塩見城

塩見川の左岸の丘陵上にある。東西に谷が入り、北方は山地に続く。

最高所に主郭と想定される曲輪があり、面積的にも最も広い。全域が平坦に造成されており、溝で数か所に仕切られていた可能性もある。南東側には土塁が築かれており、土塁が切れているところが虎口と考えられる。その西側の曲輪群は削りが甘く、主郭部分とは性格、成立時期の違うグループかも知れない。曲輪周囲の要所には空堀を築き、防御性を高めている。城域は南北約230m、東西約250mを測る。

当地は塩見荘に属し、古くは南北朝期に土持氏が築城したと伝えられる。長禄元（1457）年の小浪川の戦で伊東氏が財部土持氏を滅ぼして以降、伊東氏が領有するところとなった。伊東氏48城の一つ。日知屋城、門川城とともに「三城」と称された。『日向記』によれば城主は伊東氏の支族である右松四郎左衛門であった。伊東氏没落後、「三城」城主は表面的には島津氏に服したが、大友氏の日向侵攻の際には先鋒となり、塩見城主は高城・耳川の合戦で戦死したという。

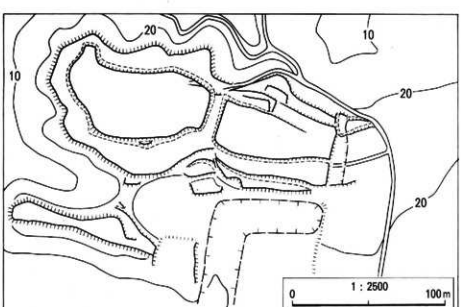



塩見城縄張り図（緒方博文原図作成）

塩見城全景

### (11) 高平城（仮称）

塩見城の西方約１kmの丘陵状の台地上に築かれている。東側は緩やかに台地に続くが、他の三方向は急傾斜の斜面となっている。




高平城（仮称）縄張り図（面高哲郎原図作成）

城跡は、南北方向の空堀で区切られた2つの曲輪を中心にして構築されている。西側の曲輪が主郭と考えられる。東側の曲輪は東端に空堀が見られるものの、防御性は高いとは言えない。2つの曲輪を囲むように帯曲輪が巡っており、北西端に櫓台状の突出部が存在する。

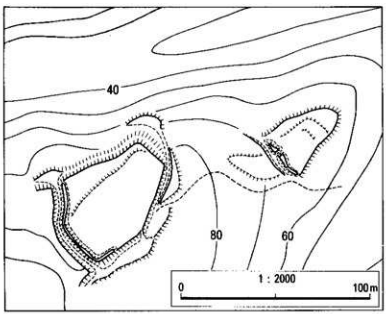
この高平城は文献にはあらわれない。その位置より塩見城との関連性が推定されるが、防御性は決して高くはなく、居館的な性格のものであったろう。なお、平成3年～4年に発掘調査が実施され、主郭と考えられる曲輪で掘立柱建物が検出されている。

⑿ 小原城（仮称）

小河川をのぞむ南方向にのびる丘陵上に立地する。大きくは2区に分かれる。丘陵の付け根部分を堀切により裁断している。

⒀ 本村城

平岩地区の海岸山地端部に位置する。南西端部に空堀を設け、主郭と見られる曲輪を設定している。その東側にも曲輪があり、いずれも空堀に面して土塁が築かれている。



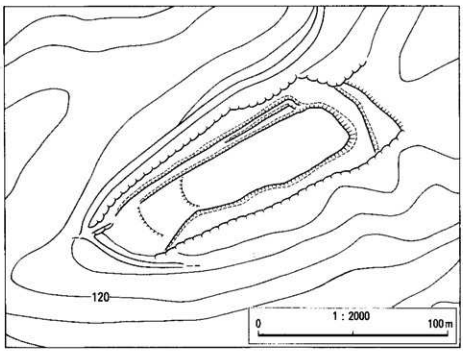

本村城縄張り図（緒方博文原図作成）

⒁ 秋留

中野寺のある小丘陵上に想定されるが、その南側を通る道路付近に「下ノ堀」の地名が残ることから、城郭本体はそのさらに南西側の山丘上にあった可能性も指摘できる。ただし、当該地は大師堂建設により破壊を受けている。

⒂ 籾木ノ城

南西方向に突き出た丘陵上に立地する。日向灘を望む位置にあり、見張り台の機能を有する城郭と考えられる。『城郭大系』によれば、籾木某氏の居城とのことである。



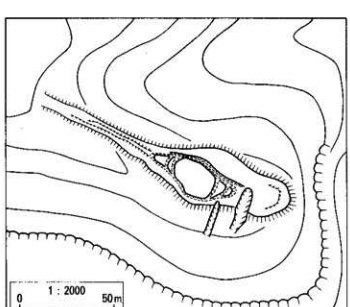

籾木ノ城縄張り図（緒方博文原図作成）

⑯ 御仮屋

近世高鍋藩関連の仮屋敷と伝えられる。美々津の港を望む位置にあることから、中世にさかのぼる諸施設が存在した可能性もある。

⑰ 麻付陣［大友義統陣］

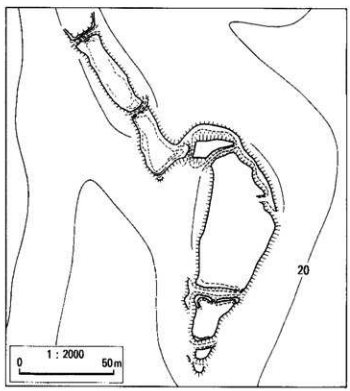
丘陵端部に城郭構造が認められ、字名より『日向記』にあらわれる「浅付之陣」に比定される。




麻付陣［大友義統陣］縄張り図（緒方博文原図作成）

### ⑱ 日志原城

海岸段丘端部に城域を設定している。数本の堀切により丘陵を分断しており、さらに要所には土塁を築いている。




日志原城縄張り図（緒方博文原図作成）

## 6　東臼杵郡門川町

### (1)　城畑

城館関連の字名が残るが、破壊が進み、遺構は不明瞭。

### (2)　松尾城

南方向にのびる丘陵端部にある。頂部は現在墓地となっており、遺構は判然としない。

### (3)江田城

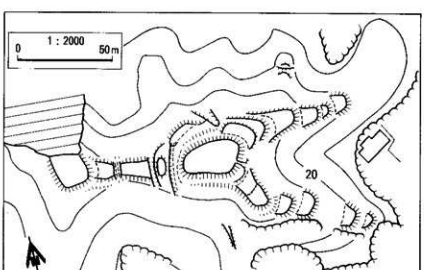
前項松尾城と対峙する、鳴子川と丸山川にはさまれた丘陵上にある。頂部の主郭部から3方向に段状の曲輪が連なる。西側には空堀を設け、そのさらに西側にはやや高い曲輪がある。

当城は、南北朝期に阿蘇氏の家臣の草野氏が築いたと伝えられる（『城郭大系』）。

平成4年と7年に発掘調査が実施され、各部の形状が明確となり、青磁片などの遺物も出土している。

文献

1）窪田麗子編　『門川町文化財調査報告書第1集　江田城跡』　1993　門川町教育委員会



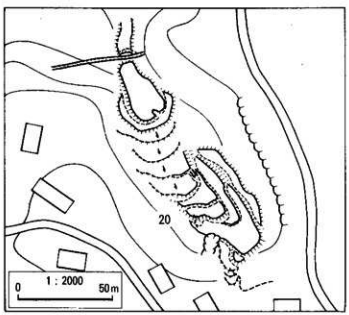

江田城縄張り図（文献1所収図を基に製図）

### (4)　佐々宇津城

前項の江田城の南東側に続く丘陵上にある。遺構は不明瞭。伊東氏系の佐々宇津氏の居城とされる。

### (5)　竹名城

小河川をのぞむ丘陵上に立地する。最高所にある主郭と見られる曲輪の南東側に段状に曲輪が展開する。標高は41mで、比高差はさほどない。主郭の北西側には堀切とそこから続く竪堀が認められる。



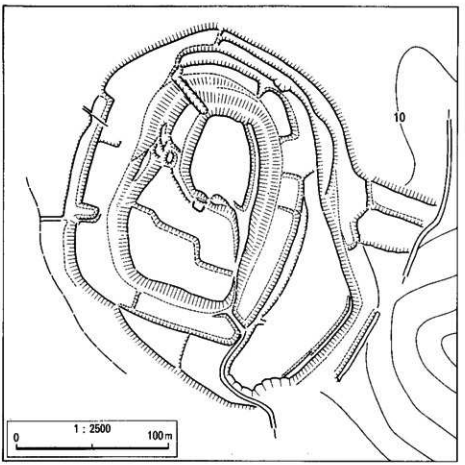

竹名城縄張り図（緒方博文原図作成）

(6) 門川城

狗山城とも言う。五十鈴川左岸にある標高29mの丘陵上に城域を設定している。東側のみは丘陵が続いていくが、他の3方向は水田となっている。

丘陵に続く東側を空堀で切断し、また土塁を築き守りを固めている。最高所に主郭があり、その南側を中心に曲輪群が展開している。周囲には帯曲輪が取り巻く。図示した城域は南北約250m、東西約200mであるが、東側の丘陵（字「城屋敷」）にも城域が広がっていた可能性もあり、注意を要する。

当地は古くは富田荘に属しており、伊東氏庶家が下向し、門川氏を名乗った。門川氏は後に、佐々宇津氏、小松氏など13氏に分派し、日向北部から中部にかけて土着化していった。その後は財部土持氏と伊東氏が領有をめぐる争いを繰り広げていたが、長禄元（1457）年小浪川の戦以降は、伊東氏が支配するところとなった。伊東氏48城の一つで、日知屋城、塩見城とともに「三城」と称された。『日向記』によれば、永禄年間の城主は伊東氏家臣の米良四郎右衛門であった。




門川城縄張り図（千田嘉博原図作成 門川町教育委員会提供）

(7) 平城

「平城」の字名が残るが、その範囲は広く、宅地化も進んでおり、様相は不明。

(8) 三ケ瀬

東方向にのびる丘陵の端部にあたる。地元に城館跡であるとの伝承が残り、土塁らしき遺構も認められるものの、詳細は不明。

(9) 大池

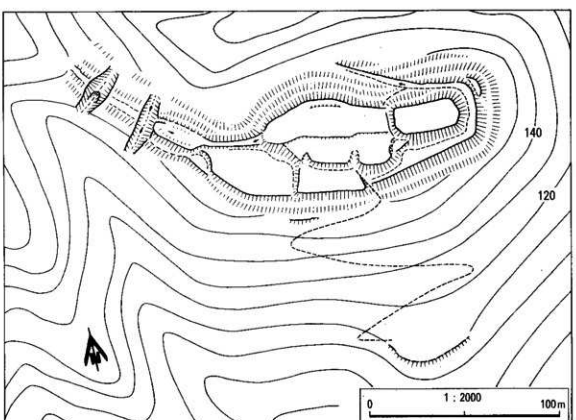
五十鈴川南岸の丘陵端部にあたる。頂部の背後に空堀が見られる。

## 7　東臼杵郡東郷町

### (1)　山陰城

東郷町の中心集落である山陰の北方の山丘上に立地する本格的な山城である。東端部にある主郭の標高は約180m。北西方の立山（354m）より続く尾根を、2本の堀切により截断して城域を設定している様子がうかがえる。南側に下った所に平坦地があるが、これについては往時のものかどうか判然としない。その部分を除いた城域は南北約80m、東西約220m。

伊東氏48塁の一つとされる。城主は米良喜内則村であった。伊東氏没落後は島津氏の領有するところとなった。




山陰城縄張り図（村田修三原図作成）

### (2)　西城

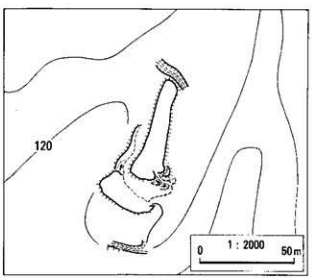
山陰城の南西約1.2kmの丘陵上に立地する。当所は、西郷村方面よりの耳川本流と南郷村方面よりの坪谷川が合流する地点にあたり、河川交通を把握するための重要な拠点であったと推測される。

そのように重要な城郭であるが、遺憾ながら西側については公園建設により大きく地形の改変を受けている。主郭と見られる曲輪は比較的旧状を残している。その端部には堀切も見られる。

### (3) 坪谷城

坪谷小学校の北側の丘陵端部にある。南端の曲輪は墓地になっているものの、その他は良好に残る。主郭と見られる曲輪の南東側には虎口が認められる。また北西側に続く尾根には深い堀切を築き往来を遮断している。

伊東氏48塁の一つとされ、米良休助重時、松尾下総守の城主名が伝わる。




坪谷城縄張り図（緒方博文原図作成）

### (4) 坪谷出城

坪谷城の北西側には細い尾根が続き、約1kmのところに平坦地が認められる。見張り台あるいは詰城といった、坪谷城に付属する施設であった可能性があり、坪谷城とは別項目を立てて扱った。

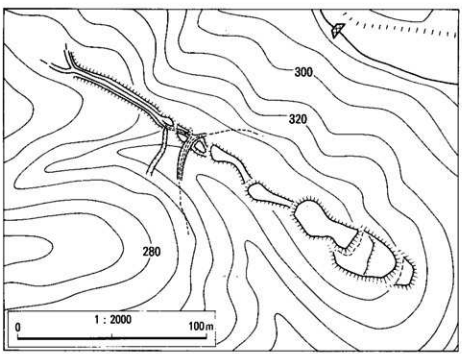
なお、東郷町においては、本書の編集と並行して町内の遺跡詳細分布調査が実施しされており、ここに盛り込むことはできなかったたが、いくつかの城館跡が新たに発見されているようである。

## 8　東臼杵郡南郷村

### (1)　水志谷城

現在、当地周辺の地区名は「水清谷」となっている。当城は西方に張り出す丘陵上に築かれている。堀切を設けて往来を遮断しており、端部は斜面を下って竪堀状となる。

伊東氏48塁の一つに数えられる。『日向記』には「水志谷領主」奈須九右衛門尉の名が見える。




水志谷城縄張り図（緒方博文原図作成）

### (2)　松尾城

水志谷城の北東約0.5kmの丘陵端部に位置する。狭小な平坦地が1面認められ、現在小祠が建っている。その背後の尾根上には遺構は認められない。

### (3)　水清谷囲

水清谷神社の南側に「囲」地名が残る。遺構は不明瞭。

### (4)　俣江城

『南郷村史』(1972)に記載がある。伊東氏の支配下にあり、『日向記』には「田代三方領主」俣江主税助の名が見える。俣江地区の岬付近にあったと推測されるが、明瞭な遺構は確認できない。

### (5)　星原城

現在、村役場の建っているところで、ほとんど削平され旧状をとどめない。聞き取り調査によれば、主郭とおぼしき最高所の曲輪の南側と東側に腰曲輪があり、北側には2条の空堀が見られたという。

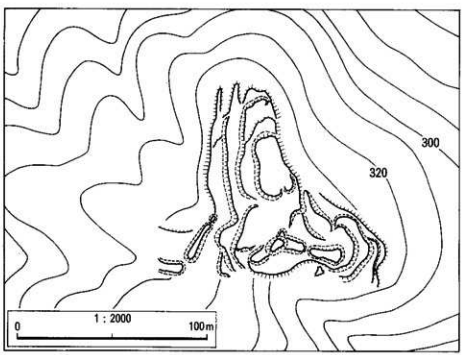
当地域を支配した奈須氏の本城であった。永禄年間には伊東氏の支配下に入った。『日向記』には「神門三方領主」の小崎右近将監祐貞の名が挙がっている。

(6) 田爪城

星原城の南約１kmの、小丸川右岸の丘陵上に立地する。主郭のある最高所の標高は345m。城域は南北約100m、東西約120mを測る。

堀切は見られないものの、主郭のまわりに曲輪群を配し、厳重に守っている様子がうかがえる。城域の南側斜面は急崖となっている。主郭の南側には虎口が明瞭に残る。

在地領主の田爪氏の居城と考えられる。さらに、「神門三方領主」の奈須氏（小崎氏）が支配した可能性もある。




田爪城縄張り図（福田泰典原図作成）

(7) 仮屋城

星原城の対岸にあたる小丸川右岸に位置する。祇園神社の北西側の丘陵上に明瞭な城郭構造が認められる。祇園神社のある平坦地も曲輪であった可能性があるが、詳細は不明。

明瞭な２本の堀切により丘陵を裁断しており、その北東側に主郭と見られる曲輪がある。主郭の南西側（堀切に面する側）には土塁状の高まりが認められる。

『日向記』の「神門三方領主」の記載の中に「借屋」とあるが、人名は記されていない。

(8) 入田城

耳川が大きく蛇行するところの左岸に位置する。南方向に張り出した丘陵の端部付近にあたる。地元では城跡と伝承され、『南郷村史』（1972）にも記載があるが、畑地になっており遺構は不明瞭。

(9) 古城

尾迎集落の背後の小丘陵上にある。当所も『南郷村史』（1972）に記載があるが、現在明瞭な遺構は認められない。

⑽ 市谷城

市谷集落の背後の丘陵上にある。頂部に曲輪と見られる平坦地が認められる。また地元で石塁と伝えられる遺構も現存する。

⑾ 平城

渡川の中心集落内に城館関連の地名が残るが、その範囲は広く、明瞭な遺構も認められなかった。

⑿ 田出原城

五色谷と渡川の合流点に向かって突き出た丘陵上に立地する。山麓には法持寺がある。曲輪と見られる平坦地や堀切などの遺構が認められる。なお、五色谷の対岸にも城郭構造が認められるという。その付近には米良氏の墓地があり、当城は米良氏に関連するものと推定される。

また、渡川地区の落ケ谷にも「殿屋敷」と呼ばれる箇所があり、居館が存在した可能性が指摘できる。

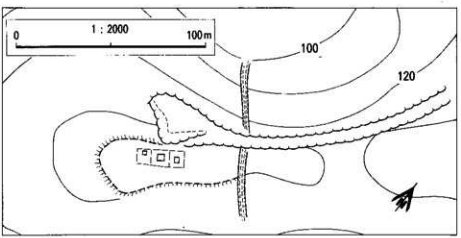
## 9　東臼杵郡西郷村

### (1)　下八峡城

南西方向に突き出た丘陵の端部に立地する。最高所の標高は186m。

丘陵の基部近くに堀切を設け、裁断する型式のもの。堀切は斜面を下り、竪堀状を呈している。

沿革等は特に伝わらない。




下八峡城縄張り図（緒方博文原図作成）

### (2)　鵜尻城

城郭関連の伝承があるが、存在を確認することはできなかった。

### (3)　花水流屋敷

耳川右岸の低位段丘上にあたる。明瞭な遺構はないが、遺物が分布することから遺跡の存在が想定される。

### (4)　蕨野

河岸の丘陵上に平坦地があるが、工場建設により破壊を受けている。その平坦地の北東側斜面には腰曲輪状の小段があるが、性格は不明。

### (5)　上円野城［今城］

『西郷村史』(1993）に記載されている。

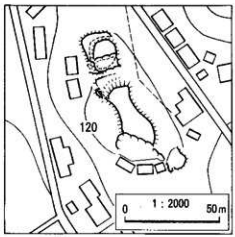
西郷中学校の南西側の丘陵上に城郭構造が認められる。さらに伝承では西郷中学校地も城域内であったという。

北側は墓地となっており、墓地部分と主郭と見られる部分の間に空堀を築いている。

『日向記』の「田代城」か。「田代城」は伊東氏48塁の一つで、「田代三方領主」の居城であろう。

### (6)上野城

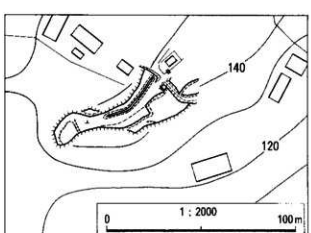
『日向地誌』や『城郭大系』はこの字を充てているが、前項の上円野（ウエンノ）城と同一のものと考えられる。なお、『日向地誌』によれば田代太郎が城主であったという。




上円野城縄張り図（緒方博文原図作成）

(7) 神門原城

南西方向にのびる台地の端部に立地する。最高所の標高は146m。台地に続く北東側に空堀を築いており、さらに北面する土塁で曲輪を防御する意図がうかがえる。



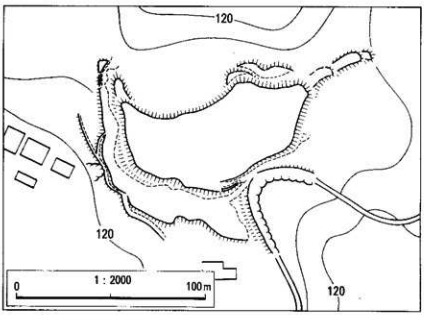

神門原城縄張り図（緒方博文原図作成）

(8) 上野原城

神門原城の南東隣の台地上に立地する。標高も神門原城とほぼ同一である。比高差はさほどない（20～30m）が、周囲を低地で囲まれた地形となっている。

中心に主たる曲輪があり、その周囲に帯曲輪、腰曲輪を配している。

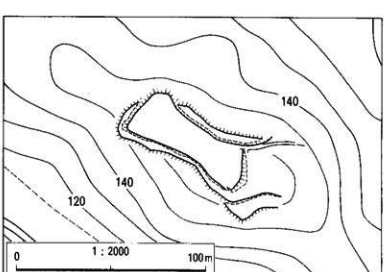
田代三方領主関連の城郭か。




上野原城縄張り図（緒方博文原図作成）

(9) 仮迫城

独立状の小丘陵上に立地している。北西側にも小さな丘陵がある。特に防御施設は認められない。

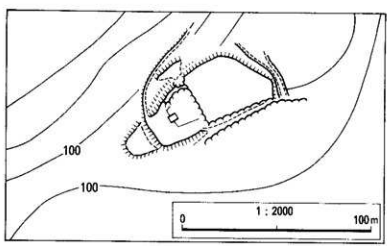



仮迫城縄張り図（緒方博文原図作成）

⑽ 道野々原城

耳川左岸の、南・南西方向に突き出た丘陵上に立地する。分布地図では、北方向の標高150m以上の地点まで含めたが、明瞭な城郭構造が認められたのは、南西側の一角のみであった。

南東側は桑畑による開削の影響を受けている。空堀によって台地本体と切り離す構造となっている。




道野々原城縄張り図（緒方博文原図作成）

⑾ 下タノ屋敷

耳川が大きく蛇行するところの右岸に位置する。低位の段丘上に集落が形成されており、遺構は不明瞭であるが、地下遺構が存在する可能性がある。

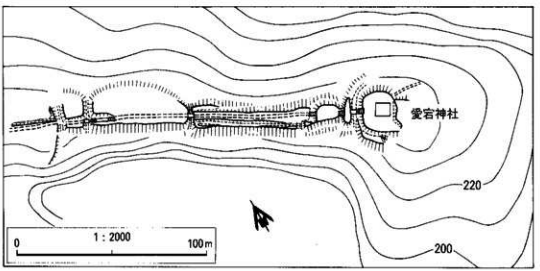
⑿ 立石囲

「囲」地名のところである。遺構は不明瞭。

⒀ 鳥の巣城

耳川の峡谷が大きく蛇行する地点の、東南方向に突き出た丘陵上に立地している。主郭部分には愛宕神社が鎮座する。

狭いところでは10m程の幅しかない丘陵を、確実には5条の空堀で裁断し、防御性を高めている。著名な木城町高城のミニチュア版とも言える縄張りを示すもので、小規模ながら、丘陵立地型の城郭の典型例の一つと評価できよう。



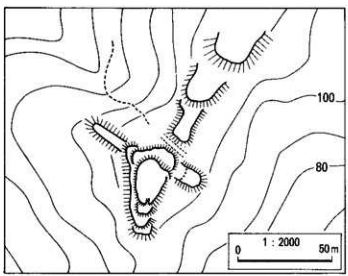

鳥の巣城縄張り図（北郷泰道原図作成）

## 10 東臼杵郡北郷村

### (1) 黒木城

黒木集落の北東側の丘陵端部に立地する。南端部から古道（宇納間往還）を見渡すことができる。

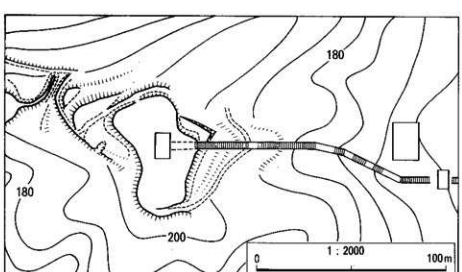
現在、主郭に入る虎口状の遺構や、丘陵端部を切り離す堀切を観察することができる。




黒木城縄張り図（福田泰典原図作成）

### (2) 鶴の城

現在、宇納間地蔵堂のある丘陵がそれである。堂宇のある主郭部分の西側にも曲輪が連続していく。さらに、図の範囲外となっているが、西側に土塁状の平坦地が続く。

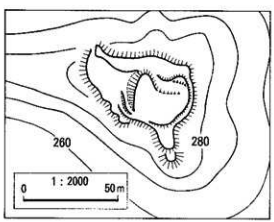



鶴の城縄張り図（北郷泰道・福田泰典原図作成）

### (3) 垂門城

最高所293mの和田越と呼ばれる峠道の西側にある。谷に面した急崖上に立地している。現在栗林となっているところが一段高くなっており、主郭部分と見られる。なお、道の対岸にも土塁状の遺構が見られたが、現在では道路の改良工事により消滅している。

城主は在地領主の垂門太郎であったと伝えられる。

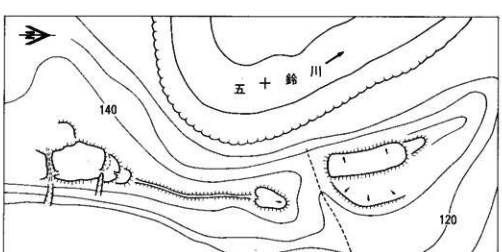



垂門城縄張り図（福田泰典原図作成）

### (4) 入下城

五十鈴川右岸の小丘陵上に立地する。堀切、竪堀が認められる。また南側の栗林となっている一帯も城域であった可能性がある。

『北郷村史』(1971) によれば、享禄年間に築民部少祐が築城したという。伊東氏48塁の一つに数えられ、「入下領主」は入下弥四郎と伝えられる。




入下城縄張り図（福田泰典原図作成）

## 11 東臼杵郡北方町

### (1) 曽木城（仮称）

西方向に突き出た台地上にあたる。現在は寺院となっており、また土取りの影響も受けるなど旧状改変が進み、遺構は確認できない。また地元に城館関連の伝承はあるが、これもはっきりしない。

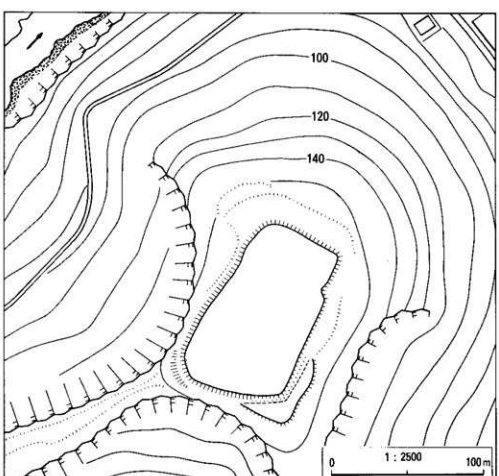
### (2) 上畑

前項曽木城の北東の、東方向にのびる台地上にある。平坦地らしきものが認められ、城館関係の遺跡が存在した可能性があるが、詳細は不明である。

### (3) 城

五ヶ瀬川が大きく蛇行する地点に突き出た丘陵端部にある。最高所の標高は161m。

「城」という地名が残るのみで、詳しいことは伝わらないが、大きな平坦地と腰曲輪が認められる。




城縄張り図（甲斐典明原図作成）

(4) 蔵田城（仮称）

「城ん鼻」と通称される、南方向に突き出た丘陵地上にある。最高所の標高は94m、比高差は約30mを測る。

数段の平坦地が認められ、櫓台状の突出部も認められるが、畑地開削の影響も大きい。

(5) 囲

山地中に開けた美々地の集落内に位置する。「囲」地名が残るが、明瞭な遺構は見られない。現在は美々地神社が鎮座する。

(6) 高水流

五ヶ瀬川左岸の段丘上に平坦地がある。現在は山林、畑地となり遺構は明瞭でないが、地元に城館関連の伝承が伝わる。

## 12 東臼杵郡北川町

### (1) 牧之城

瀬口地区に「牧之城」と呼ばれる城郭があったという伝承が残っている。ただし、丘陵上にそれらしき区画はあるものの、開削が進み、不明瞭となっている。

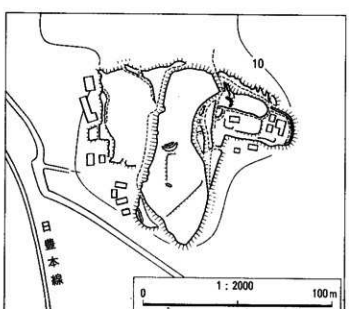
### (2) 鐘突き殿

牧之城の近くの山丘の頂部付近にあたり、牧之城に関連する施設が存在したとの伝承がある。のろし台様のものであろうか。

### (3) 川坂城

「城山（ジョンヤマ）」の名で呼ばれている。低い独立丘陵を利用して築かれているが、後世に耕地化されており、主郭部分の構造は不明瞭になっている。次項の竹瀬城に面する方向に腰曲輪があり、土塁状の遺構が残っている。北側と西側の斜面は比較的急峻となっており、その間を掘り切る形で城道が設けられている。

文献では『延陵世鑑』（曾根氏本）の17代土持高信の段に、補遺として「又河坂邑有城跡藤田左近者奥之蓋土持氏之党也」と記されている。

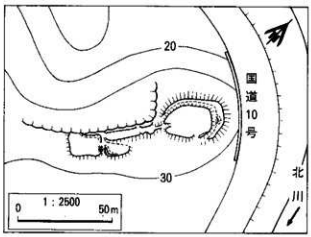



川坂城縄張り図（福田泰典原図作成）

### (4) 竹瀬城

『広報きたがわ』(1974) の中で川坂地区にあった城郭の出城的な性格を持ったものとして紹介されている。

北川右岸に向かって突き出た丘陵（標高54m）の端部に築かれた城郭で、規模としてはそれ程大きくない。基本的には単郭の城郭と考えられ、最高所にある主郭とその周囲を巡る帯曲輪が確認できる。しかし、土橋状の部分が認められ、現在墓地となっている平坦地も曲輪として機能していた可能性もある。また虎口状、土塁状の遺構も所々に残存している。




竹瀬城略測図（福田泰典原図作成）

## 13　東臼杵郡北浦町

### (1)　市尾内

『延陵世鑑』には「甲斐宮内が三河内の城に云々」と佐伯勢との合戦の様子が記されている。その場所がどこであるのか特定できないが、市尾内地区に「倉屋敷」の地名が残るところがあり、五輪塔の残欠が見られる。ただし、城館跡たる確証は得られていない。

### (2)　中水流

寺院の背後に平坦地が認められる。地形の状況から城館跡の可能性は認められるものの、詳細は不明。

### (3)　本村

北浦町の中心市街地のある古江地区の背後の丘陵にあたる。主要部分は住宅団地となっており、地形改変が著しい。

## 14　東臼杵郡諸塚村

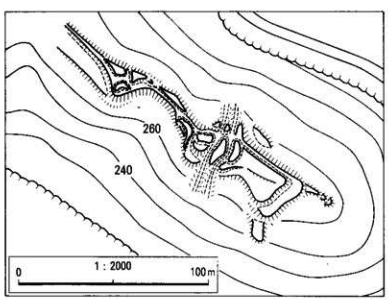
### (1)　城の元

矢村集落の近くにあたる。城館関連の通称地名が残るが、遺構等は不明瞭。

### (2)　塚原城［城の首］

南東方向に突き出た丘陵上に立地する。丘陵を２本の空堀で截断し、その先（南東側）に主郭部を設定している。空堀には堀底道の機能を持たせていたと見られ、さらに竪堀へと連絡していたようである。丘陵の付け根に３つのマウンド状の遺構が見られるが、その性格は不明である。

高千穂48景の一つに数えられるが、詳細は不明。ただし、「高千穂神社仏閣簿」（1691）に記載がある。また、明治時代の初期に描かれたという絵図もある。

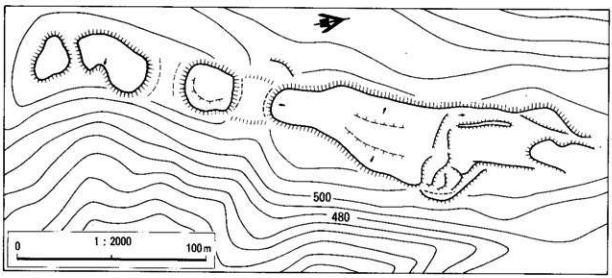



塚原城縄張り図（福田泰典原図作成）

### (3)　踊り場

家代集落の東方の丘陵上に立地する。南北方向に続く尾根上に曲輪を築いている。頂部の標高はほぼ同一で、最南端部分がやや高い。

北側には道路が貫いており、その北方にも城郭構造が認められる。おそらく道路部分に堀切があったものと推測される。




踊り場縄張り図（福田泰典原図作成）

(4) 荒谷城［城ノ下］

南にのびる丘陵上に立地する。中心部分には荒谷神社が鎮座しており、その下方に平坦地がある。

(5) 城ノ塚

丘陵の端部にあたる。城館関連と見られる字名が残るが、遺構等の詳細は不明。

(6) 小原井

「城ケ谷」の字名が残る。当所も遺構は不明瞭。

(7) 菊池主水跡

飯干の集落内に小さな平坦地がある。飯干領主の館跡との伝承が残っている。「菊池主水」は領主名。

## 15 東臼杵郡椎葉村

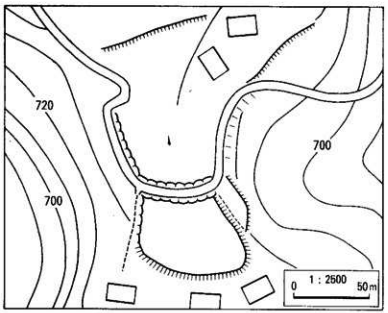
### (1) 小原城

中の八重集落の南東の山腹にある。削平地が認められるが詳細は不明。もとは茶畑となっていた。

### (2) 向山城［弾正城］

城と呼ばれる集落の中にある。舌状に突き出た丘陵上に曲輪を配置する。一部、里道開削により破壊を受けるが、主郭と見られる曲輪は比較的良好に残る。曲輪内には石塔の残欠が認められる。

城主は、近世初頭に島津氏の日向支配後に椎葉山を領知支配した、いわゆる「三人衆」の一人の那須弾正であったが、向山の十三人衆の謀反により殺害され、一時椎葉山は天領となった。




向山城縄張り図（吉本正典原図作成）

### (3) 大川内城

字城の北東側の標高約890mの山丘中腹に所在する。背後には1000m級の山地が連なる。伝承によれば、現在民家が建っている平坦地が曲輪にあたるということであるが、あまり明瞭ではない。

城主は「三人衆」の一人の那須兵部大夫と伝えられる。

なお、大字大河内には、「合戦原（かせばる）」という字名の地区があるが、由来は定かでない。

### (4) 小崎城

小崎川の左岸の独立丘状の山丘頂部に平坦地がある。周囲の低地との比高差は約40mを測る。

椎葉山「三人衆」の一人である弾正の兄の那須左近大夫とその子の主膳が城主であったと伝えられる。

### (5) 小崎屋敷

現在水田となっている曲輪の周りに石垣が築かれている。近世の居館とすべきものと考えられるが、地元ではこちらが「小崎城」と伝えられており、「小崎城」の説明板もある。

なお、山間部の城郭で石垣が築かれている例は、後出の雄八重城［16−(1)］などいくつか認められる。年代や性格等について調査を進める必要があろう。

## 16 西都市

### (1) 雄八重城

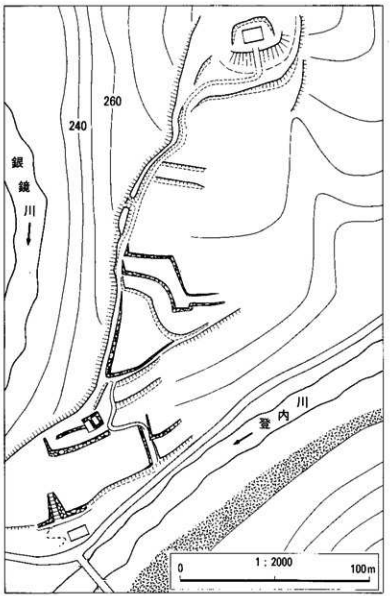
雄八重城跡と伝えられる地点は、尾八重集落の背後の緩斜面端部にあたり、現在は数段の造成地が認められる。切岸の要所には石垣が築かれる。近世の所産か。

伊東氏48塁の一つで、「雄八重領主」は米良分左衛門とされる。

### (2) 銀鏡城［古城］

銀鏡川と登内川の合流点近くの丘陵上に立地する。最高所は神社となっており、その下段の平坦地の切岸には前項雄八重城同様、石垣が構築されている。

米良氏の居城と伝えられる。




銀鏡城縄張り図（北郷泰道原図作成）

(3) 仮屋城

銀鏡城の西方約0.3kmの山腹にある。延命寺跡と伝えられる平坦地が数段あり、石垣も見られる。曲輪は墓地となっている。

(4) 銀鏡囲

「囲」地名が残る。遺構は不明瞭。銀鏡城や仮屋城に関わる居館跡と推定される。

(5) 穂北城

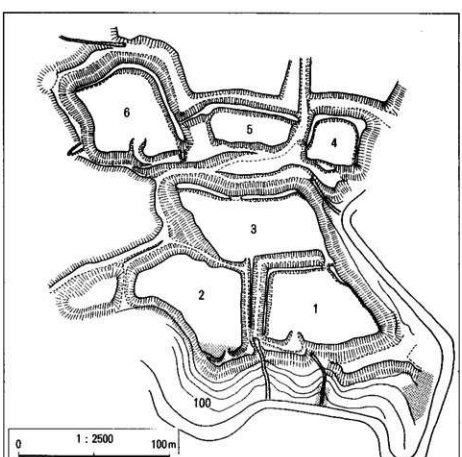
一ツ瀬川中流の左岸の段丘端部に位置する。南方は一ツ瀬川の断崖に面している。空堀で区画された6つの曲輪と土塁、虎口が明瞭に認められる。『日向地誌』によれば3区に分かれているとされ、「榎ノ木城」「中ノ城」「東ノ城」という呼称が見える。伊東氏48塁の一つとされる。家臣の長倉氏が城主であった。

一部発掘調査が実施され、柱穴群や虎口が検出されたほか、輸入陶磁器などの遺物が出土している。

文献

1）北郷泰道他　『穂北城跡』　1992　宮崎県教育委員会

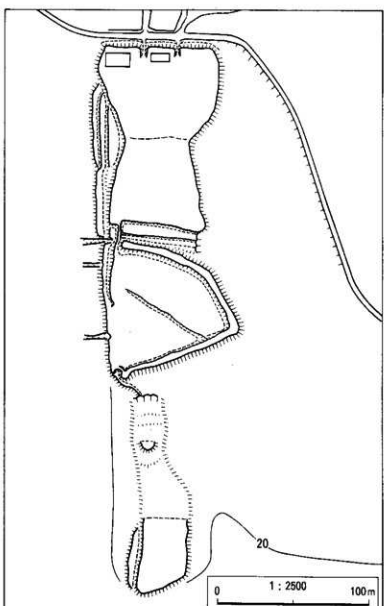
2）簗方政幾編　『西都市埋蔵文化財調査報告書第24集　三納城跡・穂北城跡』1996　西都市教育委員会




穂北城縄張り図（北郷泰道原図作成　文献1所収）

(6) 山城［古城］

一ツ瀬川左岸の、岬状の突出部に立地する。標高は周りの低地より若干高い程度で、さほどの比高差はないが、空堀、土塁によって守りを固めている状況がうかがえる。




山城［古城］縄張り図（崎田欣二原図作成）

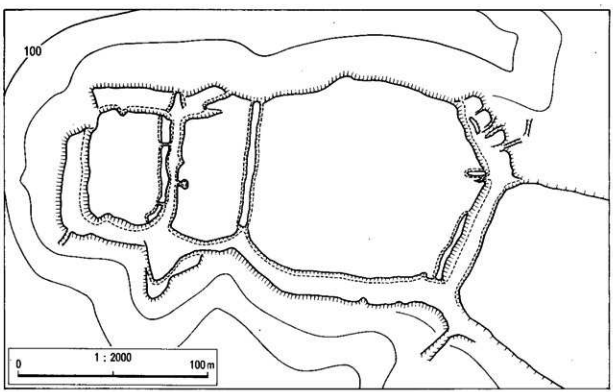
(7) 平城

前項山城の北西の台地に「平城」の字名が残る。現状では畑地となっており、詳細は不明。

(8) 千田城

穂北城の南東約1.6kmの段丘端部にある。穂北城と同様の台地地形上に立地しており、標高もほぼ同じである。

台地の続く東側を大きな空堀で遮断し、その西側にある城郭本体を守っている。堀底から曲輪に入る虎口が認められる。

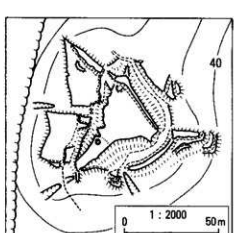



千田城縄張り図（崎田欣二原図作成）

(9) 城平

一ツ瀬川左岸の小丘陵上に立地する。寺院建設により一部破壊を受けるが、曲輪、土塁、竪堀などの諸施設が明瞭に残る。

「城平」の地名が残るのみで、文献には一切あらわれない。




城平縄張り図（崎田欣二原図作成）

### ⑽ 三納城

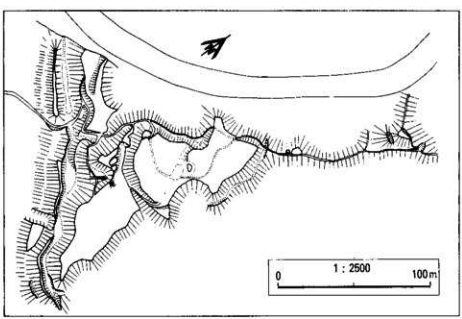
三納川左岸の、南方向に突き出た丘陵の端部に立地する。主たる3つの曲輪と要所に入れられた堀切から構成される。中央の最高所の曲輪が主郭と見られ、そこに入る虎口も、後述する発掘調査の結果確認された。かつては土塁も存在していたらしい。南西側には規模の大きな空堀（幅16.2m、深さ約13m）が築かれている。

伊東氏の48城の一つで、家臣の飯田氏が城主であった。

主郭と想定される曲輪で発掘調査が実施され、掘立柱建物や虎口が検出されている。

文献

1）簑方政幾編　『西都市埋蔵文化財調査報告書第24集　三納城跡・穂北城跡』 1996　西都市教育委員会




三納城縄張り図（簑方政幾原図作成　文献1所収）

### ⑾ 平城

前項三納城の近くに「平城」の地名が残る。居館などの存在を推定したが、実態は不明である。

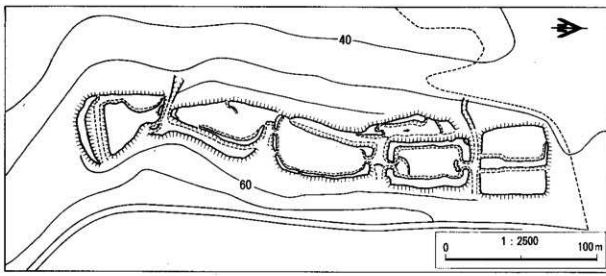
### ⑿ 有塞城［岡富城］

城跡は西都市と児湯郡新富町にまたがる。一ツ瀬川の左岸、祇園原台地の西南端に立地する。一ツ瀬川を自然の堀となし、東側は祇園谷の地形を有効に利用、丘陵部の最先端に曲輪、堀、土塁を巧みに設けている。東西方向の空堀により各曲輪を独立させている。

大手は東側の祇園谷側と見られ、各曲輪ともこの方向に向けて土塁、虎口、帯曲輪等の施設を設け防備を厳重にしている。各曲輪の虎口付近の土塁は特に高い。虎口のうち桝形を設けたところが大手口と見られる。他にも内桝形を設けたところがあるが、それは後世の改修の可能性が推測される。

なお、図で示した範囲の北側の谷向かいにも城郭構造が認められる。

『日向地誌』には「建武ノ頃長友兵庫頭行安ト云者居リシ所ナリ」と記されている。




有峯城縄張り図（崎田欣二原図作成）

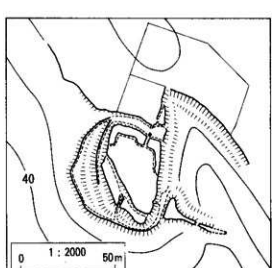
⑬ 三宅城

古墳群で有名な西都原台地の端部にある。『日向地誌』によれば、台地に続く北・西・南方に空堀を築いて往来を遮断していたという。宅地・畑地化した現在では遺構は不明瞭となっている。

伊東氏家臣の垂水氏の居城とされる。

⑭ 上宮城

一ツ瀬川水系の山路川に臨む台地端部にある。突き出た台地の基部に空堀を築き、その先端に曲輪を設定している。空堀よりも台地寄りの部分は破壊を受け、旧状は不明。




上宮城縄張り図（崎田欣二原図作成）

⑮ 山路城

西都原台地西方の「高取山展望台」のさらに西側の丘陵頂部に、狭小な平坦地がある。特別な施設は認められないが、四方がまさに絶壁となっており、眺望も良好である。

なお、西都原台地西縁部の寺原地区にも「城跡」と伝えられる地点がある。

⑯ 平野城

平野の集落が立地する台地（標高約130m）の南端部付近にある。一部は宅地や道路建設の影響を受けるが、曲輪と見られる平坦地が明瞭に残る。

伊東氏48塁の一つで、「平野領主」は米良民部少輔であった。

⑰ 平郡城

一ツ瀬川水系の三納川右岸の台地上に立地する。南を除く三方は崖に面する。南側には空堀を設けて防御していたと伝えられるが、現在はその痕跡は認められない。

伊東氏家臣の平郡氏の居城であった。

⑱ 鴨山

平郡城の北東方向の丘陵の突端部にあたる。頂部に平坦地があり、現在加茂神社が鎮座している。

⑲ 都於郡城

一ツ瀬川水系の三財川の流路が、北へ向かう地点の右岸（東岸）台地上に広大な城域を設定している。標高は100m前後で、周りを急峻な断崖に囲まれている。西北方は三財川が天然の外堀の役割を果たす。

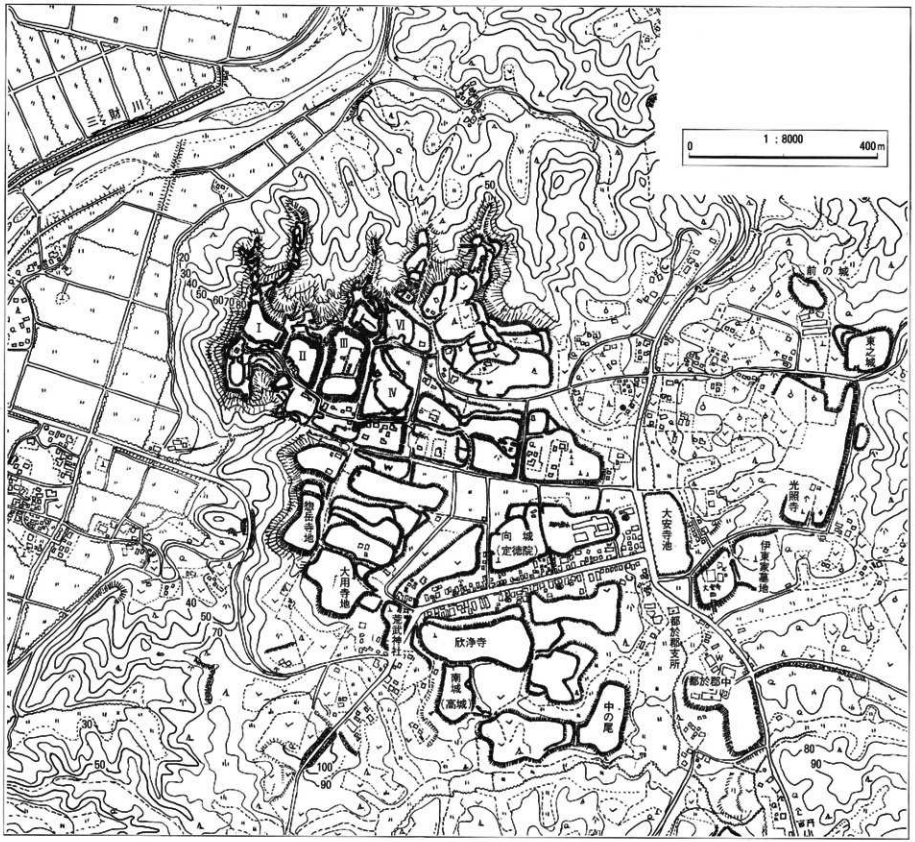
中心の曲輪群を五城郭と称しており、「本丸」「二ノ丸」「三ノ丸」「西ノ城」「奥ノ城」という曲輪名が付されている。その範囲は南北約260m、東西約400mに及ぶ。都於郡城自体は、それら主要曲輪群の外側の平坦面（12か所程）や腰曲輪、砦的な曲輪群、空堀などで構成され、一大防衛機能を有していたようである。

最高所は標高105mの「三ノ丸」（図中Ⅰ）で、その北から西側にかけては急崖を成している。比高差は80m程ある。東隣の「二ノ丸」（図中Ⅱ）との間には規模の大きな空堀が築かれている。この曲輪が最も防衛面では優れているようである。

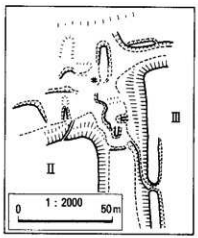
「本丸」（図中Ⅲ）は南北約70m、東西約45mで、中心曲輪内では最大の面積を有する。やはり「二ノ丸」との間に規模の大きな空堀が見られる。周囲に高さ約１mの土塁を巡らせている。土塁はこの他の中心曲輪群においては比較的良好に残っている。また、「奥ノ城」（図中Ⅲの北側）には両輪の桝形空間をもつ虎口が認められる。いわゆる「T」字形となる型式のものである。

主要曲輪群の外側には「東ノ城」「向ノ城」「南ノ城」などの出城や、惣岳寺跡などの寺院、伊東氏墓地などが連なる。また城下の「都於郡町」には短冊型地割が認められる。

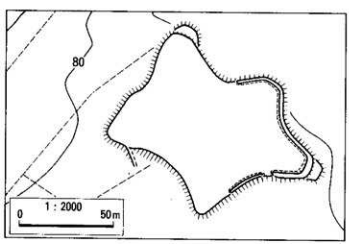
当城は、南北朝期の建武２（1335）年に伊東祐持が築き、以後、日向中央部に一大勢力をほこった伊東氏の本拠として栄えた。ただし、永正元（1504）年火災に見舞われ、以後、伊東氏は佐土原城や宮崎城に住むことも多かったという。伊東氏没落後は島津氏の家臣鎌田政親が入った。近世には佐土原藩領に属し、廃城となる。



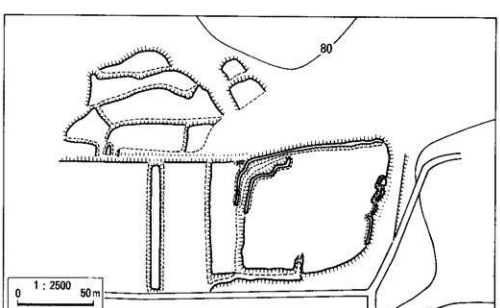

都於郡城縄張り図（八巻孝夫原図作成　文献２所収）



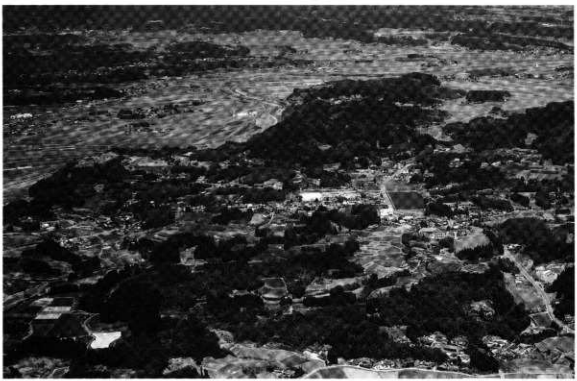

都於郡城曲輪Ⅲ北側虎口等縄張り図（北郷泰道原図作成）



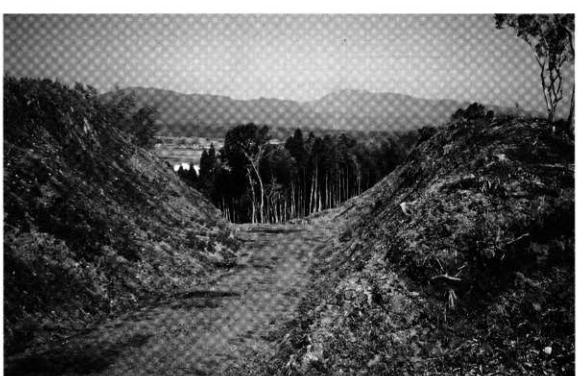

都於郡城前の城縄張り図（簑方政機原図作成）




都於郡城東之城縄張り図（崎田欣二原図作成）



都於郡城全景



都於郡城曲輪Ⅱ・Ⅲ間空堀

昭和62年には、「本丸」部分で史跡整備のための確認調査が実施された。多数の柱穴を含むピットが検出されたが、そのつながりは解明されていない。

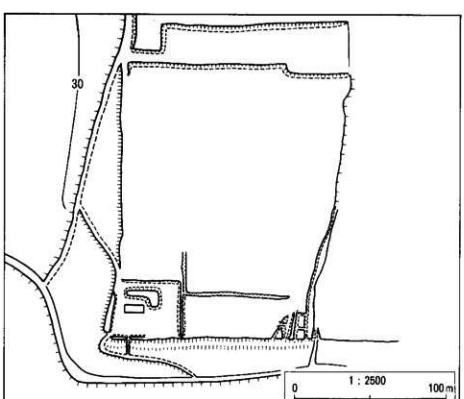
文献
1）大町三男　『都於郡懐古』　1978
2）八巻孝夫　「都於郡城」『図説中世城郭事典』3　1987　新人物往来社
3）日高正晴・緒方吉信　『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集　都於郡城址本丸跡』1988　西都市教育委員会
4）㈶観光資源保護財団　『蘇る日向国都於郡城跡　－都於郡城跡調査報告書－』

### ⑳　石野田城［古城・小城］

三財川左岸の段丘端部に立地する。都於郡城の対岸（西方約2km）にあたり、それに関連する城館と考えられる。

段丘崖となる南～南東方向以外は台地に続く。現在、略東西方向の小規模な空堀を見ることができるが、往来を遮断するほどのものではない。祠堂のある一角は、本来一段高い曲輪であったと見られる。

このように、空堀などの施設が厳重でないことや、低地との比高差がさほどでないことなどから、全体として防御性は高いとは言えず、居館的な機能を有する場であったと推定される。




石野田城縄張り図（崎田欣二原図作成）

(21) 中原城［小野城］

三財川右岸の段丘（中ケ原台地と呼ばれる）端部に曲輪と見られる平坦地がある。北東側のみ台地に続くため空堀、土塁を築き守りを固めている。

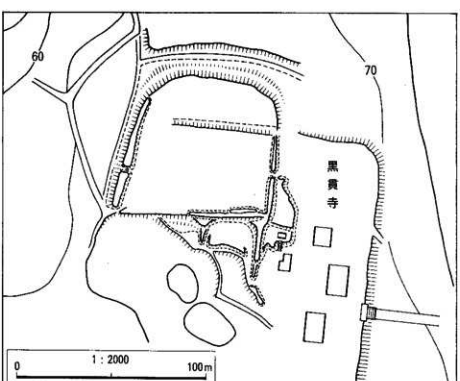
道路建設に伴う発掘調査が行われ、空堀、土塁の構造が明らかとなった。

文献

1）簑方政幾他　『中原遺跡（中原城跡）　西都市文化財発掘調査報告書第10集』 1990　西都市教育委員会

(22) 黒貫城

都於郡城の南方の台地上に立地する。黒貫寺境内の背後の丘陵上にある。曲輪とそれを囲む土塁が認められる。




黒貫城縄張り図（崎田欣二原図作成）

(23) 囲

三財川右岸に「囲」の地名が残るが、分布地図で示した丘陵端部を含め、明瞭な遺構は認められない。現在集落が形成されている低位段丘上に居館があったのであろうか。

## 第3章 発掘された高鍋町

### (1) 肥後屋敷

海岸段丘の崖際付近に「肥後屋敷」や「堀之内」などの地名が残る。明瞭な遺構は残っていないが、青磁・白磁などの遺物が散布している。

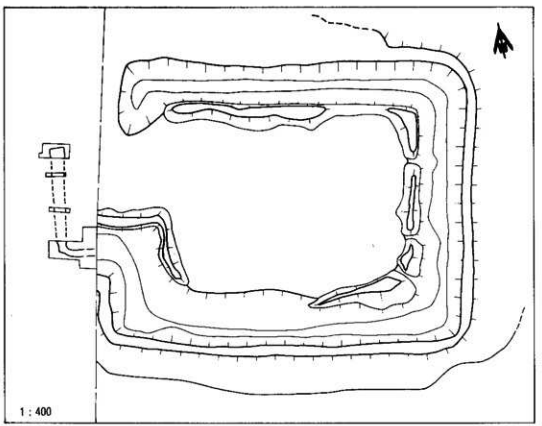
### (2) 老瀬坂上第2遺跡

発掘調査の結果、空堀と土塁で囲まれた、陣跡と見られる遺構が検出された。西側に入り口を構えているが、空堀は北に屈曲して延び、茅の機能を持たせて内部を見通されないようになっている。

文政3（1820）年に書き写された「高城川の戦い布陣図」（高鍋町歴史総合資料館蔵）に描かれている、高城・耳川の合戦の際の「以久公御陣」であろうと推定されている。

文献

1）山本　格編　『高鍋町文化財調査報告書第6集　老瀬坂上第2遺跡・高鍋城跡』　1991　高鍋町教育委員会




老瀬坂上第2遺跡実測図（文献1所収図を基に製図）

### (3) 天正6年島津総陣

「惣陳」「太守（義久陣）」など、絵図によって記載、描かれ方は異なるが、当地一帯に、高城・耳川の合戦の際の島津氏方の主力の陣が築かれていたと見られる。

現在、現地には痕跡は残らない。

(4) 高鍋城［舞鶴城］

高鍋町市街地の西方の丘陵端部に築かれた城郭で、もとは財部城と称した。最高所の標高は74m、城域の東側には塩田川が、南側には宮田川が流れており、水堀と共に防御線としての役割を担っていたのであろう。

西端部に大きな堀切があり、丘陵と城域を裁断している。この堀切は、「野首の堀切」と呼ばれ、慶長12（1607）年に大改修されたと伝えられる。

現在残る城郭は、藩庁のあった「本丸」、護国神社のある「奥御殿」、現在、舞鶴神社、高鍋町歴史総合資料館のある「二の丸」高鍋農業高校の敷地となっている「三の丸」より成ると説明されるが、これは後に述べる近世以降の姿であり、むしろ中世城郭としての中心城はより西側にある。

なお、『本藩実録』によれば、慶長14（1609）年「詰の丸」に三階の櫓を建てたとの記述があり、伝承では石塁の北側（最高所の曲輪の南側）にあったという。

水堀は、「三の丸」東側の、北は黒谷から南は簑崎口に至るまで、約530mにわたって掘削されており、大手門付近など要所には石垣が築かれている。

当城は、中世における領有関係から、おそらく財部土持氏が創建したものと考えられる。その後長禄元（1457）年の小浪川の戦以降は、伊東氏の領有するところとなった。伊東氏の没落後、島津氏は川上忠智を配した。豊臣氏の九州平定後、新納院（当地一帯の地名）および櫛間には、筑前より秋月氏が入封した。秋月種長は、当初櫛間城に入るが、慶長9（1604）年に財部に移っている。当城の近世城郭への改修はその頃から始まり、寛文・延宝年間頃に本格的に行われた。なお、「高鍋」への改称は、延宝元（1673）年、三代藩主種信の代とされる。

なお、当城では過去に小規模ながら発掘調査が数回実施された。そのうち前述の三階櫓の確認のための調査では、礎石や、石塁天端にほぼ並行する石列は見られたものの、その存在の確証をつかむまでには至らなかった。

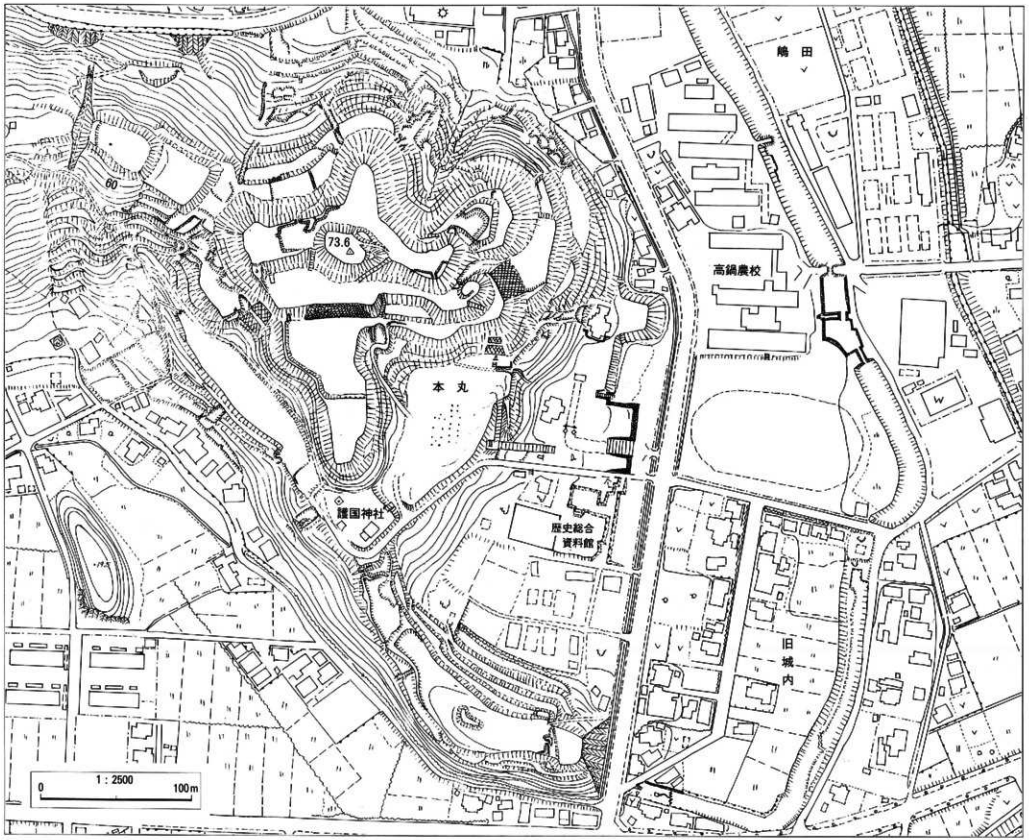
また鴫田門推定地の南西側にある屈曲輪の調査では、下層の遺構（石積み列など）が確認されている。

文献

1）山本　格編　『高鍋町文化財調査報告書第6集　老瀬坂上第2遺跡・高鍋城跡』　1991　高鍋町教育委員会

2）長友郁子　「高鍋城下遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』37　1994　宮崎県教育委員会

3）吉本正典編　『高鍋城跡（鴫田地区）』　1997　宮崎県埋蔵文化財センター



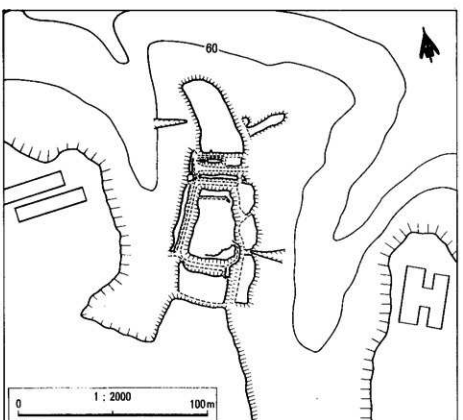

高鍋城縄張り図（八巻孝夫原図作成）

## 18 児湯郡新富町

### (1) 上日置城

海岸台地の端部に立地する。標高は65mで、台地面と変わらない。東および西方向には谷が入る。空堀と堀底に築かれた土塁で、北にのびる台地を截断し、守りを固めている。主郭と見られる中央の曲輪には、南東側に虎口が認められる。

日置は古くは「倍木」と記され、国富荘に属していた。近世には高鍋藩領となった。当城についての沿革等は伝わっていない。

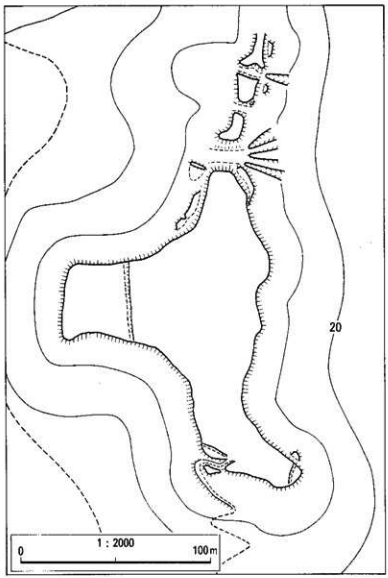



上日置城縄張り図（崎田欣二原図作成）

### (2) 越田城（仮称）

南にのびる丘陵の南端部に立地する。主郭と見られる曲輪は一面の広い平坦地となっており、その南端部には虎口が認められる。北側は空堀で往来を遮断している。

文献には記されておらず、沿革等は不明である。

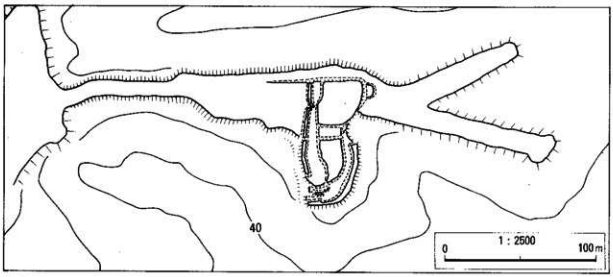



越田城（仮称）縄張り図（崎田欣二原図作成）

(3) 城ヶ尾

西にのびる台地上に立地する。主郭と見られる曲輪は空堀によって守られている。城域の東および西側には尾根がのびており、そこには古道が通っていたという。

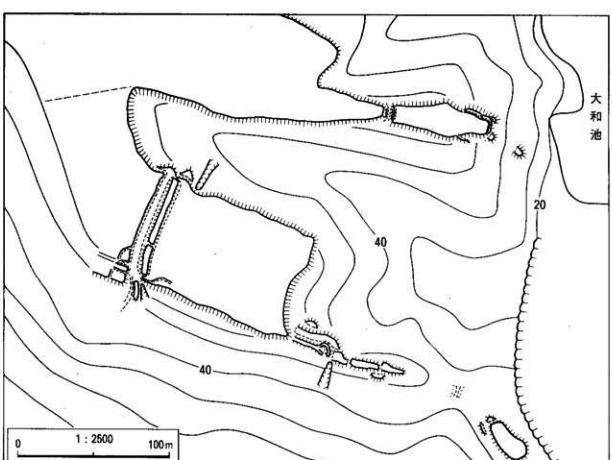
当地も城館関連の字名が残るが、沿革等は不明。




城ケ尾縄張り図（崎田欣二原図作成）

(4) 城法寺

南東方向にのびる台地上に立地する。南方向は一ツ瀬川河岸の低地に面する。




城法寺縄張り図（崎田欣二原図作成）

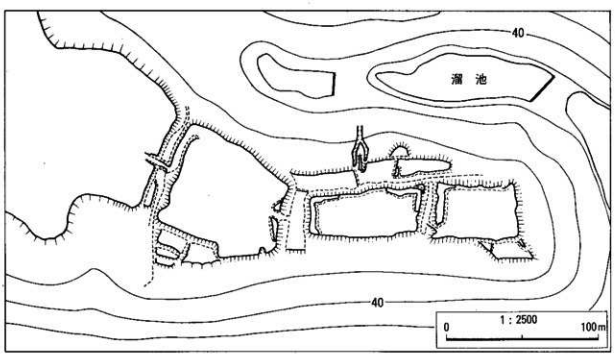
二又状に分かれる台地の端部を空堀で截断して城域を設定している。南東端部の曲輪は見張り台的な機能を有すると考えられる。

その位置から、「文明6年三州処々領主記」(『都城島津家文書』)の「新田城」に該当するものと考えられる。

(5) 竹ケ山

前項城法寺と同じく、一ツ瀬川に面する河岸台地上に立地する。東約0.5kmの地点には後述する上城がある。北～東方向には谷が入る。

空堀で区画された主たる曲輪が3面あり、そのうち東端の曲輪が主郭にあたると考えられる。曲輪内の要所には土塁が築かれている。




竹ケ山縄張り図(崎田欣二原図作成)

(6) 弁指

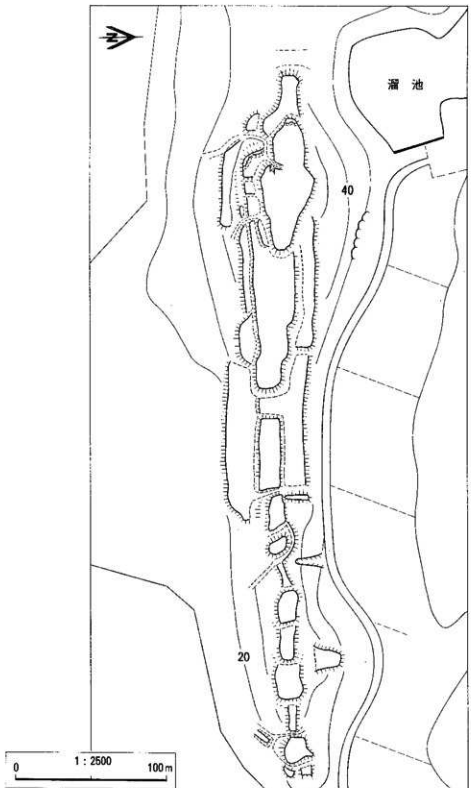
東の海岸低地に向かって突き出た台地上に立地する。付近に「城ノ下」の字名もある。空堀、土塁等の施設が残存している。

(7) 上ノ城

一ツ瀬川河岸の台地上に立地する。南側の低地には上城元の集落がある。

東西方向に曲輪が連続する。その長さは約480mに及ぶ。西端に大きな堀切を築いて台地を截断する。現在、全域が竹林となり見通しがきかないため、曲輪どうしの序列の確認が難しいが、最も標高が高く、虎口の明瞭な西端の曲輪が主郭であると見られる。その東側の切岸は高く、壮観である。

伊東氏48塁の一つに数えられる「富田城」であろう。『日向記』によれば、「富田城主」は湯地五郎九郎であった。伊東氏没落後は、島津氏の家臣の新納近江守武久が配された。近世には佐土原藩領となる。

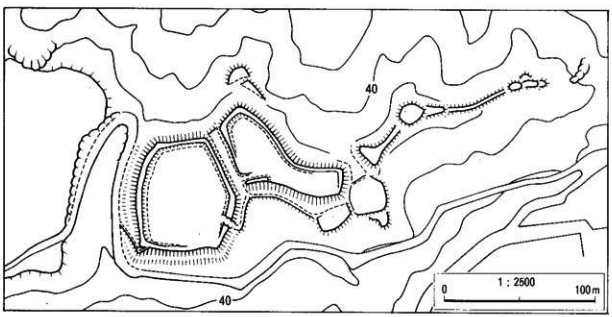



上ノ城縄張り図（崎田欣二原図作成）

(8) 下ノ城

上ノ城の東約1㎞の台地上に立地する。最高所の標高は60mで、上ノ城とほぼ同じである。城域は南北約100m、東西約280mを測る。

西端に大きな空堀を築いて台地を裁断している。主郭と見られる曲輪には、その周囲に現状でも2mをこえる土塁が築かれている。その東隣の曲輪にも、南辺を除いて土塁が巡る。




下ノ城縄張り図（崎田欣二原図作成）

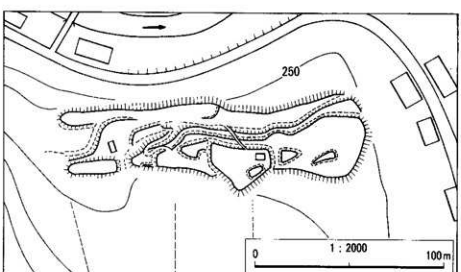
## 19　児湯郡西米良村

### (1)　村所城

「米良城」または「米良御所」とも称する。桐原の「囲」と呼ばれる箇所にあり、現在は水田となっている。

肥後の菊池氏系の米良氏の居城である。米良氏は当初銀鏡に入ったが、後に当地に本拠を移したと伝えられる。

なお、下に示した図は「新城」と呼ばれる部分のもので、重治の代に、旧来の居館の東側に新たに築かれたと伝えられる。三方が崖となる要害の地で、旧来の居館に比べて防御性に優れている。緊張状況に備えた詰城の性格を持つところであろう。




村所城縄張り図（北郷泰道原図作成）

### (2)　小川城［小川館］

一ツ瀬川支流の小川沿いの小段丘上にある。米良氏の居館で、前項村所城より当所に移った。年代については諸説があり、『日向地誌』では重隆の代とする。『西米良村史』(1973)に内部の略図が掲載されている。

付近に「囲」の字名が残る。

## 20 児湯郡木城町

### (1) 石城

小丸川上流の、蛇行する川に向かって突出する丘陵上にある。城域内に「新しき村」がある。西方からの侵入に備えて空堀が築かれていた。現状では不明瞭となっているが、わずかに痕跡が認められる。

当城は、古くは南北朝期に築かれたとされ、永禄年間には伊東氏の支配下にあった。伊東氏48塁の一つで、城主は長友源二郎であった。天正6（1578）年には、大友氏の日向侵攻の際に、これに応じた長倉勘解由ら伊東氏の旧臣は、当城に立て籠もり島津氏に対した。このように、日向中央部の拠点として重要視されたところである。

### (2) 浜口

高城方面から石河内へ抜ける峠（小屋町峠）付近から西方向にのびる丘陵の端部にあたる。石河内や石城方面を見下ろすことができる。詳細は不明であるが、数段の平坦地が認められる。

### (3) 高城

小丸川とその支流の切原川にはさまれた、東西方向に細長くのびる丘陵の端部に立地する。最高所の標高は約60m、低地との比高差は約40m、城域は南北約200m、東西約750m（湯屋坂から東の範囲）に及ぶ。

丘陵の東端部に主郭と考えられる曲輪があり、その周囲に数段の帯曲輪が巡っている。主郭の西側は、現在駐車場となり一部破壊を受けているが、馬出にあたる曲輪と見られ、土塁も残存している。主郭の虎口は桝形を形成していたというが、これも現在では破壊され、確認できない。主郭の中央付近にも空堀を設け、中程を土橋でつないでいる。

そしてそれらの曲輪群と丘陵基部との間は、4本の空堀（現在、より西側の畑地に第6堀の標識があるが不明瞭）により切断される。空堀の先端は斜面を降り、そのまま竪堀となる。さらに西方の湯屋坂付近も人工的に切断した痕跡がある。

なお、当城の東方の、現在の木城町市街地東部の旧道沿いには短冊状の地割りが残っている。

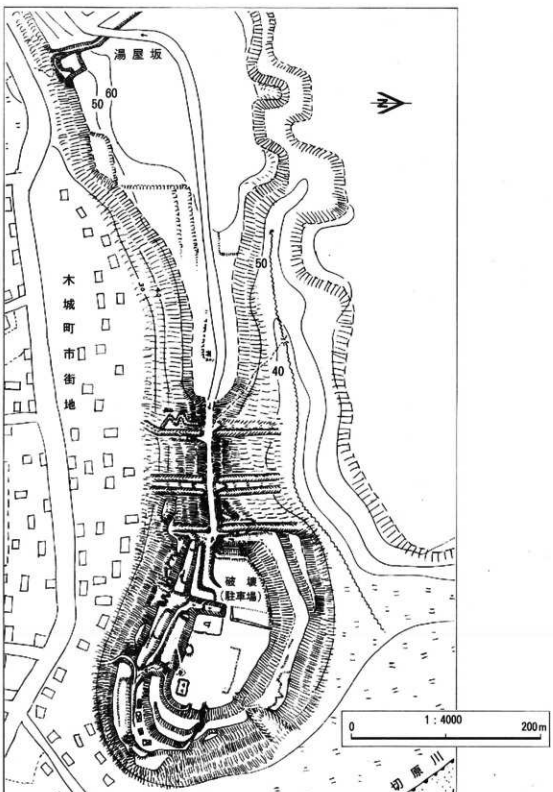
この高城は、交通の要衝にあることから、古来より戦略上重要な位置を占める城郭であった。古くは建武2（1335）年、島津時久が新納院を得て新納氏と姓を改めた頃に築かれたとされ、その後は財部土持氏が領有していたが、長禄元（1457）年以降、伊東氏の持城となった。伊東氏48塁の一つとされ、永禄年間には野村蔵人佐が城主であった。

伊東氏没落後は島津氏家臣の山田新介有信が入った。天正6（1577）年の大友氏との高城・耳川の合戦の際には大友氏の大軍に包囲されながら耐え、やがて島津氏の援軍が到着し、小丸川での合戦により大友氏に打撃を与えた。

また豊臣氏による九州制圧の際には、羽柴秀長が大軍で当城を包囲している。結局は島津義久の降伏により開城するが、地元では「落城しなかった」と語り継がれている。ただし、そのような「誇り」となるべき存在も、最近では破壊が目立つ。適切な保護が必要と言えよう。

文献

1）村田修三　「高城」『図説中世城郭事典』3　1987　新人物往来社




高城縄張り図（八巻孝夫原図作成　文献1所収）

(4) 平城

高城の南方の、木城町役場近くの河岸低地に「平城」の字名が残る。また、日南市所蔵の「高城陣構図」にも堀で囲まれた区画が描かれている（『宮崎県史』通史編中世 1998)。

現状でも、土塁の痕跡らしき土盛りが認められる。

(5) 岩戸原城

『史蹟調査』に記載がある。ただし付近にはさほど明瞭な遺構は見られない。

羽柴秀長の家臣の小早川隆景が一時駐屯したところとされる。

(6) 目白坂塁

根白坂砦とも称する。高城の南西方向約2.4kmの台地端部に位置する。北方は段丘崖に面し、南方は台地に続く。西側に古道（高岡往還）が通る。平坦地と空堀が認められる。

天正15年に豊臣軍による高城攻めの際、宮部善祥坊がここに陣を構えたとされる。島津氏はここに急襲をかけたが果たせなかった。

(7) 古塁

『日向地誌』によれば、前項目白坂塁の東方に「古塁」が2箇所あったとされる。いずれも天正15年の豊臣軍と島津軍の攻防の際に築かれたものである。目白坂塁の東方には藤堂高虎と尾藤甚右衛門が、さらにその東方には黒田孝高が陣を構えたと伝えられる。

現在明瞭な施設等は残っておらず、詳細については不明であるが、付近に「陣ノ内」という字名が残っていることから遺構が埋没している可能性がある。なお、目白坂塁の東方向ということになると、分布地図の20−(7)あるいは17−(3)よりも北側の、段丘崖近くにあった可能性が大きい。

## 21 児湯郡川南町

### (1) 松山墨

切原川左岸の、南に突き出た台地上に立地する。新納院高城と相対する位置にある。

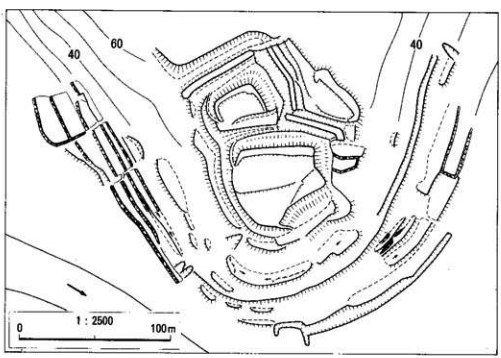
大きくは３つの曲輪から成る。曲輪の間には規模の大きな空堀が築かれている。北西側の空堀の中には土墨があり、あたかも二重の空堀のようになっている。

主たる曲輪群の南西側には小さな段が連続しており、石墨が構築されている。

天正６（1578）年の高城・耳川の合戦の際に築かれた「本陣」「松山城」「松山墨」に該当すると見られる。大友氏方の佐伯宗天が陣を構えた。また、石墨などは、天正15（1587）年の豊臣氏による九州平定の際の、羽柴秀長の軍勢によるものであろう。

文献

1）島岡　武　「高城の戦いについて　－高城と松山城を中心に－」『中山修一先生喜寿記念論集　－長岡京古文化論叢』　1992




松山墨縄張り図（島岡　武原図作成）

### (2) 河原之陣

やはり、天正６年の高城・耳川の合戦の際の大友氏方の陣跡の比定地である。

### (3) 御山［山城］

海岸台地の端部に位置する。曲輪、空堀、土墨等の遺構が認められる。

### (4) 琵琶城

当城も海岸台地の北端部にあたる。標高は47m前後。字名は残るものの遺構は不明瞭。

### (5) 甘付

海岸より一段高い段丘上にあたる。空堀が見られるが、性格等は不明。

## 22 児湯郡都農町

(1) 堀内

海岸段丘上にあたる。城館関連の地名が残るが、現地では遺構は確認できない。

(2) 城ン平

宮崎平野の北縁部に位置する。山丘頂部（標高256m）に平坦地が認められる。堀切等は確認されていない。

(3) 鍛冶屋敷

都農町市街地西方の、東にのびる台地上に立地する。城館跡関連の伝承が残るが、宅地化が進み、遺構はほとんど確認できない。

## 5．県央地区

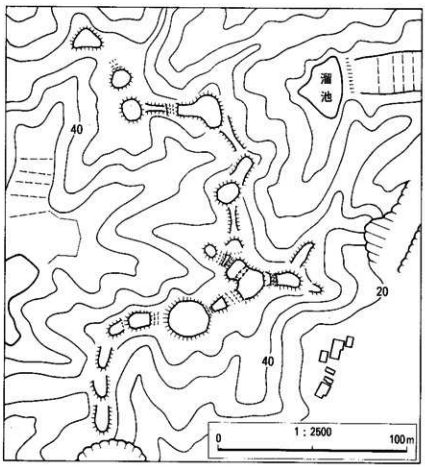
### 23　宮崎市

#### (1)　丹後城

宮崎市街地北部の、海岸平野に向かって突き出た丘陵の東南端部に位置する。この丘陵の南側斜面一帯には、国指定史跡の蓬ヶ池横穴墓群がある。

標高65mの頂部付近に主郭と見られる平坦地があり、その東側には比較的明瞭な堀切が認められる。ただし西側の曲輪は削平が徹底していない。それら中心部から各方向にのびる尾根上に小さな平坦地が連続するが、どこまでが城域であるのか、厳密には不明瞭となっている。

宮崎土持氏の家臣の三須丹後守の居城と伝えられる。




丹後城縄張り図（吉本正典原図作成）

#### (2)　北ケ迫

西方向に突き出た丘陵の端部にある。文献には一切あらわれないが、数段の平坦地や空堀が認められる。平成10年に発掘調査が実施された。

### (3) 宮崎城［池内城、龍峯城］

宮崎市街地北部の、南北方向に連なる丘陵上に立地する。最高所の標高は93m。東および西側には谷が入る。

丘陵の尾根筋に曲輪を連ねる大規模な城郭で、南北700m、東西500mに及ぶ。主郭と目されるのは図中Ⅰの曲輪で、尾根続きの北西、南東の両方向に規模の大きな空堀を築いて防御を固めている。南西の空堀には土橋があり、空堀はその南側で横矢をかけるように折れている。Ⅱの曲輪の東側およびⅣの曲輪の西側には横堀が入る。

『日向地誌』によれば、各曲輪には本城の「椎城」の他、「斉藤城」「服部城」「長友城」「彦右衛門城」といった名が付けられていた。守将の名と考えられている。

古くは建武２（1335）年に図師随円、慈円父子が当城を拠点に兵を挙げたと伝えられる。その後伊東氏支族の伊東県氏が領有したが、文安４（1446）年には伊祐祐堯が攻め取り、家臣の落合彦左衛門を配した。伊東氏48塁の一つで、一時期、伊東義祐も入城している。伊東氏全盛期の永禄年間には長嶺紀伊守や肥田木越前守が城主となった。

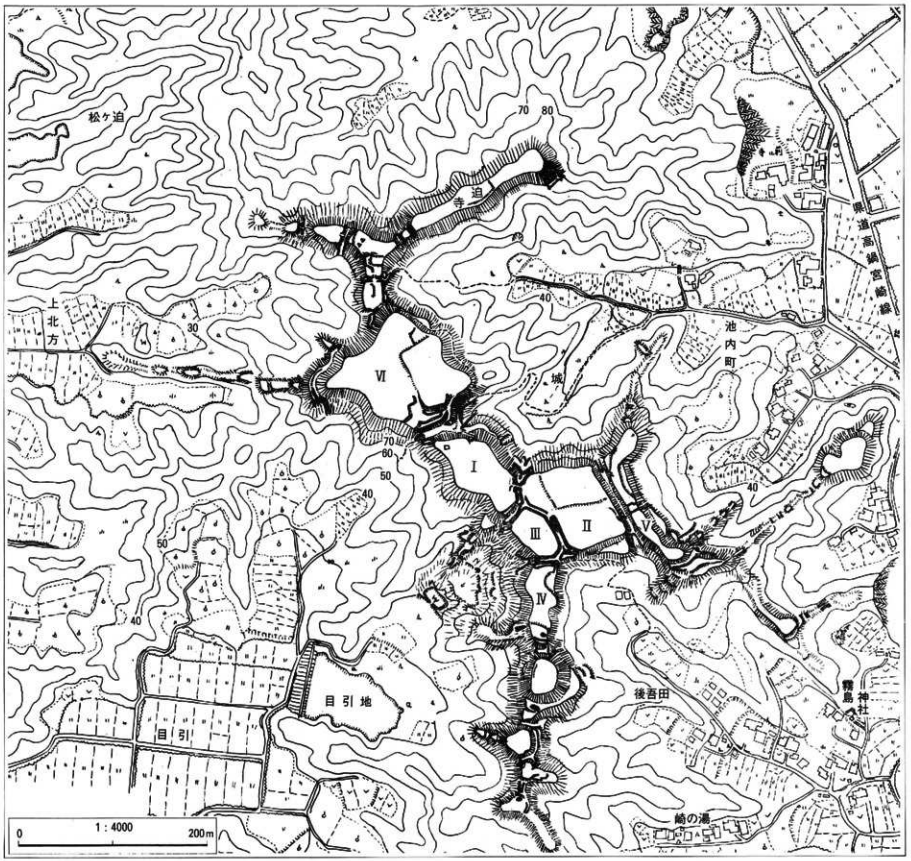
伊東氏没落後の天正６（1578）年には島津豊後守忠朝が、ついで天正８年には家臣の上江覚兼が入城した。覚兼の在城中の出来事は『上江覚兼日記』につづられている。

豊臣氏による九州平定以降は、延岡藩領となった。慶長５（1600）年には、関ヶ原合戦中に、飫肥城主伊東祐兵の命を受けた稲津掃部助が当城を攻略したが、結局、高橋元種に返却されるという事件があった（「稲津騒動」）。

文献

1）八巻孝夫「宮崎城」『図説中世城郭事典』３　1987　新人物往来社

宮崎城全景




宮崎城縄張り図（八巻孝夫原図作成　文献１所収）

(4) 陣ノ内

宮崎城の立地する丘陵は、断列化しながらさらに南方にのびており、その南東端部付近に「陣の内」「陣の下」の字名が残る。現在、頂部に平坦地は認められるものの実態は詳かでない。

(5) 今城

久保集落の北西の台地上に位置する。付近は「城山（じょんやま）」と称される。西～北側には比高差約20mの深い谷が入り、天然の障壁となっている。

(6) 竹籠城

宮崎城の西北西約1.6kmの台地上に立地する。「隠れ城」とも呼ばれていた。

現況は畑地となっており、遺構は認められないが、『日向地誌』によれば、周囲は断崖となっており、北東側のみ集落に続くため、空堀を設けて往来を遮断したという。

日高氏の居城であったと伝えられる。

(7) 倉岡城

大淀川左岸の独立丘陵上に立地する。最高所の標高は38m。城域は南北約180m、東西約110mを測る。

倉岡城縄張り図（橋本英俊・吉本正典原図作成）

堀底道を兼ねた規模の大きな横堀を設けて曲輪を区画する構造となっている。『日向地誌』によれば、3区に分かれているとされ、「大城」「大森城」「旗懸松城」という曲輪名が見える。このうち「大城」が主郭にあたる曲輪であろう。この主郭まわりの切岸は急峻で、比高差はさほどでないが、防御性は高い。「大森城」は南端部の曲輪で、大淀川方面が一望できる位置にある。

当城は伊東氏48塁の一つで、城主は野村隠岐守であった。天正5年以降は島津氏が領有するところとなった。近世に入ると倉岡は、薩摩藩の東目を守る重要な外城（郷）と位置づけられた。

(8) 柿迫

倉岡城の北東約1kmの丘陵端部に位置する。大淀川と支流の本庄川が合流する地点に近い。現在中心部を県道が貫通しており、その南北に城郭構造が認められる。北側部分については発掘調査が実施され、破壊されている。

(9) 跡江城

宮崎市街地北西部の、低地中に取り残された形で弧状に連なる小丘陵上に立地する。この丘陵上には国指定史跡の生目古墳群が分布しており、当城はその南東端部を占める。

現在、広い平坦地と、帯曲輪状の段落ちが認められる。『日向地誌』によれば台地との間を区切る「小隍」があったという。

建武3（1336）年、瓜生野八郎左衛門が当城で挙兵したが、北朝方の伊東祐持や土持宣栄に攻略され、落城したという。

(10) 白糸城

大淀川右岸の小丘陵上にある。規模は小さく、現状では遺構もはっきりしない。

応永年間に島津久豊が築いた穆佐城の支城とされる。

(11) 石塚城

現在生目小学校地となっている台地上が城域であったと伝えられるが、校舎建設により破壊を受け、ほとんど旧状をとどめない。旧国道をはさんだ北東側の丘陵上にも、尾根上に平坦地が連続するが、現状では堀切等の施設は認められない。ただし、『史蹟調査』によれば、西方に堀切があったという。

応永年間には伊東氏庶家の伊東祐武が在城しており、後に伊東氏惣領家の所領となった。伊東氏48塁の一つで、城主は平賀刑部少輔であった。

(12) 高蝉城

宮崎市街地西縁の丘陵上に立地する。頂部（標高45m）には天保年間まで妙円寺という寺院があったという。

応永8（1401）年に島津氏が当城に入り、石塚城の伊東氏を攻めたと伝えられる。

(13) 古城

石塚城の南西の、突出した丘陵の端部にある小規模な城館である。「内の丸」の地名が残る。

当地一帯は浮田荘に属しており、その支配を巡って築かれた城館の一つか。

(14) 蓬莱山城

大淀川右岸の市街地中にある独立小丘陵上に立地する。頂部の標高は34mで、主郭の周りに2段の帯曲輪が巡る。東麓の長久寺側には腰曲輪を配する。

永徳年間に、縣領主の土持宣弘が築城し、その末子染を置いたと伝えられる。

⑮ 山城

宮崎市街地南西縁の独立丘陵上にある。最高所（標高52m）に主郭があり、その西側に曲輪が続く。主郭の東側に続く尾根には堀切を設け、往来を遮断している。東側の頂部付近には明瞭な城郭構造は認められない。

伊東氏庶家の山ノ城氏の居城であった。

⑯ 本城

宮崎平野外縁の標高110mの丘陵地に築かれている。東側は古城谷、西側は古城川が谷を刻んでいる。

城域は大きくは2区に分かれる。便宜的に「北城」「南城」と呼び、記述する。

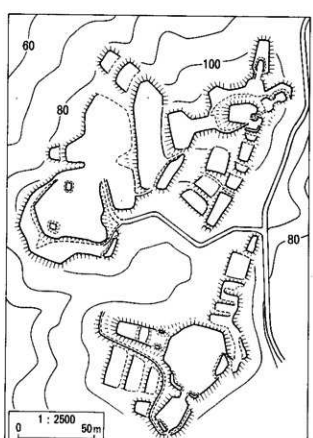
「北城」は、自然地形をそのまま利用しており、人為的施設は南側の丘陵先端部に空堀が1か所認められるのみである。屋敷地的な性格を有するものか。

対して「南城」は、虎口、土塁、腰曲輪などの防御施設が設けられ、城郭内の機能分担を見ることができる。

平成8年に発掘調査が実施され、主要な部分は現存しない。

文献

1）橋本英俊他　『東九州自動車道埋蔵文化財発掘調査概要報告書（西都～清武）』　1997　宮崎県埋蔵文化財センター




本城縄張り図（綿田一郎・橋本英俊原図作成　文献1所収図を基に製図）

⑰ 古城

山城同様、宮崎市街地南西縁の丘陵上に立地する。北側のみ、かつて今福寺があった丘陵が続き、そこに堀切を築いている。主郭と見られる曲輪と、その下段に取り付く帯曲輪が認められる。なお、今福寺付近も城郭であった可能性があるが、現在は宅地造成により消滅している。

⑱ 寺ノ下

低地に突出した低丘陵上にある。『宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書』Ⅰ（1984 宮崎市）では「城跡（出城）」とされている。

⑲ 圖城

西方向に突き出た丘陵（「烏帽子形」と呼ばれる）上にある。曲輪と見られる平坦地は現在山林となっている。沿革等は明らかではない。

⑳ 宮ノ城

前項圖城と相対する丘陵の端部に立地する。北と南は険しい崖となり、東側のみ丘陵続きとなる。丘陵の基部を堀切で裁断している。最高所（標高56m）に主郭と見られる曲輪があり、急峻な切岸で守りを固める。

『日向記』にある、文安3（1446）年に伊東祐堯が攻略した「細江城」であろう。

㉑ 曾井城

古城［23－(17)］より東に続く丘陵の端部に立地する。病院建設により、大きく削平され、ほとんど旧状をとどめない。『城郭大系』によれば、南側に「本丸」、北側に一段低い「二の丸」があり、病院建設に先立つ発掘調査により、柱穴、土坑等が検出された。土坑は径2m、深さは10mもあるもので、曲輪の端部に一列に並んでいたという。

伊東氏支族の曾井氏が築いたとされる。曾井氏は伊東氏惣領家に背いて島津氏に応じたため、文安元（1444）年、伊東祐堯は当城を攻め、攻略。以後、伊東氏の領有するところとなる。伊東氏48塁の一つで、城主は八代民部左衛門と伝えられる。伊東氏没落後は島津氏の家臣、比志島式部大輔義知が入り、豊臣氏の九州平定以降は飫肥藩領となる。

㉒ 今江城（仮称）

宮崎市南部の、西方の清武町側からのびる丘陵端部に位置する。当該丘陵では、宮崎学園都市の開発事業が計画され、工事開始前の樹木伐採中に城郭の存在が確認された。その後発掘調査が実施され、現在は消滅。文献にはあらわれない。

3つの曲輪とその周囲に巡らされた空堀より成り、最も標高の高い、主郭と目される曲輪には北側と南側に土塁が築かれている。その東側の曲輪には土塁は現存しないが、北側直下に2条の土塁が巡る。ここでは発掘調査により2面庇付きの掘立柱建物が検出された。

文献

1）谷口武範 「今江城（仮称）跡の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』4 1988 宮崎県教育委員会

㉓ 車坂城

今江城同様、宮崎学園都市開発に伴い発掘調査が実施された。丘陵の南縁部に位置し、南側は加江田川が形成した低地に面する。

かつては大きくは6つの曲輪から成っており、各曲輪の周囲には大きな空堀が巡らされていた。『日向地誌』には「本城」「西の城」「北の城」「幸乗屋敷」などの曲輪名が記されている。

ほとんどが土取りによる破壊を受け、壊滅状態にあるとされていたが、発掘調査の結果、「西の城」と推定される城郭跡が確認された。

中心の曲輪とその北西側下段を巡る帯曲輪、および南西尾根上の小曲輪群から成る。土塁や埋没した状態の空堀も検出された。

当城では、応永年間頃に伊東氏と島津氏による争奪戦が繰り広げられた。

文献

1）永友良典・菅付和樹「車坂城西ノ城跡の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』4　1988　宮崎県教育委員会

### ㉔　紫波州崎城

日向灘に突き出た丘陵の端部（「城山」と呼ばれる）に立地する。200m四方の範囲内に遺構が認められる。

紫波州崎城縄張り図（九鬼　勉原図作成）

最高所（標高65m）に主郭と見られる弧状の曲輪がある。その中央部は仏舎利塔建設により若干削平されている。北端部は見張り台的な空間であったと推測される。崩落し、ほとんど旧状をとどめないが、西端部の切岸には石垣が築かれている。その南西側の曲輪との間は空堀で区切られる。

城域の北西～西には突浪（筑波）川が流れており、『日向地誌』によれば、かつてこの川は河口から約300mのところまで船が入ったという。

海陸交通の要地であった当城を巡って、古来伊東氏と島津氏が争奪戦を繰り返した。永禄年間には伊東氏の支配下となり、伊東氏48塁の一つに数えられる。家臣の川崎上総守が城主であった。天正5（1577）年以降は島津氏の所領となり、宮崎城主上江覚兼の父、上江薫兼が在城した。近世には飫肥藩領となる。

文献

1）若山浩章　「『上江覚兼日記』に見る紫波州崎城と周辺地域　－特に城と周辺の港・浦との関係を中心に－」『社会科の研究』34　1995　宮崎県高等学校教育研修会社会科研究会

### (26) 内海峠城

内海に向かう古道の峠の西方にある。標高175m山頂とその付近に平坦地がある。

応永30（1423）年に伊東祐立が築いたと伝えられる。車坂城と一体となって南方に対する防御線を成した。文明年間頃まで、島津氏との攻防が繰り返された。

## 24 宮崎郡清武町

### (1) 清武城

清武川左岸の丘陵地上に立地する。北～東側にかけては谷が入り、西～南側斜面は急崖を成す。主郭のある最高所の標高は86m、低地との比高差は約30m、城域は南北380m、東西320mを測る。現在、城域南端近くを宮崎自動車道が貫通している。

「本丸」と呼ばれる主郭の西～南側には数mの段差の曲輪群が展開する。主郭の南側に虎口が認められる。さらに、小さな谷をはさんで南側に「二の丸」と呼ばれている曲輪がある。ここは自動車道建設により大きく破壊を受けているが、建設に先がけて行われた発掘調査によってある程度旧状をうかがい知ることができる。また掲載図の範囲外となっているが、主郭の北東にのびる尾根上（大照寺池の南側）にも小さな削平地があり、「台丸」と呼ばれている。

さらに、周辺の丘陵上にはいくつかの外郭の城館、寺院群があり、当城はそれらの集合体として機能を発揮していたものと見られる。これは、西都市都於郡城などと共通する特徴と言えよう。

古くは伊東氏と関係の深い清武氏が築城したと言われ、文明17（1485）年には伊東祐国と祐邑の飫肥城攻めの後詰めとして伊東祐堯が入り、当城で死去している。伊東氏の拠点の城郭の一つで、いわゆる伊東氏48塁の一つ。永禄年間には長倉伴九郎、上別府宮内少輔が清武地頭として当城に在城していた。伊東氏没落後は伊集院久宣が入り、近世には飫肥藩領となった。関ヶ原合戦中に当城主であった稲津掃部助が宮崎城などを攻め、結局裁きにより当城で誅されている（「稲津騒動」）。

発掘調査では、掘立柱建物や通路に伴う石積み列、溝状遺構が検出され、土師器杯類、輸入陶磁器等の遺物が出土している。

### (2) 中山寺跡

前項清武城北隣の、谷を隔てて相対する位置にある。『日向地誌』にも、「要害ノ地ナレバー寺ヲ建テ本城ノ支城ノ如くセシモノト見ユ」とあり、外郭を構成する、いわゆる出城の一つ（あるいは曲輪の一つ）であろう。

### (3) 登能尾山

これも、清武城の出城の一つで、前項中山寺跡の北西隣の丘陵上にあたる。現在それらの間には切り通しがあるが、旧状は分からない。平坦地に伊東祐堯の墓が建つ。

「日向地誌」によれば、それらの他にも「古城」「古陣」「文永寺跡」「蓮特寺跡」「玄松院跡」「観音寺跡」といった外郭を構成する寺院跡が記されている。

清武城縄張り図（八巻孝夫原図作成）

(4) ぎにょもん屋敷

南北朝期、細川小四郎義門の政庁跡があったところと伝えられるが、現在、遺構は残らない。

(5) 古陣

清武城から南東へ続く丘陵上にあったと考えられ、「古陣」「古陳池」の地名も残る。遺構は不明瞭。『日向地誌』にも記載があり、それによれば、清武城築城以前の城郭であったらしい。

(6) 古城

これも『日向地誌』に記載がある。清武城の南東隣の丘陵がそれであると見られるが、道路や配水池建設などにより破壊を受け、旧状は明らかでない。

(7) 城山

南東方向に張り出した台地の端部にあたる。「城山」の伝承が残るが、遺構は不明瞭。

(8) 井手ケ城

清武川右岸の低位段丘上にある。城館関連の地名が残るが、市街地化が進み、旧状は不明となっている。

## 25 宮崎郡田野町

### (1) 梅谷城

河岸の低位段丘端部にあったとされるが、遺構は明瞭でない。南北朝期に築かれたと伝えられるが、詳細は不明。

### (2) 上屋敷・下屋敷ほか

低位段丘上に「屋敷」「陣」などの地名が残るが、遺構は認められない。ただし付近の畑地には陶磁器類などの遺物が散布しており、地下に埋没している可能性が高い。

### (3) 田野城［仮屋城］

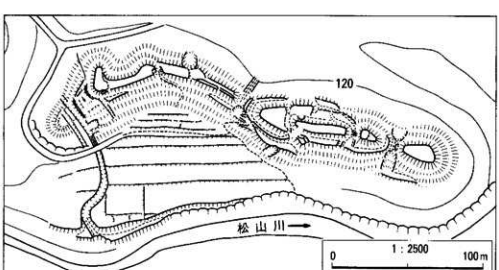
借屋原城とも言う。大淀川水系の松山川河岸の丘陵上に立地する。最高所の標高は138m。城域は南北約150m、東西約350mを測る。

東西に2か所、標高のほぼ等しい頂部があり、その近くに堀切、竪堀を築いて防御を固めている。東側主郭とその東側の曲輪間の空堀には土橋が認められる。尾根上の曲輪は面積が広くないため、南側の段状の平坦地（旧水田）に屋敷が構えられていた可能性がある。

当地域は、文安年間には伊東祐堯の領有するところとなり、以降、伊東氏の勢力下にあった。当城は伊東氏48塁の一つに数えられ、永禄年間の城主は長倉河内守とその子の宮内太夫であった。伊東氏没落後は、島津氏家臣の大寺大炊助が田野地頭として入り、豊臣氏の九州平定後は飫肥藩領となった。慶長5（1600）年のいわゆる「稲津騒動」の際には、田野衆は伊東氏方として、島津氏の軍勢と倉永付近で合戦となった。

文献

1）田野町教育委員会　『田野町文化財調査報告書第20集　町内遺跡発掘調査』　1994




田野城縄張り図（千田嘉弘原図作成　文献1所収図を基に製図）

### (4) 上ノ原城

河岸の丘陵上に立地する。『城郭大系』によれば、いわゆる「稲津騒動」の際に、伊東氏方が後詰めのために築いたとされる。

(5) 前畑第2遺跡

発掘調査の結果、台地の突端部を区切る溝状遺構が検出された。出土遺物は少ないが、覆土中～上位に、文明年間に堆積した桜島起源のボラ土が見られ、文明年間には機能を停止していたことがうかがえる。

(6) 日高城

北東に突き出た形の台地の端部にあたる。付近に「麓」の地名が残る。遺構、沿革共に明瞭でない。

## 26 宮崎郡佐土原町

### (1) 佐土原城［鶴松城、田島之城］

北東方向にのびる丘陵の端部に築かれている。西～北東には西佐土原（もとの佐土原）の市街地がある。

大きくは馬蹄形を呈しており、中心は「本丸」「南ノ城」「松尾丸」という３つの曲輪が中心を成す。「本丸」は標高72mで、図中Ⅰ～Ⅲの曲輪が小さな段差をもって連続する。「南ノ城」はその南東側のⅤで、「松尾丸」は最南端のⅦである。「本丸」の西側は、唯一尾根続きとなる箇所であるが、自然の谷が険しいこともあってか、さほど十分な普請を行っていない。北東側には「宝塔山」があり、付近には寺院跡が点在している。防御線を形成するものであったと見られる。それら、山上の曲輪群に囲まれる形で、低地上に居館部がある。後述するように、近世にはこちらが藩政の中心となった。

登城口は「Ⅴ」字形に深く切り込まれ、その底を往来するようになっている。

なお、「本丸」のⅡの北端部では、発掘調査の結果、石垣造りの櫓台が確認され、『旧事集書』に記され、「天正年中佐土原絵図」に描かれた三階櫓の遺構と位置づけられている。

主たる３つの曲輪のうちⅠ、Ⅱ、Ⅴには、枡形虎口が認められる。Ⅰの虎口の北側には腰曲輪を配して防御を固めている。一方、「松尾丸」の虎口は直線的に入るものである。

このように、中世城郭が近世の居館へと移り変わる状況や、周辺寺院の配置や街道、町割りといった全容をうかがい知ることのできる、重要な城館跡と言える。

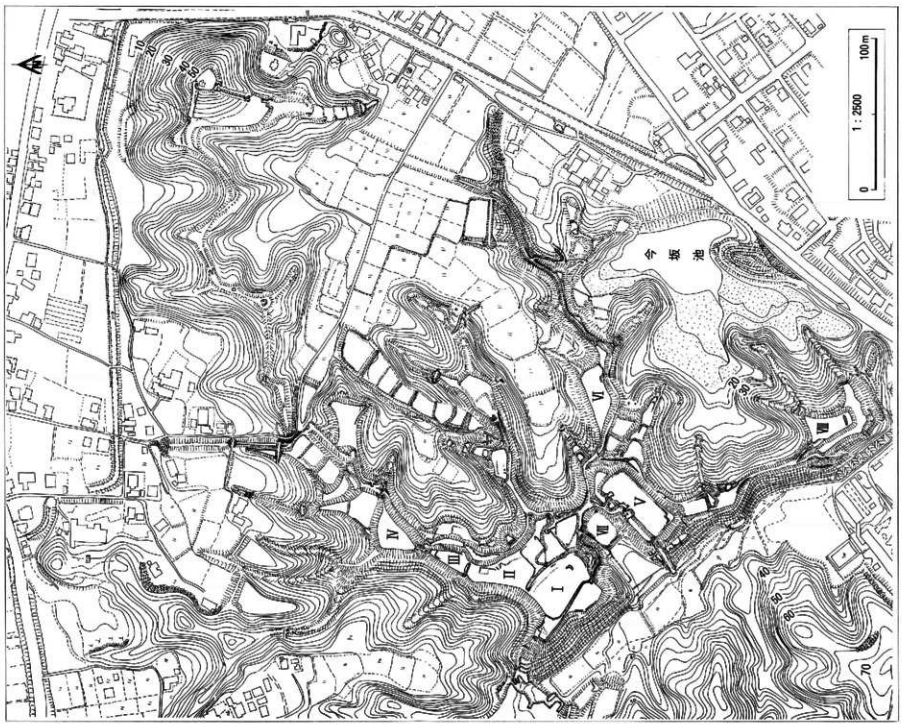
『旧事集書』によれば、伊東祐立が支族の田島氏を滅ぼし、祐堯の弟、祐賀が入城したのは応永34（1427）年頃のことで、以後、伊東氏の重要な拠点となった。永禄年間頃は伊東義祐の隠居所となり、その子の義益が都於郡城に在城していた。

天正５（1577）年、伊東義祐が佐土原城を捨て、豊後に逃れると、島津氏の勢力圏となり、島津義久の弟、島津家久が当城に入った。豊臣氏の九州平定後は、島津家久が領主となった。家久は天正15（1587）年に没し、その子の豊久は関ヶ原の合戦で戦死したため、一時佐土原は徳川氏領となるが、慶長８（1603）年、島津以久が３万石で封ぜられ、佐土原島津藩が成立した。寛永２（1625）年に居城を山下に移している。はじめ佐土原藩は鹿児島藩の支藩の扱いであったが、元禄12（1699）年に城主列に加わった。

明治２（1869）年に佐土原藩最後の藩主、島津忠寛が知政所を広瀬に移したため、翌年、佐土原城は廃され、以後町政の中心も広瀬に移った。このため、佐土原城周辺は急激な市街地化をのがれ、比較的良好な状態で現在に引き継がれている。

文献

１）木村明史ほか　『佐土原町文化財報告書第６集　佐土原城址概要報告書Ⅰ』
２）五味克夫　「佐土原城櫓跡をめぐって」『南九州の城郭』３　1996　南九州城郭談話会
３）木村明史　「南九州城郭研究の視点　－佐土原城本丸部三階櫓跡確認調査を経て－」（同上）




佐土原城縄張り図（八巻孝夫原図作成　文献１所収）

佐土原城全景（佐土原町教育委員会提供）

(2) 福城寺

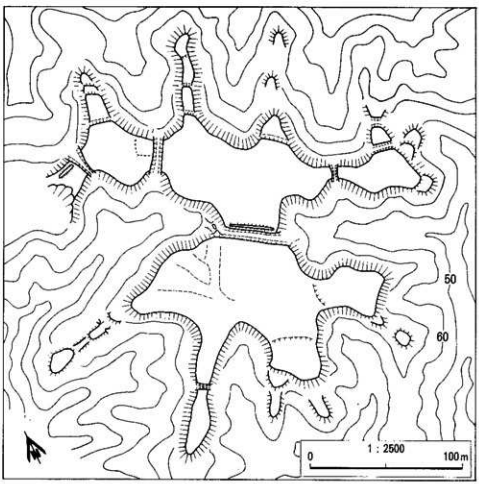
城館関連と見られる字名が残るが、遺構は不明瞭。

(3) 内城

佐土原城の南約1kmの地点に位置する。比較的平坦な台地（標高85m前後）を規模の大きな空堀で区切り、主たる3つの曲輪を形成する。現在は耕作により破壊され確認できないが、南側にある東西方向の空堀の北岸には土塁状の高まりがあったという。北・西側にのびる尾根については堀切や段状の平坦地を築いて往来を遮断する。南側にはさほど徹底した防御施設は認められないが、図の範囲よりも南側にも城域が広がる可能性もあり、注意を要する。

なお、一部で道路建設に先立つ発掘調査が実施された。

当城に関しては、「内城」の通称地名が地元に伝わるが、文献にはあらわれない。




内城縄張り図（吉本正典・福田泰典原図作成）

(4) 南学原城

台地上にあり、南北方向には谷が入る。現在は畑地となっており、遺構は不明瞭であるが、『日向地誌』によれば台地との間に空堀を築いて防御していたとのことである。

(5) 内田城（仮称）

井上集落東方の丘陵上に曲輪や空堀などの城郭構造が認められる。付近に「堀ノ内」と「城下谷」という地名もある。

文献にはあらわれない。

(6) 平城

『史蹟調査』に記されている。顕在遺構は残らない。田島氏関連の居館跡か。

(7) 古城

『日向地誌』等に、田中集落の南東の丘陵端部にあったと記され、「古城」の字名も残るが、遺構は明瞭でない。

当地は宇佐宮領荘園の田島荘に属しており、工藤祐経の孫の伊東祐明が同荘に下向し、田島氏を称している。当城は田島氏に関連するものとされる。

(8) 新城

西佐土原市街地の東部に「新城」の地名が残るが、詳細は不明。

(9) 広瀬城

石崎川右岸の低地上にある。現在の広瀬小学校付近。明治２（1869）年より「築城」し、佐土原県の知政所として整備を進めたが、、明治４年に未完成のまま廃されている。

(10) 西ノ城

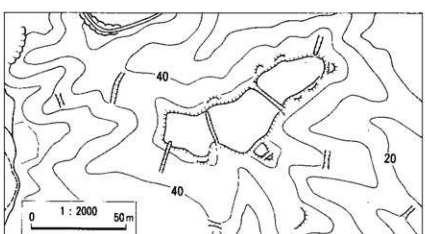
次項諏訪城の北西の丘陵地にある。「西ノ城」の字名が残る。『日向地誌』によれば、「金丸城」とも呼ばれ、金丸勘四郎が居城していたという。

(11) 諏訪城

県総合農業試験場西側の、独立丘陵上に立地する。ほぼ中央の標高58ｍ付近には主郭があり、その北・南・西側にのびる尾根には堀切を設けている。

伊東氏48塁の一つの那珂城か。城主は郡司弥六左衛門尉・湯地出雲守・宇都宮左馬助であった。

『日向地誌』に記載のある端ノ城［２６－（12)］、中ノ城［２６－（13)］は、当城の出城あるいは曲輪の一つと捉えられるものであろう。




諏訪城縄張り図（木村明史原図作成）

⑭ **嶺ケ城** ※追加

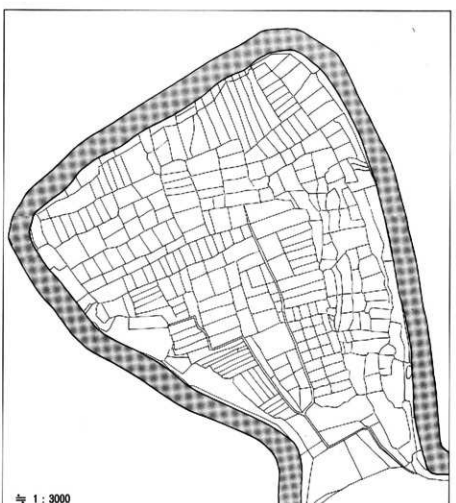
『日向地誌』に記されているが所在は不明。

⑮ **囲** ※追加

周囲を石崎川の川跡に囲まれた約６ha程の低地である。施設建設の影響もあり、明瞭な遺構は認められないが、字名から、河川を堀として利用した防御的な館跡と推測される。

⑯ **迫田** ※追加

一ツ瀬川の支流である三財川右岸の丘陵端部に立地する。尾根上に数か所の堀切が認められる。東九州自動車道建設に伴う発掘調査が実施された。報告書に詳細な測量図が掲載される予定。




**囲地籍図**

## 27 東諸県郡高岡町

### (1) 城ケ峰遺跡

城館関連と見られる字名が残るが、特に遺構は確認されていない。

### (2) 穆佐城

大淀川右岸の標高60m前後の丘陵上に立地する。丘陵は東西にのび、北側は大淀川に面して倉岡城方面を望む。城域は南北約280m、東西約550m、面積にして約12haに達する大規模な城館跡である。

城域は幅20m前後の大きな空堀によって4つに区画される。東端と西端の曲輪群は、小規模な曲輪と空堀を巧みに配置させる。それらにはさまれた南側の2つの曲輪群は、高低差1m程の段を削出して曲輪を構える。特に東側の曲輪群は主郭を中心とする部分と考えられ、防御性は他の曲輪群と比べると卓越している。

このように、個々の曲輪から構成される4つの曲輪群を、各々大きく1つの曲輪と見なした場合、それらを区画する大規模な空堀と合わせて「台地立地型」の城館跡の特徴が読みとれる。それぞれの曲輪群の構造の違いは機能差に起因するものであろう。

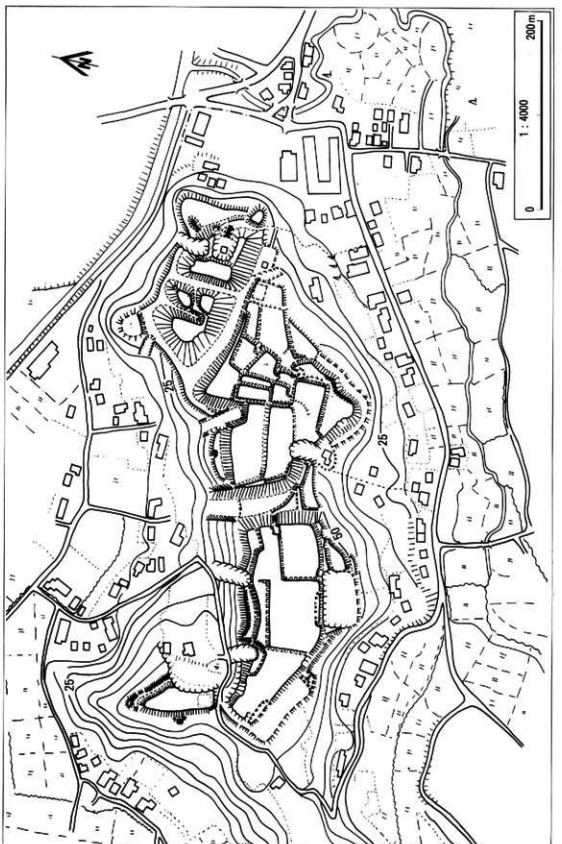
当地は島津荘穆佐院に属していた。当城の初見は建武3（1335）年のことで、当時は足利氏の所領であった。南北朝期は畠山氏の拠点になるなど、争乱の中心であった。その後は伊東氏と島津氏の争いが続く。応永10（1403）年には島津久豊が入り、その後、島津忠国の居城となる。文安2（1445）年から約130年間は伊東氏の支配下となる。伊東氏48墨の一つに数えられ、永禄年間の城主は落合兵部少輔であった。天正5（1577）年の伊東氏没落後は、再度島津氏の有となった。近世には穆佐は、薩摩藩の外城（郷）の一つとなり、城郭としての役目を終え、麓に支配の拠点が移った。

近年、城域内で部分的に発掘調査が実施されている。柱穴、竪坑や溝状遺構等が検出され、各種遺物が出土している。土師器、陶磁器などの年代は、14世紀～16世紀末に比定されており、前述した当城の歴史と合致する結果となっている。細かな遺構の変遷の究明が今後の課題となろう。

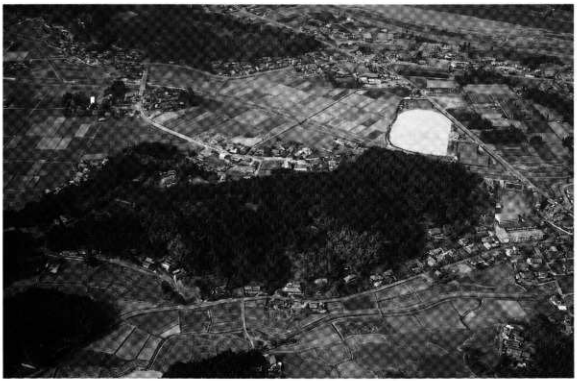
文献

1）千田嘉博　「特稿　穆佐城址について」『高岡町遺跡詳細分布調査報告書　高岡町埋蔵文化財報告書第2集』　1992　高岡町教育委員会

2）島田正浩　「中世城館「穆佐城」について」『宮崎県史研究』8　1994　宮崎県




穆佐城縄張り図（千田嘉博原図作成　文献１所収）



穆佐城全景（高岡町教育委員会提供）

(3) 楠見城

大淀川右岸の台地上にある。中心部は鶏舎建設による破壊を受けている。かろうじて南東側に曲輪が残っており、曲輪を区切る空堀、切岸上に築かれた土塁が残る。

『日向地誌』によれば、嘉慶・永享年間頃、税所肥前守の居城であったという。

(4) 飯田城

国富町大字嵐田との境をなす山地に築かれている。最高所（標高121m）に主郭と見られる曲輪がある。その下位の曲輪群の北側には大きな堀切が入る。また東側には虎口が認められる。

『日向地誌』によれば、永享4（1432）年、伊東氏が島津氏との河骨（高岡町大字飯田）の合戦で勝利し、当城を手中におさめ、落合七郎左衛門を配したとされる。伊東氏48塁の一つで、永禄年間の城主は川崎治部大輔であった。伊東氏没落後も、当城主は守りを固めて島津氏に抵抗したという。

(5) 天ケ城［高岡城、鷺城］

高岡町市街地の北東にある丘陵上に築かれている。公園建設などで破壊が進行しているが、「本丸」「二の丸」「北の城」「犬ヶ城」など、大きくは6面の曲輪があったという。

当地一帯はもとは久津良と称され、また当城は内山城と称されていた。伊東氏48塁の一つとされる。近世薩摩藩の関外（去川の関の外）4か郷の本城として、東目防御の重要な役割を担った。麓には三国の武士730余戸を集住させた。

(6) 椅城［囲城］

南東方向にのびる丘陵上に立地する。北西には南城寺の集落がある。幅の狭い尾根上にほぼ直線的に曲輪が築かれる。端部近くの最高所に主郭と見られる曲輪がある。

伊東新左衛門の居城で、後には福永丹波守の米蔵があり、川崎某が在城したと言う。

(7) 池ノ尾城

前項椎城の南東約0.7kmの台地端部にあたる。周囲は断崖を成す。現状では遺構は不明瞭となっているが、『日向地誌』によれば、城内は2区に分かれていたという。

伊東氏の勢力下にあった城である。

(8) 尾谷城

(9) 福ケ城

(10) 上城

(11) 下ノ木場城

(12) 河上城

尾谷城は、天ケ城の南西にある、東西方向にのびる尾根上に立地する城郭で、別名水なしの城とも言う。(9)の福ケ城以下は、実態としては尾谷城の曲輪名であると見られる。

現状では大きくは8面程の曲輪があり、南北方向に走る空堀も3か所認められる。

伊東氏家臣の野村新介(一説には伊東新介とも言う)の居城であった。

(13) 平賀城

『日向地誌』や『高岡名勝志』に挙がっており、前項尾谷城のすぐ近くの、大淀川岸の小丘陵がそれにあたると言われる。ただし、遺構は明瞭でない。『日向地誌』によれば、嘉慶元(1387)年、伊東祐能の居城となり、永享5(1433)年に落城したとある。

(14) 向屋敷

南東方向に突き出た丘陵上に「屋敷」地名が残る。平坦地が1面あり、それを区切る空堀状の凹部も見られる。

(15) 今城

石ノ城とも言う。大淀川水系の浦之名川右岸の丘陵上に立地する。2本の堀切で丘陵を截断しており、その西側に主郭と見られる曲輪がある。堀切の端部は斜面を下り、竪堀状となる。

伊東氏家臣の福永丹波守の居城であったとされる。

(16) 長崎城

大淀川が蛇行する地点の、川に向かって突き出た丘陵上に立地する。北に面する土塁が認められる。

『日向地誌』では、次項柚ノ木崎城と関連のある城郭と推定している。

(17) 柚ノ木崎城

長崎城と同じく、大淀川右岸の丘陵上にある。直線距離で約1.5km上流へ遡った地点にあたる。丘陵中腹に、周囲に土塁を巡らす逆三角形状の主郭があり、そこから北へ曲輪群が続く。また主郭の南には堀切を入れ、防御を固めている。

伊東氏家臣の柚木崎丹後守の居城であった。

(18) 星崎

低丘陵上に「上堀」などの地名が残る。遺構は明瞭でないが、「穆佐院内星崎村」は、『志布志大慈寺文書』にも見える古い集落である(『宮崎県史』通史編中世　宮崎県)。

## 28 東諸県郡国富町

### (1) 常喜寺堀・水戸堀

### (2) 西堀

六野原と呼ばれる洪積台地端部に城館関連と見られる字名が残るが、耕地整理も進み、遺構は不明瞭となっている。

### (3) 伊佐生城

六野原台地の端部に立地する。三名川沿いの低地を望む位置にある。現在、遺構は明瞭でないが、『日向地誌』によれば、城内は4区に分かれていたという。また天正年間以前の伊東氏の支城と推測している。

### (4) 囲城

「堀内」の字名が残る。付近は標高90m前後の台地である。遺構は認められず、地積図でも堀等の痕跡は確認できなかった。

### (5) 八代城

川上原と呼ばれる台地の東南端部に立地する。三名川沿いの低地を望む位置にある。

『日向地誌』によれば、城内は4区に分かれ、「本丸」「二ノ丸」「取添」「中ノ城」といった名称が付されていた。現在主郭部分は明瞭であるが、それ以外は判然としない。

南北朝時代に築城されたと伝えられ、南朝方の伊東氏支族、伊東祐広の拠点であった。建武3（1336）年には、北朝方の土持宣栄が当城を攻めた。

後には伊東氏が領有するところとなり、伊東氏48塁の一つに数えられる。城主は伊東新三郎（のち新七、隠岐守）。

### (6) 猪野見城

南東にのびる台地の端部に築かれている。三方向に谷が入り、北西側のみ野首状に続いていく。標高138mの最高所に主郭に相当する広い曲輪があり、端部には空堀も見られる。

前項八代城と同様、伊東祐広が拠点とした城郭で、建武3（1336）年に土持宣栄が攻め込んだ際、祐広は当城に籠ったと伝えられる。

### (7) 礼ケ城

南方向に突き出た、平面逆三角形を呈する丘陵の端部にある。養鶏場や宅地建設により破壊を受け、旧状をとどめない。

### (8) 楠見城

猪野見城付近から南東にのびる台地の端部にあたる。楠見の集落は後川沿いの低地面にある。『国富町文化財調査資料第3集　国富町遺跡詳細分布調査報告書』（1983　国富町教育委員会）に位置の記載がある。

### (9) 東ノ城

周囲を開析谷（迫田）に囲まれた、台地上の小規模な城館跡と見られる。『日向地誌』に記載があるが、沿革等は触れられていない。次項諏訪城に関連するものか。

### (10) 諏訪城

東ノ城の北西約0.5kmの、低地に囲まれた小台地上に立地する。南に寺中の集落がある。これも『日向地誌』に記載があるが、沿革等は不明。

### (11) 鶴ケ城

『国富町遺跡詳細分布調査報告書』（1983　国富町教育委員会）に位置の記載がある。

⑿ 谷口城［寺尾城］

「寺尾城」とも称する。南東方向にのびる丘陵上にある。『日向地誌』に記載がある。

⒀ 東長寺城

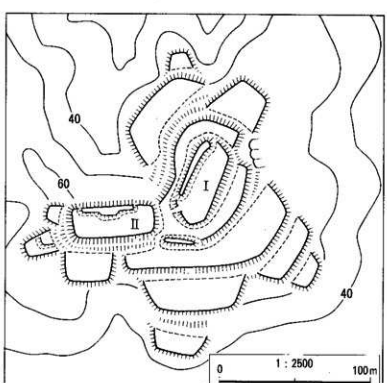
都於郡往還の東方の台地突端部にあり、北西側のみ台地に続く。曲輪と空堀が認められる。『日向地誌』『日向纂記』等に記載があり、慶長年間まで機能していたことが分かる。

⒁ 木脇城

低地に突き出た丘陵上に立地する。西に深年川、東～南にその支流が流れ、北は深い谷が入る。

空堀で区画された東西２つの曲輪が中心となり、その周囲に腰曲輪が巡っている。構造から見て東側の曲輪（Ⅰ）が主郭となるのであろう。Ⅰの西側には土塁が築かれており、北に向かって高くなっている。またⅡの曲輪も北と東側に土塁があり、北側の土塁の中央部も台形状に広がっている。それらは櫓台的な機能を有するものと推測される。また、空堀の南端部に土塁を築き、虎口状にするなどの工夫も見られる。

伊東氏48塁の一つで伊東氏家臣の福永民部四郎が城主であった。伊東氏没落後は島津氏の有となり、近世には高鍋藩領となり、城郭としての役目を終える。




木脇城縄張り図（崎田一郎・橋本英俊原図作成）

⒂ 北村・城ノ下

国富町市街地のある台地の東端部にあたる。さらに東には本庄川の形成した低地が広がる。城館関連の地名が残るが、遺構は不明瞭。

⑯ 仮屋原城

北より続く丘陵の端部に位置する。標高は57m。『日向地誌』に記載がある。

⑰ 総陣

市街地の中に義門寺という寺院があり、ここに天正15（1587）年の豊臣氏による九州平定の際に羽柴秀長が対島津氏のための本営を置いたとされる。

⑱ 鎌田城

伊東氏48塁の一つの「本庄城」か。現在本庄中学校地となり、破壊が進む。『日向地誌』によれば、北の台地との間を切り離す空堀があったようである。

⑲ 精米城

野添集落の南西方、標高84mの山頂付近にあったとの伝承が地元に残る。詳細は不明。

⑳ さじが城

高岡町との町境の峠（「境野峠」）付近にあったという伝承が残るが、詳細は不明。

㉑ 田尻城

高岡町との町境の山丘より北へのびる丘陵上にある。『国富町遺跡詳細分布調査報告書』（1983）に位置の記載がある。

㉒ 向高城

前項田尻城の西約0.7kmの、山頂付近（標高121m）にあったとされる。

㉓ 守永城

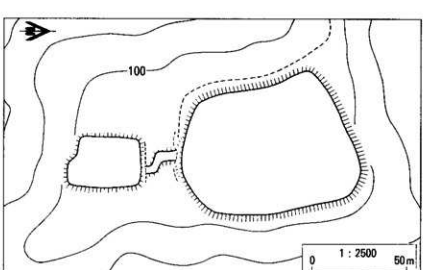
標高50m前後の台地端部にあったと伝えられるが、現在は工場となっている。伊東氏48塁の一つで、城主は内田四郎左衛門。

㉔ 平城

現在、「平城」という字名と、城館跡の伝承が残るのは、森永の集落よりも一段高い台地上である。こちらを「森永城」とする見解もある。

㉔ 市之尾城

標高112mの山丘上にある。大小2面の曲輪があり、その間の空堀に土橋状の通路がある。主郭と見られる平坦地には妙見神社の小祠がある。




市之尾城縄張り図（嶋田一郎原図作成）

## 29 東諸県郡綾町

### (1) 綾城［龍尾城］

錦原と通称される台地の東縁部に位置する。南には深い谷が入る。台地の続く西側に空堀を設け、守りを固めている。主要部分は公園建設により旧状をとどめないが、この空堀のみは現在もその様子を観察できる。

『日向地誌』によれば、城内は中央、西、東の3郭に分かれていたという。

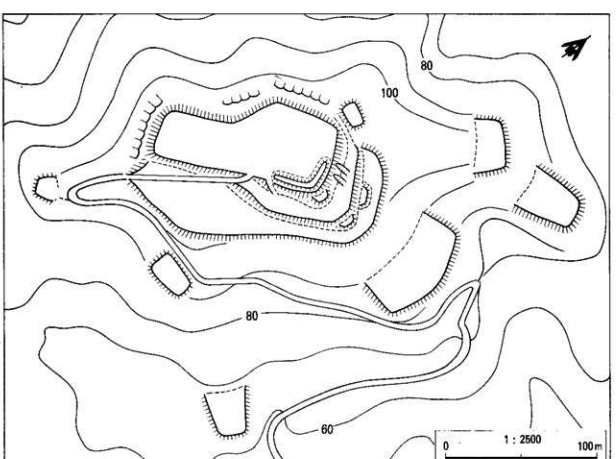
永正元（1504）年には長倉若狭守が在城していたが、やがて伊東伊祐の不興を買い、当城に立籠り、結局自害している。伊東氏48塁の一つで、永禄年間の城主は佐土原遠江守であった。伊東氏没落後は島津氏家臣の新納久時が地頭として入り、近世を通じて、鹿児島藩の外城（郷）となる。

### (2) 上中尾

奥深い九州山地の山中に伝承地がある。伊東氏家臣であった肥田木氏が、木崎原の合戦後に当地に入り、肥後勢力の侵入を防いだとされるところである。

### (3) 垂水城

大淀川水系、綾南川左岸の丘陵頂部近くに立地する。標高118mの最高所に主郭と見られる曲輪があり、北～西側に2段の曲輪が取り巻いている。




垂水城縄張り図（崎田一郎・橋本英俊原図作成）

『日向地誌』には「古城」とあり、沿革が記されている。

垂水氏の居城で、垂水但馬守は綾城の長倉氏と共に、綾城に立籠もり、自害している。

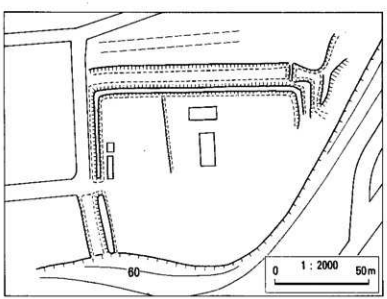
(4) 肥田木城

上畑集落北方の、綾南川河岸の低位段丘上に立地する。現在は畑地となり、明瞭な遺構は残らないが、南と西側に堀を巡らしていたという。

肥田木正連の居城とされる。肥田木氏は、島津氏より山道抑えを命ぜられ、三子を鷲巣、竹野、綾野に配した。

(5) 内屋敷城

錦原と通称される標高60m前後の台地の南縁部に立地する。北～西側に幅約７m、深さ約３mの空堀と土塁が巡り、平面方形に近い全体形を築いている。東側から堀底へ入る虎口と見られる箇所が認められる。




内屋敷城縄張り図（北郷泰道原図作成）

(6) 陣之尾

「陣之尾」の地名が残る。現地は標高200～230mの台地である。特に明瞭な遺構は残っていない。

## 30 小林市

### (1) 野尻城

浜瀬川に向かって突き出た丘陵の端部に立地する。「野久首城」とも書く。丘陵の続く西方に空堀を設け、防御を固めている。

最高所に主郭があり、その西側にも曲輪が展開する。『日向地誌』によれば、それぞれ「本丸」「二の丸」と呼ばれていた。

伊東氏48塁の一つ。伊東氏家臣の米良筑後守が城主であった。

### (2) 内木場城

前項野尻城の南約1.5kmのところにある。やはり浜瀬川にむかってのびる台地（標高236m）の端部に築かれた城郭である。

### (3) 谷ノ木城

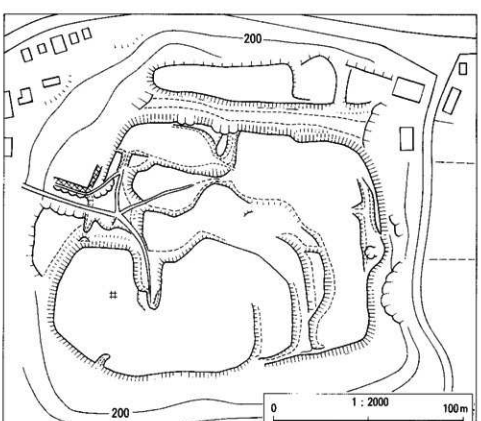
谷ノ木の集落近くに在ったとされるが、詳細は不明。

### (4) 岩牟礼城

野尻町との市町境の走る「城の岡」とよばれる山丘頂部（標高365m）付近に小さな平坦地がある。『日向地誌』では、いわゆる繋ぎの城とされている。

### (5) 小林城［三ツ山城］

小林市街地北東部の台地端部に立地する。城域は「城山」と呼ばれる。




小林城縄張り図（北郷泰道原図作成）

三方を曲流する小河川に囲まれており、南側にはかつて池があったという。城域は南北約170m、東西約200mを測る。

「三ツ山」「三之山」とも書く。北原氏が築城したとされ、永禄4（1561）年には伊東義祐が攻略し、米良筑後守を配した。永禄9年、島津義久が当城を攻めるが、失敗している。伊東氏48塁の一つで、『日向記』の「分国城主揃事」によれば、城主は平良彦十郎であった。木崎原の合戦以後も伊東氏の勢力下にあったが、天正4（1576）年に島津勢の高原城攻撃により、守将、伊東勘解由は城を明け渡している。

なお、『日向地誌』に挙げられている宇賀城［30－（6）］は、当城と同一のものとする説もある（『史蹟調査』など）。

**(8) 陣ノ尾**

地名が残るのみで、遺構は不明瞭。

**(9) 竜ケ峯塁**

標高302mの独立状丘陵にあたる。地元に城郭関連の伝承が残る。

**(10) 吉富城［亀固城］**

小林市街地南方の丘陵上に立地する。現在では「城山団地」となっており、破壊が進行している。近くに宝光院という寺院があった。

『史蹟調査』などに記載がある。北原氏の居城であったとされる。

なお、「三ッ山」は当地の地名として用いられた経緯があり、当城を小林城築城以前の「三ッ山城」とする見解もある。

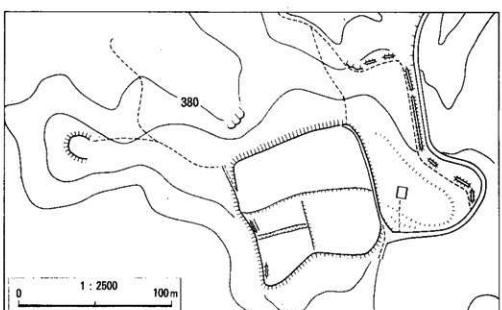
## 31 えびの市

### (1) 大河平城

えびの市北東部の、小林市と境を接する地にあり、名勝クルソン峡谷を通り熊本県人吉市方面へ通ずる古道を押さえる要衝にあたる。

主郭は、「山神祠」を祀る区画と見られ、東～北東側に土塁、切岸が残る。西側には3つの曲輪がある。また当城の100m程西方向には今城へ通ずる道路上に小高い丘があり、「見張り台」として使用された区画と考えられる。

当城は、菊池氏の末裔と言われる大河平氏が築いたと伝えられる。永禄年間に伊東氏がここを攻めた際もそれに耐えたが、あまり堅固とは言えないため、島津義弘は対岸に今城を築かせたという。

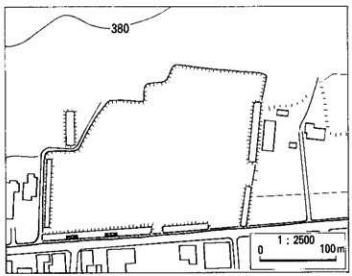



大河平城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

### (2) 大河平館

上大河平地区に所在する。川内川上流の、「七曲りの坂」を登りつめた台地上にあり、現在は大河平小学校地となっている。周囲を土堤で囲まれた間口（東西）約140m、奥行（南北）約100mの区画が残る。道路沿いには水路があり、堀の跡とも推測される。また現在の校門の位置は、往時の門の位置を踏襲するものと見られる。

この地に入った菊池氏の末裔の八代隆屋が築いた居館跡とされる。なお、西南の役で焼失した屋敷地の様子を、大河平隆芳が記憶をたどって絵師に描かせた「大河平屋敷絵図」がえびの市の有形文化財に指定されている。




大河平館略測図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

(3) 今城

大河平城の対岸の丘陵端部に立地する。北を除く三方向は急峻に阻まれる要害の地で、北側にも3か所の竪堀が設けられ、往来を遮断している。

前述の通り、島津義弘が命じて築いた城郭であるが、永禄7（1564）年に伊東氏の大軍が押し寄せ、落城した。

(4) 永野城

柿木原台地の西側に立地する。三方を深い谷に囲まれているが、北方向からは攻めやすい。現在、主体部は開墾されて畑地となっているが、おそらく北側に掘り切り等の施設を設けて防御していたものと思われる。現在、南方向にのびた尾根筋に堀切が2か所、竪堀が1か所認められる。

在地の土豪の永野氏の居城と伝えられる。「今城合戦」の際に城主の永野伸左衛門は、大河平氏の加勢として家臣と共に籠城したが、結局伊東氏に降り、今城攻めに加担したと言われる。

(5) 薩摩陣

熊本県人吉市と境を接する標高約1700mの高地にある。

「三国名勝図絵」に「薩摩塁」とあり、「原田村にあり、松齢公飯野に在し時、球磨相良氏侵冠の聞こえありて、塁を構へ、守兵を置るといふ、塁跡岡阜なり、俗に薩摩陣といふ」とある。

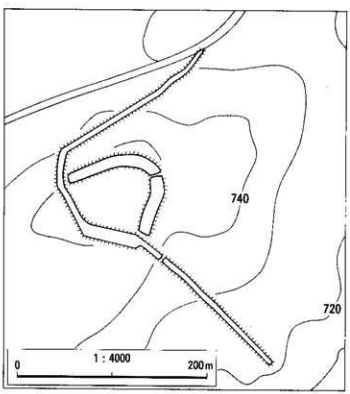
現在、付近には長さ1300mの土手があり、国営牧場を造る際に築かれたものとされるが、往時の土塁を利用したものかどうか、現段階では不明である。

(6) 球磨陣

標高754mの山丘頂部付近に土塁が遺存している。

「三国名勝図絵」には「球磨塁　大明司村にあり、相良氏の故塁なりといふ」と記されている。

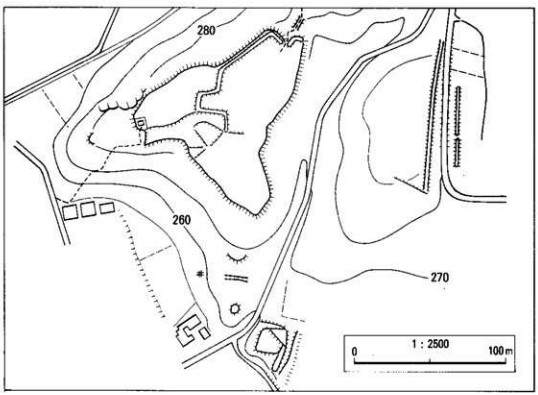
土塁は内径70～80mの平面楕円形を示し、中央の径20m程を残して周囲を掘削したものである。高さは約3～4m、上面幅約2～3m、下底幅約8.5～11mを測る。北東、南東、北西の3か所に出入り口を設けている。北西の出入り口より北東へ拓く20m、さらに南東の出入り口より南東へ約200mの土手がのびているが、これも土塁であるかどうか、定かでない。




球磨陣略測図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

(7) 金丸城

飯野城の東約500mの台地上にある。かつて飯野城の「三之丸」と呼ばれていた。北側の台地と土橋状の細い尾根で繋がっており、残る三方向は急崖となっている。「土橋」を渡ると虎口となっており、土塁で守られている。城域内に秋葉神社が祀られている。丘陵地の東側にも土塁跡が見られる。



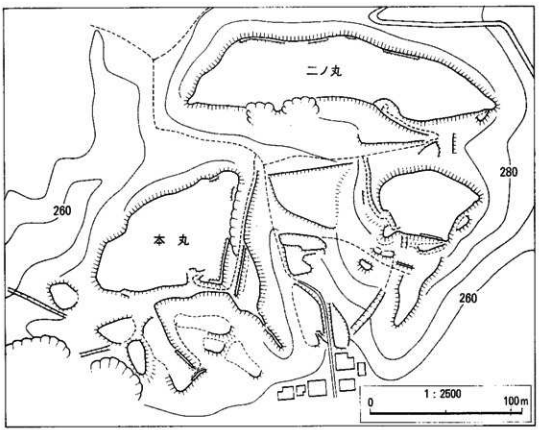

金丸城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

### (8) 飯野城

飯野の市街地の北方向に位置する。川内川右岸（北岸）の丘陵上にあり、周囲は急崖をなし、川内川が自然の外堀となる要害の地である。南北250m、東西300mの範囲に遺構が広がる。

城域内には「本丸」「二の丸」「三の丸」と呼ばれる主要な曲輪群や、「見張り台」「枡形」「射場」と呼ばれる郭があり、土塁や竪堀などの遺構も明瞭に残る。また長さ10m程であるが石塁も残存している。

古くは、永暦元（1160）年に、真幸院の収納使・日下部重貞が築城したが、後に北原氏に替わり、さらに永禄7（1564）年、島津義弘が入り、27年間在城した。伊東氏との木崎原合戦の際も、加久藤城救援のため、当城から出陣した。真幸院の支配のための重要な拠点であり、肥後への交通路を押さえる要衝にある。




飯野城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

### (9) 長徳庵

飯野城の西方、谷を一つ隔てた西之原地区にあり、飯野城より加久藤城へ通じる交通路上の要衝にあたる。付近に「衆中屋敷」も配されて、有事の際に飯野城の西方を防衛する拠点であったと考えられる。

「長徳庵跡」と伝えられる区画の三方に、長さ200m強の土塁、東側には約60mの堀、さらに南側には入り込んだ谷に3か所の切岸を設けて外敵の侵入を防いでいる。西側の土塁はさらに南方の断崖まで長さ約60mにわたってのびている。

この長徳庵は、飯野城本丸の下境より西方278間のところにあったが、元禄年間にはすでに空屋敷になっていたとある。

### (10) 田原陣

別名「桶平塁」とも言う。妙見原と称される台地の中にある丘陵上に立地する。近くには「陣の池」と呼ばれる池もある。

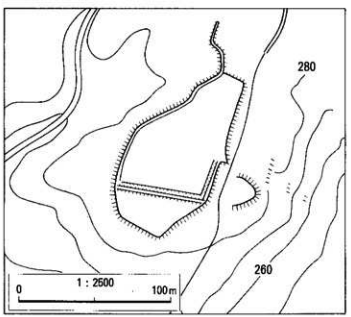
宮崎自動車道建設時に土砂を大量に運び出し、現在では北側の一部を残すのみとなっているが、残存部分の頂部にはなだらかな階段状のテラスを設け、南端部に幅約14m、現存長約10m、高さ約1mの方形の区画が築かれている。また北端部には「馬乗り場」と呼ばれる長さ約100mの土塁が築かれていたらしい。

永禄11（1568）年、島津義弘が父貴久、兄義久とともに大口の菱刈氏を攻めた際、伊東義祐がその隙に乗じて8月、桶平に塁を築き、飯野、加久藤を攻めようとしたが、義弘が直ちに飯野城に帰りこれに備えたので、結局果たせなかったという。

⑿ 宮之城

飯野城より加久藤城に通じる裏道上に位置する。南方向に突き出た台地上に構えている。

北を除く三方向は急崖に守られ、さらに土塁や空堀を築いて守りを固めている。詳細は不明であるが、飯野城と加久藤城の連絡路上の一拠点と考えられる。




宮之城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

⒀ 平城

現在の「文化の杜」の敷地内にあたる。かつては小さな丘陵地であった。

永禄年間、島津忠平（義久）の時代に、井尻神力坊をして当城を守らせたという。

⒁ 吉富陣

小河川の西側の急崖上に立地する。大河平地区から熊本県球磨地方へ通じる道路沿いにあたる。

曲輪らしき削平地は不明瞭であるが、傾斜の緩やかな方向を守る切岸や土塁の痕跡が認められる。

吉富氏の居城であったと伝えられるが、詳細は不明。

⒂ 掃部城

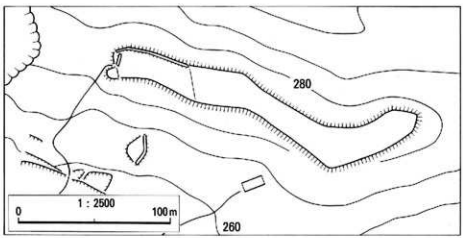
宮之城の西方の台地端部にある。同じく飯野城より加久藤城へ通じる裏道上に位置しする。現在芝栽培のため上部を破壊され、遺構は見当たらない。

「飯野古事記」には野城とある。木崎原合戦の際に島津義弘が根拠にした城郭の一つと見られる。

⒃ 小城

飯野城、掃部城と同じく、加久藤城へ通じる裏道上に位置する。台地の西端部に立地している。東西方向に細長い曲輪と北、西方向に面する土塁が明瞭に残る。ただし西側部分は土取りのために破壊されてしまった。

各古文書に「大明神の城」「大明司塁」として登場するのが当城と考えられ、相良、伊東、島津の各氏の間で争奪戦が繰り返された。

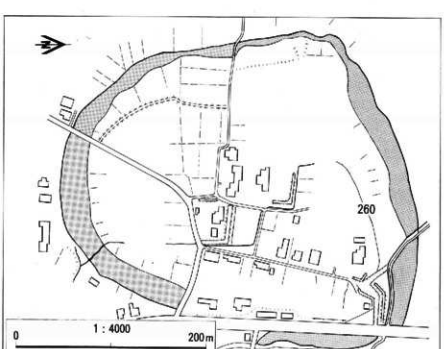



小城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

### ⑰ 田之上城

低位段丘の端部にある。『相良文書』に、文和元（1352）年、相良氏が真幸院に攻め入った際、畠山修理の代官らの立て籠もる「田之上城」を攻め落とし、吉田の「稲荷城」に入ったとある。

この「田之上城」の比定地近くで発掘調査が実施され、堀跡が検出された。数か所に土塁の痕跡が残っている。

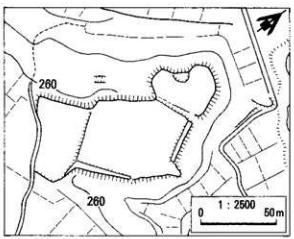



田之上城略測図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

⑱ 古城

田之上城と同じ低位段丘の端部の、台地の突出部分に立地する。東側は急崖が入り込む。南西側は台地が続く。

城域内は大きく3区分できる。中央の曲輪の東および南側に土塁が見られる。




古城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

⑲ 上江城

前項古城と同じく低位段丘端部の突出部に立地する。西側から北・東へと小河川が流れている。

北西端部に土塁が見られ、さらにその南東側にも台地縁部に沿って土塁がのびている。宅地建設、耕作の影響もあり、曲輪自体ははっきりしない。

⑳ 小城

加久藤城の南方の丘陵上にある。その位置から、加久藤城の出城と見られる。

遺構としては切岸、土塁などがわずかに残っている。

㉑ 新城

加久藤城の東隣に位置する。加久藤城の大手口の防御に関わる城郭と見られる。

『三国名勝図絵』には「松齢公、加久藤城を築かれし時、取添えの場所成り、加久藤城の南に当り、一洞を隔てる城山にて、要害の地なり」とある。

また『木脇家文書』には「忠平公御前様大明司村之内新城与申所江被成御座、中納言様新城ニ而御誕生放、（中略）右新城者御分国中御取添之時分、加久藤御城御取添被成候条、今加久藤之内ニ而御座候而、外城立候ハ無別儀候」などとある。

加久藤城は当初、本城部分にあたる久藤城のみで、後に「中城」と「新城」を取り込んで「加久藤城」と呼ばれるようになったらしい。

㉒ 浄慶城

加久藤城の鑰掛口の西約100mの丘陵上にある。やはり加久藤城の出城と見られる。一部は国道221号線により破壊されている。

わずかに切岸や石塁が残る。

木崎原合戦の際に、伊東軍は山伏・常陸坊浄慶の屋敷の石塁を城の外郭と見誤り、これを攻めたと伝えられる。

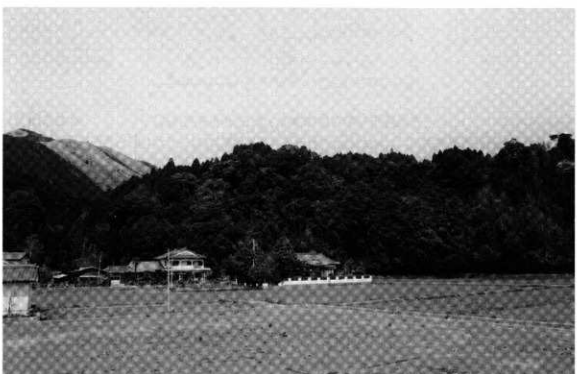
### 23 加久藤城

四方が全て断崖を成す要害の地にある。「中城」「新城」を含めた三区画が広義の加久藤城であることは先に触れた通りである。浄慶城まで含めた場合、城域は南北約400m、東西約650mに及ぶ。

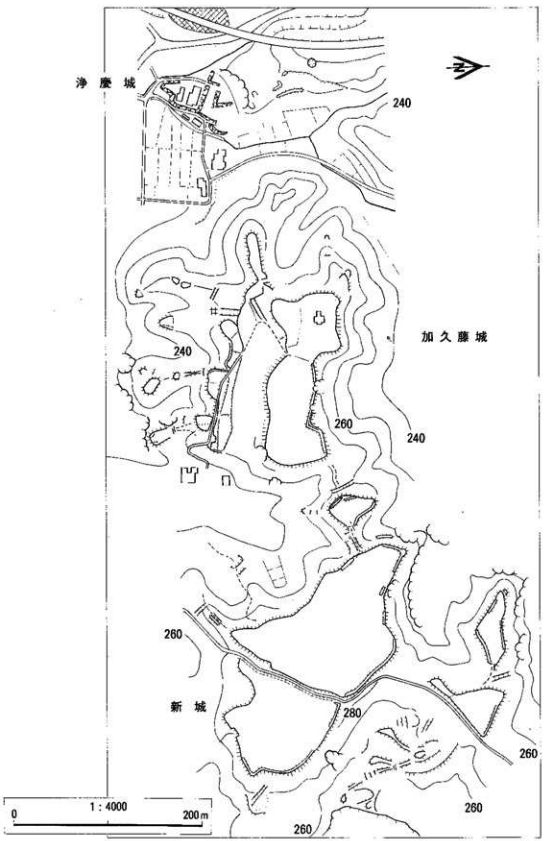
主たる曲輪は竈戸神社のある付近で、土塁、竪堀、土橋、桝形虎口などの遺構が良好に残る。その他の曲輪でも、虎口の形状が確認できる。標高は283m、比高差は約50mを測る。

もとは北原氏の勢力下にあったが、島津義弘がとってかわった際に大改修を行い、川上三河守忠智を城主として守らせ、広瀬夫人を住まわせ、自らは飯野城に入った。

木崎原の合戦の緒戦は、当城の鎗掛口が舞台となった。



加久藤城全景


浄慶城
240
加久藤城
240
260
240
260
新城
280
260
260
260
0
1:4000
200m

### ㉔ 園田城（仮称）

川内川右岸（北岸）の丘陵上に立地する。現在は学校の敷地となり消滅。事前に発掘調査が実施され、曲輪とそれを区切る空堀が検出された。

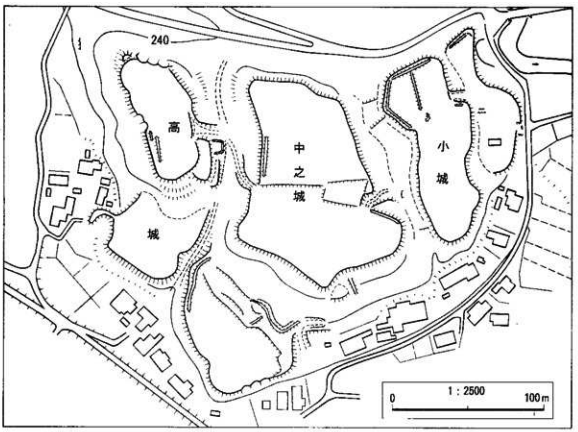
文献にはあらわれない。

### ㉕ 徳満城

加久藤郷と馬関田郷境の東川北地区の、川内川右岸に迫る台地上に立地している。最高所の標高は254m、低地との比高差は約30m、城域は南北約220m、東西約280mを測る。

「高城」「中之城」「小城」の3区画に分かれ、それぞれが規模の大きな空堀によって仕切られている。「高城」と「中之城」を分かつ空堀が主たる通路となって南北に抜け、その途中より「高城」「中之城」に通じる道があり、虎口が形成されている。「中之城」には馬乗り馬場や井戸跡と伝えられる場所がある。「小城」には土塁が明瞭に残る。

当城は北原氏が築いたもので、飯野城とともに中核的な城郭であったが、応永年間に島津義弘の勢力が加久藤城に入ってからは加久藤城の支城となった。




徳満城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

(26) 妙見遺跡

九州縦貫自動車道建設に先立つ発掘調査により、大溝で丘陵の先端部を区切った一郭が検出された。内部には掘立柱建物と竪穴住居が各1基認められた。時期は13世紀後半頃と考えられる。

文献

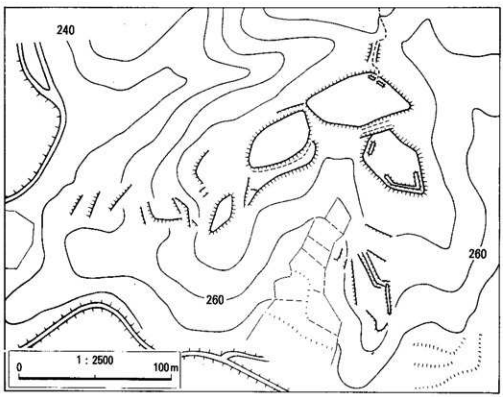
1）吉本正典編　「妙見遺跡」『九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』　1994　宮崎県教育委員会

(27) 新城

徳満城の北西の丘陵上にある。周囲は険阻な要害の地である。

城域内は大きく3区画に分かれ、それぞれの曲輪の間は空堀で仕切っている。北方の台地とは土橋によってつながっており、城域内に入るところに虎口が形成されている。

東福城（馬関田城）に居城した馬関田右衛門に関連する城郭と伝えられる。東福城を古城と称するので、それに対する「新城」かと思われる。




新城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

(28) 東福城

比高差約30mの丘陵上にあったが、土取りのため壊滅状態となっている。

詳細は不明であるが、『三国名勝図絵』によれば、「亀之城」「鶴ケ城」「多福城」という3つの区画より成っていたらしい。

真幸院の領主北原氏の支族、馬関田右衛門の居城と伝えられる。後に島津貴久、相良頼房に推された北原兼親により攻め落とされる。

### (29) 鳥越城

川内川とその支流の池島川にはさまれた低位段丘の南西縁部に立地する。木崎原合戦場の記念碑の南方約0.5kmのところにあたり、木崎原合戦の際に伊東軍が陣を布いたところ。

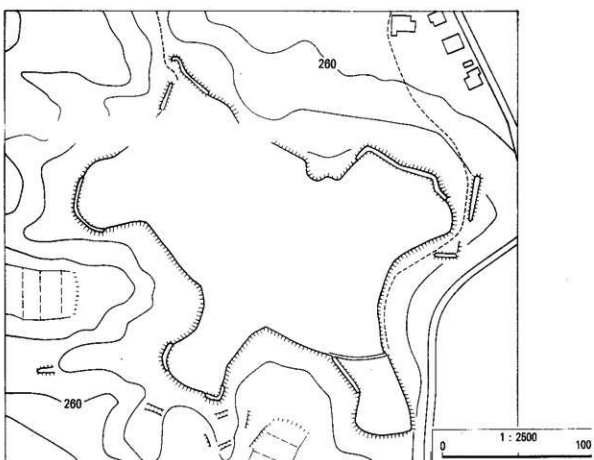
現在城域は宮崎自動車道により分断され、中央部分は完全に破壊された。曲輪の北側に土塁が残っている。

### (31) 柿ノ木城

加久藤盆地南縁の丘陵上に立地する。白鳥神社方面へ通じる重要な古道上にある。

南および西側は谷と水田が巡る。頂部と低地の比高差は約27mを測る。

曲輪は現在畑地となっているが、周辺に土塁が現存している。また北側の一角には虎口が認められる。




柿ノ木城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

### (32) 稲荷城

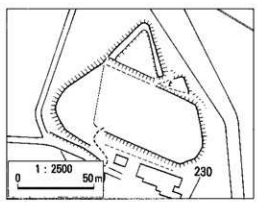
前項の柿ノ木城と同じく、栗下集落の南方の俗に「稲荷丘」と呼ばれる丘陵上に立地する。日向と薩摩を結ぶ古道と、前述の白鳥神社方面への古道との交差点にあたり、重要な位置を占めるが残念ながら宮崎自動車道建設により北側部分が破壊されてしまった。残存部分には土塁や空堀、腰曲輪等の遺構が認められる。

南北朝期には吉田地頭、坂兵部房覚英の一族の居城であったと伝えられる。

⑶3 溝園城

前項の稲荷城の西隣にあたる。あたかも、長江川をはさんで対峙するような位置関係になっている。狭小な平坦地に土塁が残るのみの、小規模な城館跡である。

応永年間に北原氏の守将が置かれたとされる。




溝園城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

⑶4 西矢倉城

灰塚と称される台地上にある。東側は急崖となる。城域内を宮崎自動車道が貫通している。

かつては伝承が残るのみと考えられていたが、曲輪や土塁が残っていることが確認された。

⑶5 東矢倉城

西矢倉城の東南側（宮崎自動車道の南側）の丘陵上に存在する可能性が大きい。

⑶6 小屋敷城

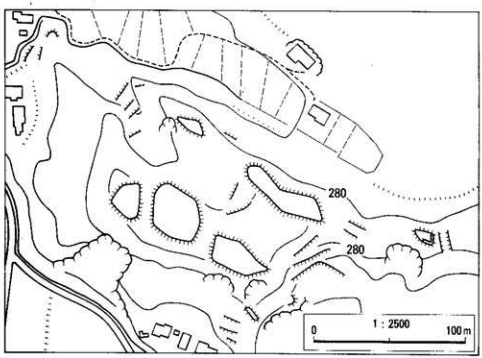
長江川に面する丘陵上にある。東側を除く三方は急峻で、その東側には堀切を設けて往来を遮断している。曲輪の北東部には土塁があり、東端部に虎口が形成されている。

小屋敷城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

### (37) 畑田城

前項の小屋敷城と同じく西方向に突き出た丘陵上に立地する。やはり尾根続きとなる東側に堀切を築いている。高さのほぼ等しい5つの曲輪が見られる。

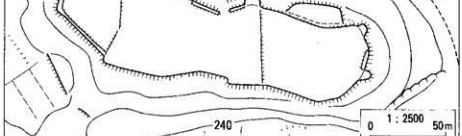
応永年間頃の真幸院の領主、北原民部少輔兼珍の三弟某の居城と伝えられる。




畑田城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

### (38) 見吉城

島内集落の南方、加久藤盆地南縁に位置する。南北約40m、東西約200mの細長い丘陵頂部に主たる曲輪を築いている。周囲は急崖を成す。西端部には土塁を巡らす。北辺中央付近に虎口がある。




見吉城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

(39) 池山城

当城も加久藤盆地南縁の台地端部に立地する。北東側すぐ近くに九州縦貫自動車道の「えびのＪＣＴ.」がある。

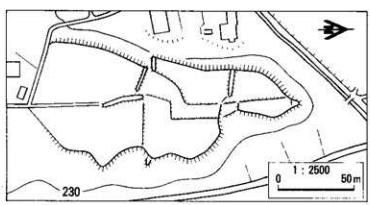
主たる曲輪は現在畑地となっており、通路として使用されたと見られる空堀や土塁等の遺構が残っている。

応永年間頃の真幸院の領主、北原民部少輔兼珍の次弟、佐伯能登守の居城と伝えられる。

(40) 古城

えびの市の南西部、鹿児島県吉松町と境を接する柳水流集落内にある。水田に向かって突き出た台地上に立地する。南側を除く三方は小河川や水田に囲まれる。

畑地の中に土塁の痕跡が残っている。




古城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

(41) 猿ケ城

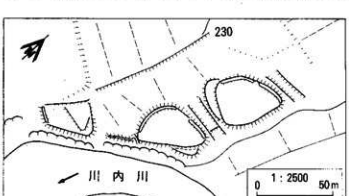
鹿児島県境に近い標高326mの山丘を中心に城郭構造が認められる。

(42) 赤花城

川内川の右岸（北岸）の段丘端部にある。低地との比高差は15m程である。鹿児島県境近くに位置する。

主たる３つの曲輪が残り、それぞれを空堀により区画している。

「吉松鎮亀城並宗廟遺書」によれば、足利尊氏が吉松に入った際、日当山を本陣とし、のろし台図の地として８か所定めたとされるが、その内の北東の地点であった。




赤花城縄張り図（市田寛幸・市田政瑠原図作成）

**(43) 松尾城**

加久藤盆地北西縁の丘陵端部に立地する。比高差は約20m。四面は断崖を成している。城域は大きくは4区画に分かれ、それぞれの独立性が高い。なお、南側部分は砂防工事により破壊を受けている。

中世は北原氏の所領で、後に島津義弘が入ってからは鎌田尾張守、同刑部左衛門父子が相次いで地頭となり、これを守ったという。

**(44) 丸之尾城**

前項の松尾城の北東にある。北西部は養鶏場となっており影響を被っているが、南側には堀切など遺構が残存している。

**(45) 杉尾城**

松尾城の西北に位置する。丸之尾城と同じく南北に細長い丘陵地に構えている。土塁や堀切が認められる。

## 32 西諸県郡高原町

### (1) 奥

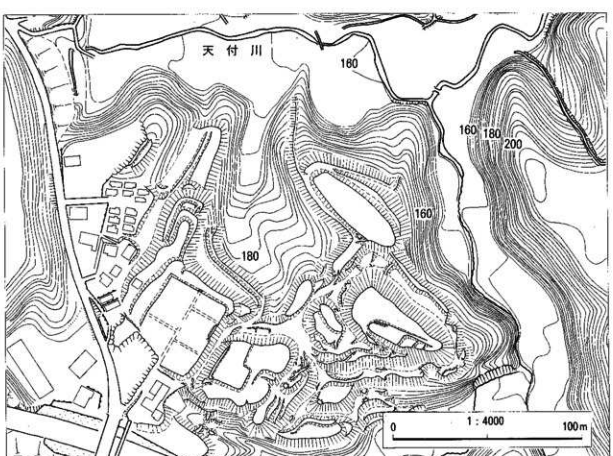
台地端部に空堀跡があるが、曲輪の形状を含めて詳細は判然としない。

### (2) 高原城［松ケ城］

高原町市街地北部の北方のびる台地上に立地する。北には天付川が流れ、天然の堀を成している。城域は約350m四方に及ぶ。

独立した曲輪群が群集する台地立地型の城郭の典型例の一つと評価できる。曲輪は地形に沿って北方が開いた馬蹄形を呈している。「本丸」と伝承されている曲輪は現在墓地となっており、館を意識したような方形の縄張りとなっている。登城口は南東側にあり、防備も東南部に集中しているようである。土塁、帯曲輪、見張り台状の突出部、武者溜り等の遺構が認められる。

当城は、永禄年間に島津氏家臣の梅北掃部が築いたとされ、その後義祐の頃に伊東氏の領有するところとなった。伊東氏48塁の一つに数えられる。木崎原合戦後の天正４（1576）年には、島津義久自ら軍勢を率いて攻略した。４日間で城主伊東勘解由は降伏して城を明け渡している。




高原城縄張り図（大学康宏原図作成　文献１所収）

古記録によると、戦闘では鉄砲が使用された他、「本丸」「二の丸」「三の丸」「取添丸」の曲輪名、「外搦い」の名称などが登場する。

伊東氏没落後は上原長門守尚近が城主となった。

文献

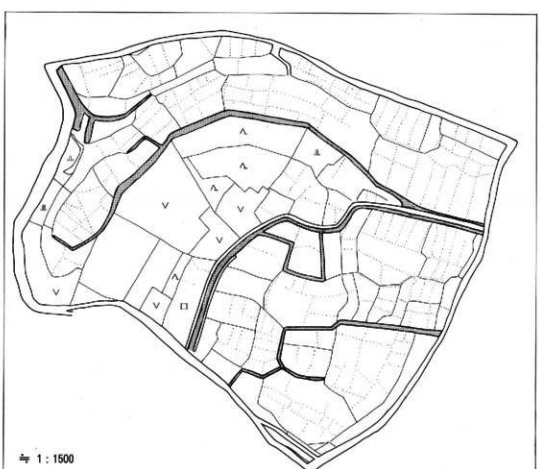
1）大学康宏　「高原城跡について」『南九州の城郭』1　1996　南九州城郭談話会

(3) 小塚城

周囲を水田に囲まれた低い丘陵上に平坦地があるが、公園や畑地となっており旧状は判然としない。ただし周囲に「上馬場」「内堀」「堀込」「堀切」といった地名が残っており、かなり広い面積にわたって城郭が築かれていた可能性がある。

(4) 諏訪屋敷

民家の周囲に方形の段差が残る。さらにその外側も堀状に落ちている様子がうかがえる。伝承によれば、現在屋敷地となっているところには神社があったという。




諏訪屋敷地積図

## 33 西諸県郡野尻町

### (1) 山城

漆野原の台地上に「山城」の字名が残る。付近に「堀切」の字名もある。遺構は不明瞭。

### (2) 紙屋城

台地の端部に立地する。北東側のみ、城原と呼ばれる台地が続く。南北方向に、大きくは5つの曲輪が連らなり、それらの間には幾重もの空堀が築かれる。標高は160m～170m、城域は南北約1400m、東西約600mに達する。

各曲輪の周囲は急峻な切岸を成しており、東～南側に秋社川、西側に城谷川が深い谷を刻むため、防御は固い。

伊東氏48塁の一つで、米良主税助が城主であった。

なお、北側の曲輪部分で発掘調査が実施され、空堀の形状が明らかとなり、掘立柱建物が計7棟検出されるなど、部分的ながら構造が解明された。また柱痕の遺存する柱穴も認められた。

文献

1）近藤　協　「紙屋城址遺跡」『新村・高山遺跡ほか　野尻町文化財調査報告書代4集』
1990　野尻町教育委員会

### (3) 漆野城

西方向に突き出た丘陵の端部に立地する。畑地となり、明瞭な遺構は残らない。

### (4) 今城

前項漆野城と秋社川をはさんで対峙する。丘陵端部に平坦地がある。基部は道路開削による破壊を受ける。

伊東氏の勢力下に築かれた「漆野切寄」か。

### (5) 古城

小丘陵の端部にある。中心部分には現在浄蓮寺があり、その北側に空堀が残っている。

### (6) 高松城

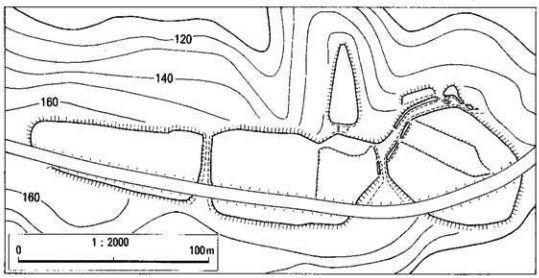
天ケ谷集落北西の山頂（標高264m）を中心に遺構が認められる。主郭の四周に空堀を築き、防御を固めている。特に北側の空堀は規模が大きい。尾根の続く北西側を警戒してのものであろう。

『日向地誌』に記載があり、岩牟礼城［30－（4）］と関連する城郭とされる。

### (7) 戸崎城

岩瀬川に向かって突き出た丘陵の端部に立地する。岩瀬川は現在ダム湖となっており、国道にかかる野尻大橋から城域を見ることができる。東端に主郭と見られる曲輪があり（標高160m）、その西側に空堀で区切られた曲輪が2面認められる。さらに、掲載図の範囲外となっているが、その西側にさらに2本の空堀があり、台地に続く西側の防御を固くしている様子がうかがえる。なお現在、城域内を国道が貫通しており、若干の破壊を受けている。

伊東氏48塁の一つで、伊東氏家臣の肥田木四郎左衛門が城主であった。




戸崎城縄張り図（崎田一郎原図作成）

### (8) 野尻城

野尻町市街地の南方の台地上に立地する。北～東方には城之下川と呼ばれる小河川が流れる。南北400m、東西800mに及ぶ、広大な城域を有する城郭で、「本城」と称される部分と「新城」と称される部分より成る。「本城」部分は図の南東側範囲外にあたる。

南側の「本城」部分は中心を県道が貫いており、東側を中心に破壊が進んでいる。東端部に大きな空堀があり、往来を遮断している。また主たる2つの曲輪の間にも大きな空堀が見られ、その北方には岩観音とよばれる磨崖仏がある。

北から西側にかけての「新城」部分は、そのさらに西側が一連の台地地形となるため、空堀を設定して防御を固めている。最も北西の側には広い平坦地があり『日向地誌』などは「本丸」と記しているが、むしろ居館的な機能を有する場所であったと考えられる。標高は167m。その曲輪の中には井戸の跡がある。

中心に位置する曲輪は前述の箇所の南東側にあり、北西および東側には土塁が現存している。周囲には腰曲輪状の平坦地が巡る。南側の小さな曲輪は櫓台的なものか。

その東側にも大きな曲輪があり、虎口も認められる。それら中心の曲輪群を画する空堀は規模が大きく、堀底道として利用された様子がうかがえる。

当城は永禄～天正年間初頭には、伊東氏家臣の福永丹波守が守っていた。伊東氏48塁の一つに数えられる。近世に入ると野尻は薩摩藩の外城（郷）となり、地頭が配された。

### (9) 陣原

地名が残るのみで、実態は不明。

### (10) 内木場城

南西方向に向かって突き出た丘陵の端部にあたる。遺構は不明瞭。

野尻城縄張り図（大学康宏原図作成）

## 34 西諸県郡須木村

(1) 城ケ尾

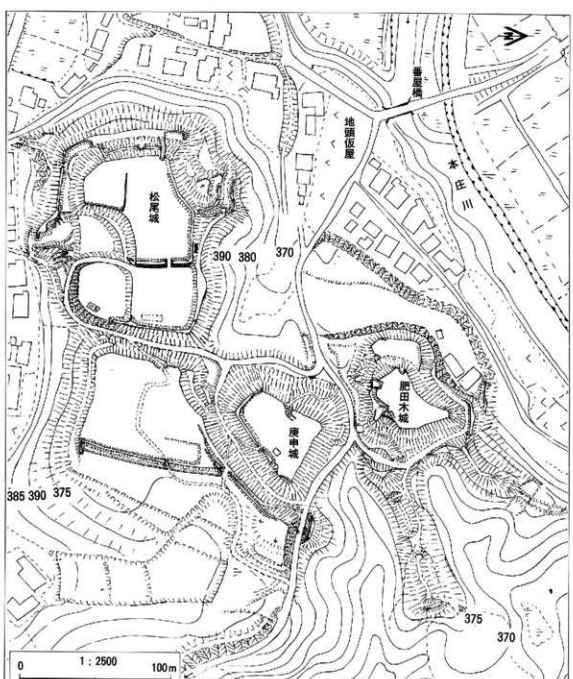
下九々瀬集落の背後の丘陵上にある。曲輪とおぼしき平坦地が認められる。

(2) 小城

西方向に突き出た小丘陵上に立地する。平坦地があるが、遺構は不明瞭。

(3) 須木城［鶴丸城］

麓集落東方の丘陵上に立地する。北～東側を綾南川が流れており、深い谷を形成する。




須木城縄張り図（八巻孝夫原図作成）

「松尾城」「鶴丸城」とも称される。

規模の大きな空堀によって独立した3区画より成る。標高は400～408m、低地との比高差は約40m、曲輪群は南北、東西とも約260mの範囲に広がる。

『日向地誌』によれば、南西より「本丸」「庚申城」「肥田木城」と名付けられており、現在、「松尾城」は「本丸」を指す呼称として用いられている。縄張り調査を行った八巻孝夫は、最も面積が広く、一部石垣が見られる「松尾城」は居住地としての曲輪、北端の「肥田木城」は高さや防御の厳重さから詰めの曲輪であったと想定している（文献1）。

「肥田木城」の西側の平坦地は地頭仮屋と呼ばれ、近世の会所が置かれていた。

伊東氏家臣の米良氏の居城で、伊東氏48塁の一つ。永禄年間の城主として米良長門守の名が挙がっている。木崎原合戦後は、島津氏領となり、いったんは伊東氏が回復するが天正4（1576）年に高原城陥落以後は島津氏領となり、近世には鹿児島藩の外城（郷）となった。

文献

1） 須木村教育委員会 『須木村遺跡詳細分布調査報告書 須木村文化財調査報告書代2集』1994

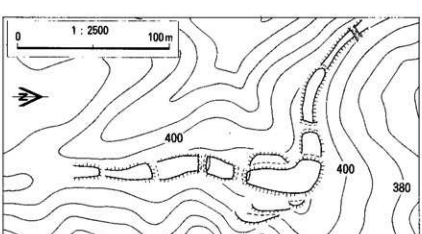
**(4) 鷲の巣城**

東方向にのびる丘陵の端部にあたる。頂部に平坦地が広がる。

**(5) 奈佐木城**

奈佐木集落のある小盆地の南西方の丘陵上に立地する。標高424mの頂部に主郭があり、その北側および南側にのびる尾根に堀切や土塁を設けて往来を断っている。特に南側は尾根が続くため、その方向に防御の主眼を置いていたことが読みとれる。南東側の頂部（標高426m）およびそれ以南には明瞭な城郭構造は認められない。

いわゆる伊東氏48塁の一つで、「那佐木城主」は肥田木三郎兵衛尉であった。野尻、三ッ山（小林）、須木とともに、真幸口を抑える重要な拠点であった。




奈佐木城縄張り図（吉本正典原図作成）

**(6) 内山城**

内山集落内の小台地上に立地する。施設等の建設により破壊を受け、旧状は大きく改変されている。

## 6．県南地区

### 35 日南市

**(1) 天神ノ尾砦**

伊比井集落背後の海岸山地中にある。遺跡詳細分布調査の結果、その所在が明らかとなった（『日南市遺跡詳細分布調査Ⅰ』 1990 日南市教育委員会）。

**(2) 瀬平ノ城**

岬状に突き出た丘陵上に立地する。主郭と見られる曲輪の標高は173m。

元弘年間に矢野下野守義元が築いたと伝えられる。天文10（1541）年伊東義祐が攻略し、家臣の上別府常陸守を配した。伊東氏48塁の一つとされる。

**(3) 烏帽子嶺砦**

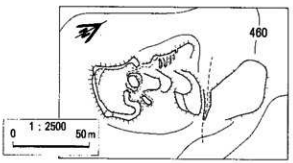
鵜戸神宮北西方の山頂に立地する。標高197mの最高所に曲輪が1面認められ、その周囲は急峻な崖となっている。

天文10（1541）年に島津忠広が築いた砦で、天文12年に伊東義祐が攻略している。

**(4) 貝殻城［水ノ尾城］**

前項烏帽子嶺砦の西方の海岸山地中にある。北西－南東方向にのびる尾根上に曲輪が展開する。主郭と見られる広い曲輪には高い土塁が築かれる。標高は482mで、そこから海岸線と北郷町方面を見渡すことができる。

天文14（1545）年、伊東義祐が飫肥に侵攻した際に築いたものとされる。



貝殻城縄張り図（吉本正典原図作成）

**(5) 鬼ケ城**

標高196mの「鬼ケ城山」とその東側にかけて城郭構造が認められる。西側は急な斜面をなす。

伊東氏と島津氏が攻防を繰り返した城郭の一つで、永禄6（1563）年には伊東氏が攻略し、家臣の小松兵部大夫を配した。

**(6) 犬ケ城**

前項鬼ケ城の北西に位置する。北郷町との境界線の通る標高253mの「犬ケ城山」を中心に築かれる。

**(7) 新山城**

標高108mの丘陵上に主郭部があり、その南東側に「二の丸」と呼ばれる曲輪がある。北東の尾根には堀切を築いて往来を遮断している。

『日向地誌』によれば、飫肥城に在城していた島津氏が、伊東氏の攻撃に備えて築いたものとされる。

**(8) 堰ノ尾砦**

前項新山城の西に接する丘陵上にある。

『日向地誌』によれば、天文17（1548）年に、飫肥城と新山城の連絡を絶つために、伊東氏が当砦を築いたという。

(9) 高佐砦

鬼ケ城などと同じく、飫肥城をとり巻く位置にある。大きくは2面の平坦面がある。

当砦も、伊東義祐が飫肥城を攻めた際に築かれたものと伝えられる。

(10) 縣城

吾田市街地の西方の、西から続く丘陵の端部に立地する。最高所の標高は70m。空堀により区切られ、曲輪が形成される。『日向地誌』には、「東ノ城」「西ノ城」「古城」といった曲輪名が見える。8区より成っていたという。現在も空堀が明瞭に残る。

(11) 東光寺砦

広渡川と酒谷川にはさまれた幅の狭い丘陵上にある。遺構は判然としないが、『日向地誌』には「小隍」を巡らしていたと記されている。

弘治3（1557）年、伊東義祐が飫肥城を攻めた際に築かれたものと伝えられる。

(12) 細砂礫城

飫肥城の北方約1kmの、南へのびる丘陵上に立地する。当城も伊東氏と島津氏の攻防の際に築かれたものである。

(13) 田間砦

低地中の独立小丘陵上に立地する。文明17（1485）年の伊東祐国による飫肥城攻めの際に築かれた砦とされる。

(14) 中ノ尾砦

飫肥城の東約1.8kmの、南にのびる丘陵端部に立地する。標高184mの山頂を中心に曲輪が展開する。

『日向地誌』によれば、天文18（1549）年に島津氏家臣の伊集院大和守が当砦を襲撃し、伊東氏方二百余名が戦死したという。城域北端にある国指定史跡の「中ノ尾供養碑」は、戦死兵の供養のため建てられたものである。

(15) 飫肥城

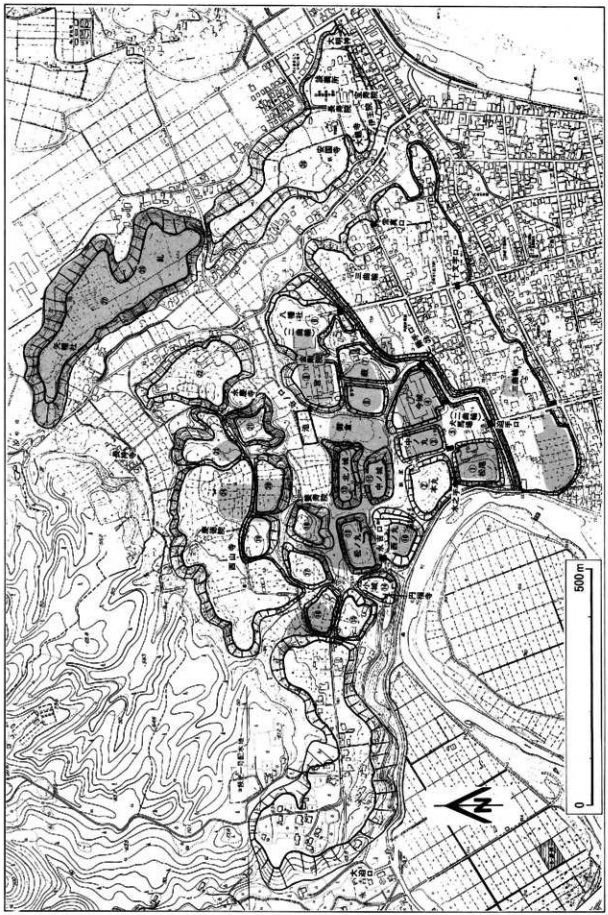
酒谷川左岸の丘陵上に築かれた大規模な城郭である。もともとは、空堀で区画された独立性の高い曲輪が展開する、「台地立地型」の城郭であったが、第2節でも触れた通り、多くの曲輪が破壊され、旧状は大きく改変されている。

室町時代以降、伊東氏と島津氏一族（特に豊州家）の間で激しい攻防が繰り返された。永禄11（1568）年には伊東義祐が攻略に成功し、子の祐兵を領主とした。伊東氏没落後は島津氏家臣の上原長門守が配された。豊臣氏の九州平定後は再度伊東祐兵が入り、以後、飫肥藩主累代の居城となった。

貞享元（1684）年の大地震で大きな損害を受けたことを契機に、近世城郭としての姿が整えられることとなった。

文献

1）澤　武人　「飫肥と飫肥城」『宮崎県地方史研究紀要』6　1980　宮崎県立図書館
2）飯田達夫　『飫肥城と伊東家』Ⅰ～Ⅴ
3）岡本武憲　「南日向の中世城郭　－飫肥城を中心として－」『宮崎考古』13　1994
4）岡本武憲　『飫肥城跡　日南市文化財調査報告書第3集』　1994　日南市教育委員会




**鉄肥城縄張り図（岡本武憲原図作成　文献 3 所収）**

⑯ 上城

楠原集落北方の丘陵（標高52m）上にあたる。「上城」の字名が残り、『史蹟調査』等は、文明17（1485）年の伊東祐国による飫肥城攻めの際に本営とした「楠原の陣」にあたるとする。

⑰ 篠ケ嶺

酒谷川の左岸に突き出た丘陵の端部を、空堀により截断している様子がうかがえる。最高所の標高は45m。ただし、中心部は土取りなどにより破壊が進行している。

字名から、永禄11（1568）年の伊東義祐による飫肥城攻略の際の本陣跡と推定される。

昭和63年、南西部の腰曲輪状の平坦地の一角で発掘調査が行われ（篠ケ城遺跡）、掘立柱建物か櫓列の一部と見られる柱穴列等の遺構が検出された。また時期比定の有力な資料となりうる遺物も出土している。

文献

1）吉本正典 「篠ケ城遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』32 1989 宮崎県教育委員会

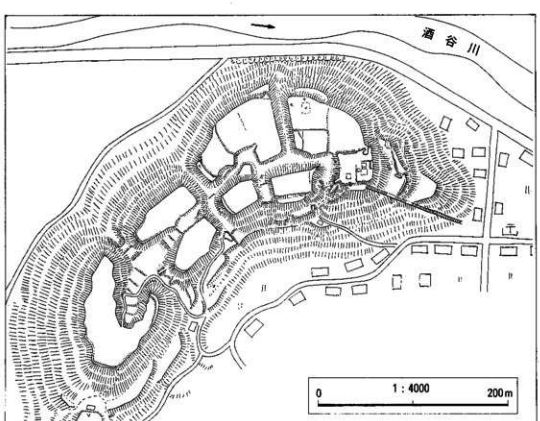
⑱ 鎌ケ倉砦

酒谷川左岸の丘陵（最高所の標高135m）上に立地する。尾根上に堀切が認められる。

伊東氏と島津氏の抗争の際の砦跡で、飫肥城と次項酒谷城の中継点となっていた。

⑲ 酒谷城

酒谷川右岸の、河岸に向かって突き出た独立小台地上に立地する。標高は87～109m、低地との比高差は約40mを測る。




酒谷城縄張り図（村田修三原図作成 文献1所収）

南北300m、東西500mの範囲内に城域が広がる。曲輪は北東～南西方向に連なっており、それらを区切る空堀は大規模なものである。

15世紀中頃までには築かれていたと見られ（『宮崎県の地名』 1997 平凡社）、交通路をおさえる要地にあったため、永く伊東氏と島津氏の争奪線が繰り広げられた。永禄11（1568）年には伊東義祐が攻略に成功し、家臣の長倉淡路守を配した。伊東氏48塁の一つ。

**(20) 巡り尾城［隈陣］**

上隈谷集落西方の山丘頂部に「隈陣」の字名がある。『日向地誌』には、酒谷村「巡り尾砦」の項に、文明17（1485）年、伊東祐国の飫肥城攻めの際、島津氏の要請で援軍を差し向けた相良氏の陣跡を「玖摩陣」と称すると記されており、それに該当するものか。

**(21) 陣の尾**

現在、遺構は明瞭でないが、谷（現在はダム湖）に向かって突き出た丘陵地に「陣の尾」の字名が残る。

**(22) 白木俣番所**

酒谷川右岸の低位段丘上にある。近世飫肥藩の番所跡で、現在も石塁が残る。当地は都城島津氏領との境の「牛の峠」に近く、監視所的な役割を担っていたと見られる。

**(23) 澤津城**

油津市街地西方の丘陵上に立地する。最高所の標高は64m、曲輪が明瞭に残る。『日向地誌』によれば、城内は3区に分かれていたという。

**(24) 新城**

下隈谷集落西方の山地中に立地する。標高のほぼ同一（138m）の南北2か所の頂部がある。

天文16（1547）年、島津氏は一族の北郷将監忠直、北郷源七郎久幸を当城に配したが、同年伊東氏が攻撃により、落城したという。

**(25) 城戸元**

城館関連の字名が残るが、詳細は不明。

## 36 串間市

### (1) 今城

揚原集落の北西約1.5kmの丘陵端部にある。「大丸」「城ノ下」等の地名や伝承が残るが、現在は畑地となり遺構は不明瞭。

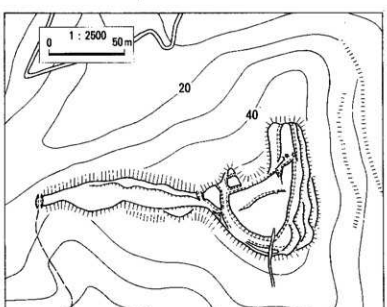
### (2) 中福良城（仮称）

標高65mの西方から続く丘陵を空堀によって截断し、端部を独立させる構造となっている。主郭と見られる中心の曲輪の周囲は急傾斜の切岸を形成している。北東側には虎口と見られる箇所があり、その下部には進入路を規制するためか、土壇とでも言うべき短い土塁がある。東側には数段の帯曲輪状の平坦地が続く。ただしここは、現在果樹園となっており、開削の影響も考慮せねばならない。

西側には、明確には2本の空堀が認められる。さらにその西側に続く幅の狭い平坦地は削平が明瞭でなく、最西端部の空堀（現在小径となっている）はやや疑わしい。

市木地区は、明との交易の中継地として栄え、現在の市木中学校の地にあったとされる龍源寺には著名な学僧である桂庵玄樹も滞在したという。

中福良城は、築城の経緯等一切不明であるが、室町時代に島津元久が「櫛間、市木城」を攻めたという（『角川日本地名大辞典』　1986　角川書店）。当城が「市木城」である可能性が高い。




中福良城（仮称）縄張り図（吉本正典原図作成）

### (3) 名谷

『都井村史』（1930）によれば、舟迫山の山頂に「堀割」があり、海上監視のための場が設けられていたという。

(4) 櫛間城

福島川の右岸、標高26mの河岸段丘上に立地する。独立した曲輪が群集する典型的な台地立地型の城郭であり、全域の面積は20万㎡を超える。13ないしは14の主たる曲輪とそれらを画する大規模な空堀は、かつては一部を除いて比較的良好に保存されていたが、近年7万㎡を対象とする事前発掘調査が行われ、その後の造成工事により多くの部分が破壊されてしまった。

城域の東側は断崖となり、その下には水田と上町の集落が展開する。さらに東側には福島川が流れており、上町集落は城下集落として城郭に取り込まれる形となっている。空堀は広いところでは幅約50mに及ぶ大規模なもので、堀底は通路として使用されていたものと推測される。

櫛間院は古くは島津荘寄郡に属しており、建武2（1335）年に在地領主の野辺忠盛が当城を築いたと伝えられる。野辺氏滅亡後、室町時代後期には島津氏が入り、以降伊東氏との抗争の舞台となる。天正15（1587）年の豊臣氏の九州平定後は、秋月種長が財部（後の高鍋）・櫛間に転封となり、種長は櫛間に入る。この時、櫛間城の改修や城下町の建設に取りかかったと考えられる。しかし種長は慶長9（1604）年には財部に移り、櫛間城は廃城となっている。このような経緯があるため、縄張り図で看取できる櫛間城の姿は、近世初頭のものであると言える。

発掘調査は平成3・4年度に行われた。掘立柱建物、柵列、虎口、土塁、土坑、溝状遺構などが検出されている。虎口には人頭大の礫が投棄されており、おそらく廃城に伴う行為の痕跡と考えられる。また土塁の積み直しや曲輪内の傾斜部分の造成工事の跡なども認められたが、それらは近世の改修の痕跡であろう。土師器、陶磁器類（輸入・国産）、銭貨、鍛冶関連品等、多量の遺物も出土している。

文献

1）宮田浩二・東　憲章「宮崎県南部における中世城郭の一例　－串間市櫛間城－」
『宮崎考古』13　1994　宮崎考古学会

御間城縄張り図（千田嘉博原図作成　文献１所収）

(5) 床稲城

次項の稲荷城の北東約1kmのところにあり、次項稲荷城の出城とされる。平坦地は認められるものの、明瞭な遺構は確認できない。

(6) 稲荷城

福島川水系の大平川左岸に位置する。屋治の集落の北方の丘陵上（標高72m）に展開している。数段の平坦面が認められるが、果樹園造成による影響も考慮すべきであろう。

建武年間に、野辺氏の重臣の熊給氏が築いたとされる。

(7) 西方城

善田川と牧ノ谷川の合流点に向かって突き出た台地上にある。付近は宅地、畑地となっており、遺構は不明瞭。

(8) 高城

「たこんじょう」と称する。分布地図には標高319mの現在テレビの中継施設のある山頂を示しているが、そこには明瞭な遺構は認められない。その北東側の山頂（標高321m）付近に曲輪と見られる平坦地が2面存在する。西側には空堀も認められる。

文献

1）本田　通　「たこんじょう（高ノ城）探求」『くしま史談会報』9　1997　串間史談会

(9) 高城

谷沿いの小さな丘陵で、城郭が存在したとの伝承がある。頂部に小さな平坦地がある。

(10) 金谷城

福島川河口の砂丘地の中にある独立丘陵上に立地する。河口には今町港があり、その掌握に関わる城郭であったと考えられる。

現在破壊が進行し、旧状については不明な点が多いが、『日向地誌』によれば南北2面の平坦地があり、北側の平坦地は一段低い。南側に登城口があったと伝えられる。また北側の平坦地北端部に池があったといい、『史蹟調査』では用水池として使用されたと推定している。

(11) 茶臼城

福島川左岸の小丘陵上にある。標高は20m。東側は道路によって分断され、独立丘陵状となっている。

現在は墓地となっており、旧状改変の度合いが著しい。『宮崎縣福島郷土史』（1954）によれば、天保年間に築かれた「遊覧」のための施設とのことである。

(12) 十郎入道

志布志湾に向かって突き出た丘陵上に平坦地が一面存在する。地名の由来は特に伝わっていない。

## 37 南那珂郡北郷町

### (1) 朝陣野

城館関連の地名が残る。田野町へ通じる峠（「大戸野越」）の西側尾根に、平坦地が認められるが、詳細は不明。

### (2) 前山砦

河川の合流点に向かって突き出た丘陵上に立地する。最高所の標高は152m、三方は断崖となり、西方のみ丘地に続いている。『日向地誌』によれば、そこに「小隘」を設けていたという。主郭と腰曲輪が認められる。

永禄8（1565）年、伊東義祐が飫肥城を攻める際に築いたと伝えられる。

### (3) 郷之原城［石崎城］

北郷町市街地北部の台地上にある。北～東方には広渡川沿いの低地が広がる。城域東側は北郷中学校地となっている。

『日向地誌』の記するところによれば、正平17（1362）年に北朝方の土持頼宣が陥れたという。その後は、伊東氏と島津氏が争い、天文14（1545）年には伊東義祐が攻略し、川崎三河守を地頭とした。

### (4) 水ケ城

坊主山から東にのびる丘陵中腹に位置する。南側には古道が通る。数段の平坦地が認められ、竪堀状に斜面を下る凹部もあるが、往時のものかどうかは定かでない。

天正15（1587）年、伊東氏が陣を構えたところ。

### (5) 谷之城

谷之城山から南西方向に続く尾根上に堀切が確認できるが、全体の状況は不明。

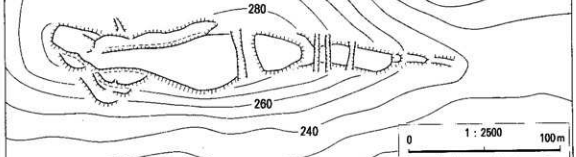
### (6) 高寺城

内野田集落北西方の山丘頂部にある。最高所の標高は85m。

『日向地誌』によれば、空堀により6つの区画に分かれていたという。

### (7) 富土原砦（仮称）

標高291mの山頂近くにある。当城から中ノ尾砦や飫肥城辺りまで見渡すことができる。細長く続く尾根上に数段の平坦地が認められ、また空堀により往来を遮断している様子がうかがえる。

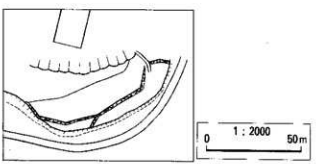



富土原砦（仮称）縄張り図（吉本正典原図作成）

(8) 富土原塁（仮称）

日南市と北郷町の市町境の峠付近に位置する。峠道に向かって張り出す形で曲輪があり、切岸部分に石垣が築かれている。

文献や伝承は残っていないが、『日向地誌』には「富土腹間道」が見え、「飫肥城北門の要害タルヲ以て行旅ノ往来ヲ禁ス」とある。近世の番所的な施設であろうか。




富土原塁（仮称）縄張り図（吉本正典原図作成）

(9) 玖摩陣

『日向地誌』に記されている郷ノ原村の「古砦（玖摩陣）」は、位置関係から見て当地にあたると考えられる。広渡川に面する丘陵上に平坦地が認められるが、詳細は不明。

(10) 古砦

『日向地誌』の記述によれば、玖摩陣の北30町のところにあるとされる。現在「陣ノ平」の字名の残る丘陵端部がそれにあたるものか。

『日向地誌』には、現在の北郷町内に３か所の「古砦」があったと記されている。

## 38 南那珂郡南郷町

### (1) 南郷城

南郷町と日南市の市町境の山丘上にある。東方は大堂川に臨む。

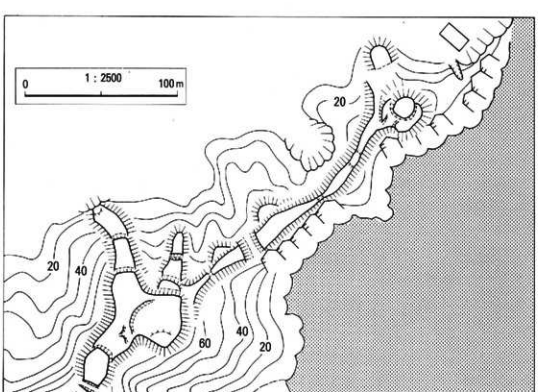
最高所の標高122mの地点には主郭と見られる平坦地があり、西側切岸には石垣が築かれている。石垣は基底からの高さが約3m、北西部も墨線は屈曲が見られ、いわゆる「横矢の縄張り」となっている。積み方は比較的乱雑である。この主郭部には電波塔が建てられており、若干の破壊を受けている。その北側には曲輪が数段にわたって続くが、畑地開削の影響が少なからずあるようである。城域の北端部には大きな堀切を築き、往来を断っている。「堀切」という字名も残る。

慶長6（1601）年、伊東氏が、いったん攻略した宮崎城を幕命により高橋元種に返却することになった際に、当城を築いて秋月氏、島津氏に備えたと伝えられる。

### (2) 目井城

天然の良港である目井港の南東側に突き出た岬状の突端部に立地する。ところどころ岩盤が露出している。主郭と見られる部分は標高80mの山丘中腹で、そこから北方向に小さな曲輪が連なる。尾根には大きな堀切を築いて往来を断っている。北東端部には標高50mの曲輪があり、その周囲には帯曲輪状の小平坦地が巡っている。その北北西には神社があるが、そこも元来曲輪であった可能性がある。

目井津は明との貿易港ともなった重要な港であり、目井城はその掌握に関わる城郭であったと考えられる。そのため、文明年間頃から伊東氏と島津氏による攻防戦が繰り返された。




目井城縄張り図（吉本正典原図作成）

永禄年間には伊東氏の支配下となった。伊東氏48塁の一つとされ、目井地頭が当城を守った。永禄年間の城主は河崎駿河守であった。伊東氏没落後は島津氏の領有するところとなった。

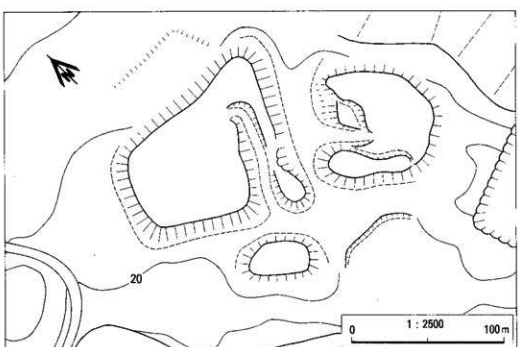
(3) 陣之城

高畑山と呼ばれる山丘上にある。詳細は知り得ない。

(4) 谷之口城

標高30mの南方向にのびる台地端部に立地している。先端に位置する曲輪は一部削られている。主要な曲輪はそれを含めた4つであると見られ、うち中央と北側の2つの曲輪にはスロープ状虎口が認められる。中央の曲輪の西および東面の塁線には土塁が残存している。また北側には櫓台状の張り出し部があり、この曲輪に入るスロープ状虎口に強力な横矢をかけている。北側の曲輪との間には自然の地形を利用した大きな空堀が築かれている。

台地立地型の城郭の好例と言えよう。




谷之口城縄張り図（千田嘉博原図作成　南郷町教育委員会提供）

(5) 城之内

前項谷之口城の谷向かいの畑地に「城之内」の字名が残る。谷之口城に関連するものか。

(6) 湖雲ケ城

陣之城より南西に続く山丘上に立地する。北側に空堀がある。天正年間、肝付氏の家臣、薬丸湖雲が築いたという。

(7) 和田城

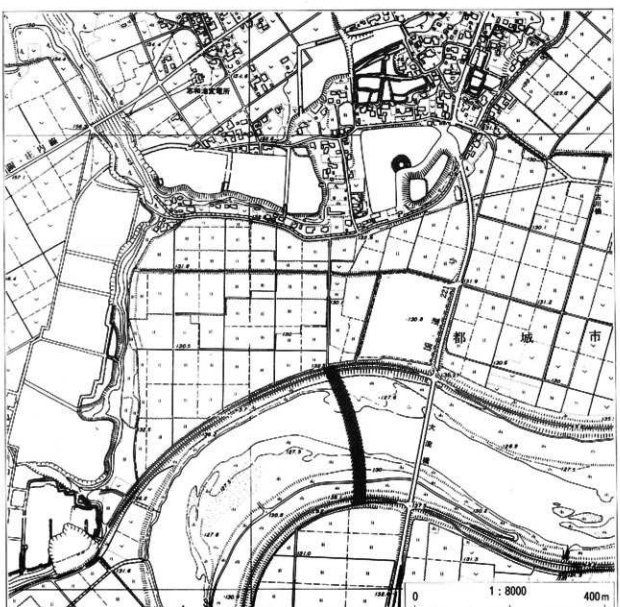
和田集落西方の丘陵端部にあったと伝えられる。

## 39 都城市

### (1) 志和池城

都城盆地北東部の、大淀川と丸谷川にはさまれた台地の東端部には、低地との比高差10m強の断崖を利用したいくつかの城館跡が見られる。この志和池城や(2)の森田陣、(3)の野々美谷城、(4)の児玉屋敷などがそれである。

志和池城は、都城島津家に伝わる絵図によれば「本丸」「二丸」「小城」「西椿」「新城」から成っていた。現在「二丸」などは壊滅状態となっている。「小城」「西椿」「新城」については空堀などの施設が残っている。




志和池城・森田陣縄張り図（千田嘉博原図作成　文献1所収）

当城はもともと北原氏の属城であったが、天文年間には北郷忠相が大軍を率いて奪取し、北郷氏の領有するところとなった。慶長４～５年の庄内の乱では、伊集院氏の重要な拠点となり、当城を囲んで包囲戦が行われた。取り囲む北郷家久方に対し、伊集院忠真方は籠城戦をよく持ちこたえたものの、慶長５年２月５日には城内から北郷家久に対して下城の申し出があり、開城。これをきっかけに伊集院氏の敗北が決定付けられた。

現在確認できる諸施設は、この庄内の乱の緊張状態により生み出されたものと考えられる。また現状では痕跡は認められないが、北郷家久が攻略した「西椙」には「本丸」方向を見渡すための「勢櫓」が築かれていたという。

文献

１）千田嘉博 「志和池城跡・森田陣跡」『都城市文化財調査報告書第45集　都城市の中世城館跡』
1998　都城市教育委員会

**(2)森田陣**

都城島津家に伝わる絵図によれば、志和池城の南西方向の台地角（東および南方は崖面となる）に「御陣」と呼ばれる箇所があり、現在も空堀などの痕跡を見ることができる。特に北側の空堀は、幾度も鍵の手に折り曲げて死角のない縁線を造りだしている。絵図では、この「御陣」の北～北東方向（志和池城との間）にも「諸軍勢陣」や「嶋津中務殿陣（忠豊陣）」「北郷陣」などが描かれている。さらに、志和池城の北東方向にも「京陣」「豊後陣」「嶋津右馬頭殿征久陣」などがあり、この一帯は広範囲にわたって陣城が遺存する重要な場所と言える。

文献

１）３９－(1)に同じ

**(3)野々美谷城**

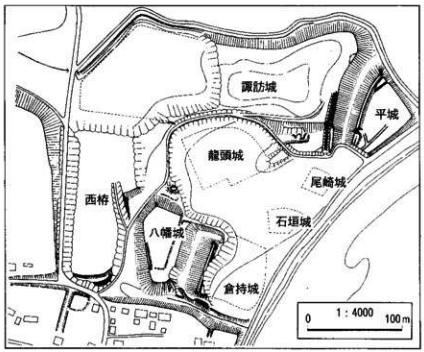
小さな谷によって切り離された独立丘状の台地上に立地する。都城島津家に伝わる絵図によれば、８つの曲輪にそれぞれ「龍頭城（本丸）」「八幡城」「石垣城」「倉持城（二の丸）」「尾崎城」「諏方城」「平城」「西椙」の名称が付されている。この区分は現在の地形に対応させることができるが、残念ながら土取りなどのために多くの曲輪が破壊を受けている。

平成元年に「西椙」の一部について発掘調査が実施され、掘立柱建物や溝などの遺構が検出されている。

古くは肥後の相良氏が築城し、その後樺山氏、伊東氏、北原氏などが支配下に置いた。天文11（1543）年に北郷忠相が攻め取った後は北郷氏領となり、庄内の乱後は内地頭を置いて当地を支配した。付近に「籠」の地名が残る。

文献

１）柴畑光博　「野々美谷城発掘調査概報」『都城市文化財調査報告書第11集
平成元年度発掘調査報告』　1990　都城市教育委員会




野々美谷城縄張り図（千田嘉博原図作成　文献1所収）

**(4) 児玉屋敷**

前項野々美谷城の北東台地上にあり、間に小さな谷が入る。遺構は明瞭でないが、一連の台地端部の城館跡の一つと考えられる。

**(5) 上大五郎遺跡**

丸谷川右岸の低位段丘上に立地する。発掘調査の結果、平面方形を呈する溝で囲まれた館跡と推定される遺跡であることが判明した。溝は、最盛期には二重になっていたようである。南辺の中央付近には入り口と見られる通路があり、門跡と推定される2基の柱穴も検出された。内部の掘立柱建物は、切り合い関係から3時期ほどの変遷が確認できる。溝の覆土中には桜島起源の文明年間のボラ土が堆積しており、少なくとも15世紀後半には衰退傾向にあったようである。

文献

1）東　憲章　『都城市文化財調査報告書第31集　丸谷地区遺跡群　下大五郎遺跡』1995
都城市教育委員会

**(6) 丸谷某屋敷**

天保年間に都城島津家によって編纂された『庄内地理誌』に、丸谷川左岸にあった「丸谷某屋敷」の記述があり、絵図も掲載されている。北・東・西の三方を堀で囲まれだ、いわゆる方形館で、南側には入り口が取り付く。

下記文献にトレース図が掲載されている。

文献

1）重永卓爾　「日向国庄内に於ける中世城郭について　－都城盆地の中世城郭史序説」
『南九州文化』29　1986　南九州文化研究会

(7) 茶臼ケ陣

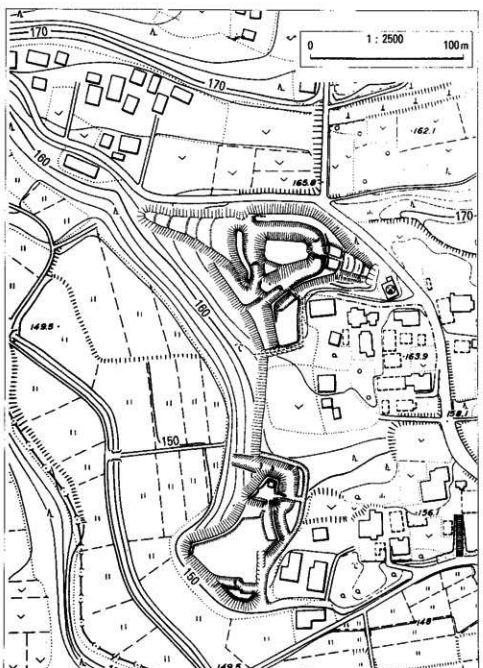
大淀川左岸に「茶臼ケ陣山」（標高195m）の地名が残る。頂部は削平を受けている。

(8) 高木屋敷

扇状地端部にあたる。地名が伝わるのみで、遺構は不明瞭。

(9) 新宮城

東方にのびる台地の南縁に築かれている。標高は最高所で約180mで、北西側に続く台地と大きくは変わらない。また低地との比高差も30m程度で、これもさして大きいとは言えない数値である。




新宮城縄張り図（千田嘉博原図作成）

北側と南側の2か所に城郭構造が認められ、その間は畑地となっている。便宜的に「北城」「南城」と名付けて記述する。

「北城」では主郭と見られる北端部の曲輪の周囲に幅10mを超える空堀が巡る。その空堀の東側では堀底に段差や土塁が認められる。南側の曲輪には北縁部に土塁が築かれ、開口部に虎口が設定されている。

「南城」は北と東側に二重の空堀を巡らせる。外側の空堀は浅く、幅も狭いことから通路として使用されたと考えられる。内側の空堀は「北城」の主郭まわりに匹敵する規模で、北西側で竪堀となっている。北側の曲輪は三方を土塁で守られる。南側の曲輪は広い面積を有するため、屋敷地として利用された可能性がある。さらにその南側にも大きな空堀があり、横矢の折れが認められる。

なお、「北城」と「南城」の間の平地には遺構等は認められないものの、平時の居館が存在した可能性が指摘できる。

文献では建武年間頃にあらわれ、館城の特徴を示す一方、戦国期の改修の痕跡も明瞭に認められる。

文献

1）千田嘉博　「新宮城跡」『都城市文化財調査報告書第45集　都城市の中世城館』1998
都城市教育委員会

**(10) 蒲生屋敷［大根田屋敷］**

台地端部にあたる。遺構は不明瞭。

**(11) ニタ元遺跡**

丘陵を大溝で裁断する。大溝の覆土中位に文明年間のボラ土が堆積しており、廃絶時期を示すものと考えられる。

**(12) 馬籠陣**

台地端部に立地する。かつて空堀で区画された曲輪が1面認められたという。

**(13) 岩満屋敷**

台地端部に立地する。畑地の中に空堀様の凹部が残る。

**(14) 安永城**

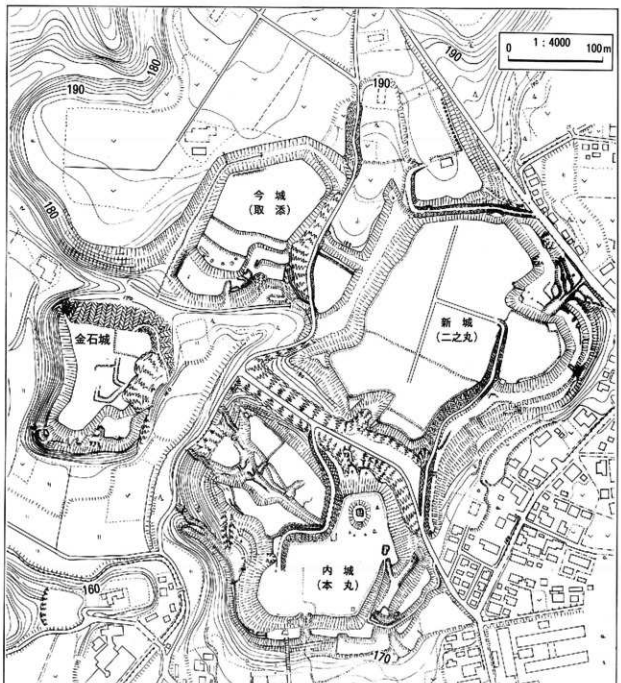
南にのびる諏訪原と呼ばれる台地の端部（「城山」）に立地する。南側には庄内の集落が広がる。城域は南北、東西とも約600mに及ぶ。典型的な台地立地型の城郭で、独立性の高い、主たる4つの曲輪により構成される。

都城島津家に伝わる絵図にはその状況が描かれ、「本丸（内城）」「二之丸」「金石」「取添」という曲輪名が記されている。それぞれの曲輪の要部には腰曲輪を配し、防御を固めている。曲輪を区切る空堀は大規模で、「本丸（内城）」と「金石」の間には自然の谷が入る。

「取添」の北北西約0.6kmの諏訪原台地の頸部に、「外堀」と呼ばれる堀切がある。『庄内軍記』所収図にも描かれており、外郭線を形成するものと考えられる。

なお、「金石」の曲輪で発掘調査が実施され、現在では土取りにより破壊されてしまった。発掘調査では掘立柱建物や道路遺構、鍛冶工房跡などが検出された。遺物の年代は、大きくは14世紀末～16世紀代、および17世紀代の2期に分かれるという。

応仁2（1468）年、北郷敏久が築いたとされ、代々北郷氏の支配下にあった。庄内の乱の際は伊集院氏方の拠点となり、軍師の白石永仙が籠城した。




安永城縄張り図（八巻孝夫原図作成　文献１所収）

文献

1）横山哲英編　『金石城跡　都城市文化財調査報告書第19集』　1992　都城市教育委員会

2）八巻孝夫　「安永城跡」『都城市の中世城館　都城市文化財調査報告書第45集』1998　都城市教育委員会

⑮ 胡麻ケ野城（仮称）

三方を低湿地に囲まれており、北東側のみ台地に続くため、そこに堀切を設けて防御性を高めている。頂部の標高は299m、低地との比高差は38m。

頂部に主郭部があり、その南北にも曲輪を配する。西側にも小曲輪がある。主郭部から南北両方向に箱堀状の溝が走っている。

なお、縄張り図は下記文献1に掲載されている。

文献

1）下田代清海　「胡麻ケ野城跡」『都城市の中世城館　都城市文化財調査報告書第45集』1998　都城市教育委員会

⑯ 陣ケ岡山

城館関連の地名が残るのみで、遺構は不明瞭。

⑰ 松原地区第1遺跡

東と南の二辺は直角に曲がる大溝で、他の二辺は台地端部の崖を利用して方形の館跡を形成している。形成時期は13世紀後半と見られる。

文献

1）矢部喜多夫他　『松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡　都城市文化財調査報告書第7集』　1989　都城市教育委員会

⑱ 久玉遺跡

「コ」字状に巡る大溝により区画する館跡と見られる。北西側は崖となる。大溝の覆土中位に文明年間のボラ土が堆積している。

文献

1）矢部喜多夫　「久玉遺跡」『昭和63年度遺跡発掘調査概報　都城市文化財調査報告書　第10集』1989　都城市教育委員会

⑲ 祝吉御所

島津氏の祖、惟宗忠久の居館跡と伝えられるところである。県指定史跡。遺構は明瞭でない。

⑳ 上ノ園第2遺跡

扇状地上に立地する。付近に「弁済使」の字名も残る。

発掘調査の結果、中世の方形館の隅角部と見られる、屈曲する二重の溝状遺構が検出された。枡形状の虎口空間や、門跡、建物跡、特殊土坑（園池か）などの構成施設が確認されている。

文献

1）横山哲英　『上ノ園第2遺跡　都城市文化財調査報告書第27集』　1994　都城市教育委員会

㉑ 秋永屋敷

扇状地上に立地する。『庄内地理誌』に絵図が掲載されており、現在も方形の地割りが残る。

㉒ 城ケ尾

台地の端部にあたる。城館関連の地名が残るのみで遺構は不明瞭。付近に「木之前」の地名もあり、「木」は「城」の転訛とされる。

### (23) 都之城

南から北へ流れる大淀川とその支流の萩原川の合流点の左岸（西岸）に展開するシラス台地上に築かれている。標高は150m～160mで、低地面との比高差は約20mを測る。

北郷氏（都城島津氏）の本城で、都城盆地統一の拠点とされた。文書・絵図等によれば、「本丸」「西城」「中之城」「外城」「南之城」「新城」「池之上城」「中尾之城」「中尾城」「小城」「取添」といった曲輪から成り、築城当初は「本丸」から「南之城」までの５つの曲輪であったものが、後に「新城」から「小城」までが増築され、最終段階に「取添」が追加されたと伝えられる。現在「本丸」「西城」「池之上城」「中尾之城」「中尾城」は、ほぼ原形を保つが、それ以外は破壊を受けている。

遺構としては、「中尾之城」「中尾城」とその西側の台地を分断する空堀と、「池之上城」と「中尾之城」を区切る空堀（長池）が壮大な規模で残っているほか、「池之上城」「中尾之城」「中尾城」の各曲輪には枡形虎口が認められる。また、現地の遺構と極めてよく一致する、都城島津家に伝わる絵図（近世初頭成立）によれば、それらの虎口から各曲輪内に配置された家臣の屋敷地へ、「L」字ないしは「T」字状の通路がのびていたことがうかがわれ、それぞれの曲輪内における屋敷割が把握できる。台地立地型城郭での曲輪の使い方を推定できる非常に貴重な事例である。

上記の曲輪群の内、「本丸」「西城」「中之城」「池之上城」「取添」において、面的な発掘調査が実施された。いずれの調査においても、曲輪内で箱堀状の道路が検出されており法面には土止めの石積み列が認められた。

曲輪平坦面の約６割について調査が行われた「本丸」では、前記の絵図には記載されていない15世紀代の東側へ下る道路、階段状遺構、門跡が検出され、さらに柱穴内に礎盤を持つ掘立柱建物や輪宝墨書土器の埋納された地鎮・鎮壇遺構、布掘り工法の塀跡、鍛冶工房跡、土坑などの遺構が検出された。遺物も多量に出土しており、その年代は14世紀から17世紀初頭にかけてのものが大半を占める。その中で、織豊期の桐紋軒瓦や高級品とされる天目椀、赤絵磁器、彩釉陶器などが注目される。

また「中之城」からは三彩水鳥形水注が、「池之上城」からはタイ・ベトナム産の陶器が出土している。

文献


1）岩永哲夫他　「都城・中之城跡発掘調査」『都城市文化財調査報告書第３集』　1983　都城市教育委員会

2）柴畑光博　「都之城跡（主郭部）－第１～４次調査概報」『都城市文化財調査報告書　第13集　平成２年度遺跡発掘調査概報』　1991　同上

3）重永卓爾　『都城市文化財調査報告書第15集　都之城取添遺跡発掘調査概報』　1991　同上

4）八巻孝夫　「都之城について　縄張検討による現状把握」　２に同じ

5）八巻孝夫　「都之城跡」『都城市文化財調査報告書第45集　都城市の中世城館』　1998　同上